

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
紀	要		1	

1987

縄文時代中期特集

- 梨久保式土器 再考……………三上徹也 (1)
- 五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ……………寺内隆夫 (24)  
—型式変遷における—視点—
- 埋蔵と境界性について……………百瀬忠幸 (42)
- 研究ノート  
四石研究のために(1)—学史—……………野村一寿 (66)

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
紀	要		1	

1987

縄文時代中期特集

- 梨久保式土器 再考……………三上徹也 (1)
- 五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ……………寺内隆夫 (24)  
—型式変遷における—視点—
- 埋甕と境界性について……………百瀬忠幸 (42)
- 研究ノート  
凹石研究のために(1)—学史— ……野村一寿 (66)

財団法人

長野県埋蔵文化財センター



## 序

昭和57年4月に発足した本センターも、6年目に入り組織・機構は勿論、主となる事業の内容等において、発足時に較べると格段の飛躍・発展のあとがみられます。これは関係機関・各位の御指導・御協力の賜と、心から感謝申し上げる次第です。

さて、こうした中で主体的事業である発掘調査をとりまく状況は、昨今の著しい資料の急増化に対応して、調査の方法・技術の進歩向上は目覚ましく、関係各分野の学問的發展も驚くべきものがあります。そのためセンター職員も自己研修は勿論、各種外部研修に積極的に参加し研鑽を重ねていますが、行政に携わる一職員であるとともに、一面研究職として常に学術的水準の向上を目指すことが課せられており、その成果も早い機会に公表されるのが望ましいといえます。

本センターも発足当初より、こうした埋蔵文化財の研究やその成果の普及公開活動を標榜してきましたが、毎年予想以上の発掘調査が続き、時間的にその余裕があまりありませんでした。その中で、発足年次より年4回機関誌的役割を果たす「長野県埋蔵文化財ニュース」を、また昭和59年度から年1回、「長野県埋蔵文化財センター年報」を刊行し、遂次事業の結果や県内埋蔵文化財の最新情報を提供するよう努力してきました。

そこでこのたび、本センターのもう一本の柱ともいうべき研究誌として「紀要」を発刊することになりました。紀要の性格づけについては議論もあるところですが、今回は若い新進気鋭の職員による論文3・研究ノート1を収録しました。期せずして本県埋蔵文化財の常に中心テーマとなる「縄文時代中期、特集となりましたが、今後は広範囲な分野からのレポートを逐次発表する予定です。

この紀要の刊行に際し、関係各機関から寄せられました御協力・御援助に対しお礼申し上げますとともに、今後の御叱正・御鞭撻を切にお願いする次第です。

昭和63年3月20日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 村 山 正



## 梨久保式土器 再考

三上 徹也

I はじめに	2 沈線文系土器
II 中期初頭土器研究の課題	3 縄文系・沈線文系両要素をもつ土器
III 研究の視点と方法	V 中期初頭土器群の再認識
IV 中期初頭土器群の変遷	1 五領ヶ台式土器について
1 縄文系土器	2 梨久保式土器の再認識

## I はじめに

鶴の土器—かつて藤森栄一氏は縄文時代の中でも前期から中期への過渡期が大きな時代の転換期ではないかと予想した。「鶴の土器」とは、そこに生まれた何とも怪奇で特徴的な土器に対して、比喩的に与えられた表現である(藤森 1935)。そして、現在独特の響きをもって便宜的に前期から中期にかけての土器を指して使われる、中期初頭という表現も、実は「縄文時代研究の中で一般に使われるが(藤森はその段階ではそうした用語自体は使っていないが)、その概念は単なる土器の問題ではなく、土器の背後にある文化の問題として、すでに半世紀近くも前に藤森が指摘していた」(戸沢 1984)ということ忘れてはならない。藤森氏の文化史的視点を含んだ、大きなこの転期についての研究は、実はそれが生産形態の相異によるもので、確かに遺跡立地の違いが時間の差、すなわち土器型式の違いとして現れているのだという実証的な研究成果を生み(戸沢 1953)、そして今、藤森氏の予想を裏付けるかのように、縄文時代前期から中期の時代観は大きく変わりつつある。しかるに、今だ中期初頭の一端を担った、こと土器に関しては、依然として「鶴の土器」であり続けたままではないだろうかという不安を覚えるのである。

縄文時代中期初頭という表現は、文字通りにいえば中期の初めのごく短い時間帯を指すわけであるが、そこに生じた土器の諸型式についてみれば、特に関東や中部地方においては、そこに包括されるであろう型式名は多く、型式内容の理解も一様ではない。しかし、そうした煩雑な様相も、

実は「各地方ごとに設定されている既存の土器型式は内容的に共通する要素を多く含んでいる」(山口 1980)という指摘にもあるように、研究史の混乱をよそに実際はもっとすっきりとまとめられるのではないだろうか、該期の土器を改めて見直すことによって感ずるようになった。

折しも、筆者は先に岡谷市梨久保遺跡の報告書作成、特に縄文時代中期初頭の土器をまとめる機会に恵まれ、中期初頭土器について考えたことがあった(三上 1986b)。若干の研究史をひもとき、梨久保遺跡から出土した土器を見て最も感じたことは、梨久保式土器の設定された当時の型式観(戸沢 1951)が、現在までどれだけ正鵠に理解されているだろうかという疑問であった。一方、極めて単一的な型式内容を示す踊場式や、型式内容のはっきりしなかった五領ヶ台式は、時間的な、また系統的な吟味がほとんど行われぬまま、型式名のみが先行してしまっているのではないかという危惧をもった。従って、報告書作成時には従来の型式名称を一旦白紙に戻し、再度梨久保遺跡の保有する土器を観察し、次のように整理した。中期初頭土器群には、文様要素として沈線文を主体とするものと、縄文を主体とするものの大きく2つの土器群がそれぞれの系統をもって存在し、それら2つの流れがセットになって中期初頭の土器組成を成しているのではないかと。そして、そうした土器組成が、梨久保遺跡をこえて広く吟味・検討された上で該期に普遍的な様相であることが確認された時、改めて中期初頭土器に与えられるべき適切な型式名称が再検討されてくるはずでは

ないかとその問題の結論を保留にしたのであった。

本稿は、以後も続いてこの問題を考えるために、他の資料や事例にあたる中で得られた、中期初頭土器群の編年・系統・型式名称、そして中期中葉土器への発展性・継続性についての考えをまとめたものである。

## II 中期初頭土器研究の課題

縄文時代中期初頭土器の研究史については多くのすぐれた記述があり(山口 1978、松村 1974等)、また私自身も梨久保遺跡の報文中にその概略を述べているので、ここではそれらにゆずって省略し、主に研究史上の課題をいくつかにしぼって記すことにしたい。

縄文時代中期の初めに、ある特徴をもった一群の土器が存在するという見通しは古くから認識され、昭和11年の山内氏の編年表(山内 1936)の中には「五領ヶ台式土器」としてすでに登場していた。これは八幡一郎・三森定男両氏の発掘資料に基づくものであったが、その詳細な記述はなく、その内容をうかがい知ることはできない。五領ヶ台式土器の内容が公となるまでに、さらに10年以上の歳月を待たなければならなかった。「八幡氏の資料は今日まで未発表であり、ここに初めて……中略……(五領ヶ台貝塚の資料を)紹介するに至った次第である」(江坂 1949)という昭和24年の江坂氏の報文がそれである。

一方、時あたかも軌を一にするがごとく、昭和26年には梨久保遺跡の調査報告書が諏訪考古学研究所によって刊行された。そのなかで戸沢充則氏は、主体となった中期初頭に位置付くとみなされる特徴的な土器に対し「梨久保式土器」として、型式の設定を行った(戸沢 1951)。

こうして、奇しくも中部・関東両地域から時を同じくして明らかにされた2つの土器型式であったが、その後30年、学界での理解は決してスムーズといえるものではなかった。

特に中部地方では、中期初頭土器群をとりまき、過熱なまでの関心が注がれた。その成果は九兵衛尾根式・唐沢式・神殿式等といった多くの型式名の誕生という形で現れたが、皮肉にも研究者の意志とは裏腹な情況を生むことになった。「過去に設定された型式が、研究の進展や新資料によ

って実態にそぐわなくなることは、ある意味で避けられないが、該期の研究はこのような実態にそぐわなくなった型式を再検討して問題を解決しようとするのではなく、むしろ新型式を設定して一気に解決しようとする傾向が強かった。しかし、解消しようとした型式は依然として使われ続け、新たに設定した型式もまた実態にそぐわなくなるという悪循環をくり返してきた。」(池谷 1981)という一文はそうした状況を端的に現わすものである。

対照的に関東地方では資料的に恵まれなかったことにも起因するのであろうが、五領ヶ台式土器について、20年以上もの研究の空白があった。この長い沈黙を破ったのが、昭和47年に出された今村啓爾氏による宮の原貝塚の調査とその研究である。この成果は「今後の関東・中部地方の中期初頭土器研究は、宮の原貝塚で得られた成果を敲き台として推し進められて行かねばならないだろう。」(松村 1974)と言わしめる内容と意義を含み、関東地方においてはたちまちのうちにこの五領ヶ台式の概念が広まるのであった。やがて今村氏による五領ヶ台式土器への取り組みは、その後の資料の追加や若干の修正がなされ、昭和60年、「五領ヶ台式土器の編年」として補強されて行くことになった。

こうして、研究の趨勢は混乱した中部地方の編年を一端棄却し、時期細分の設定という点で一歩先んじた感のある五領ヶ台式の名称をもって中期初頭土器群を指そうとする風潮が展開し始めるに至った。しかし、ここで筆者は現在いわれる五領ヶ台式土器の型式概念には、2つの大きな問題を含んでいると考える。その1点は、そもそも本来の五領ヶ台式といわれた内容自体、少ない資料であったため研究者間に共通の認識がもたれにくかったが、沈線文や、交互刺突文によって構成される土器がその主体を占めていることは当初の資料を見ても明らかで、今村氏、山口氏らによってもそのことは確認されている。そうした一群を本来の五領ヶ台式とすると、それらは例えば土器の系統という点で、または組成という面で、果たして独立した型式としてふさわしいのかという問題がある。2点目として、宮の原貝塚の調査により、本来の五領ヶ台式の直前に、層的に古い別な一

群のあることが確認されたとした今村氏は、本来の五領ヶ台式土器をⅡ式とし、宮の原貝塚で得られた資料を五領ヶ台式Ⅰ式として、五領ヶ台式土器の概念を拡大するのであるが、はたしてⅠ式の内容が従来になく、新たにその設定が必要であったものか、すなわち研究史的に矛盾がないのかという疑問がある(註1)。

結論的にいうと、筆者はその双方共に否定的な見解をもっており、こうした疑問が本論を草したひきがねの1つにもなっている。そしてこの問題の解決には系統論、型式論ぬきにしては解決でき得ないと考ええる。今村氏のいわれる五領ヶ台式土器論が、今最も進んだ五領ヶ台式の成果であるとしたら、それさえ「系統観の不在」という指摘がある(山口 1978、池谷 1981)ように、益々前2者の問題の解決が急務となる。今村氏の「五領ヶ台式土器の編年」(今村 1985)では五領ヶ台式土器を細かく細分したが、その反面細分間にはつながりがなく、よってその連続性や系統性が不明瞭で、理解できにくい。系統、型式観が欠けているという指摘の出る所以である。従って、より有効と思われる系統、型式観を呈示すること、そして、研究史の正しい理解を行うことが、五領ヶ台式土器ひいては中期初頭土器に対する正しい認識を行う第一歩であると考えた。その後、先に2つの問題点に確かに問題の所在することが明らかとなった場合には、中部地方にあった幾つかの型式群とも合わせ、再度中期初頭土器群に対する型式の見直しが必要となってくるはずである。

この他にもう一点、中期初頭土器研究の課題として、踊場式土器の問題があげられる。沈線文を主体とするこれらの土器が、編年的にどう位置付くのか、そして、一般的には中葉期前半に編年される平出第Ⅲ類A土器に続くと予測されながら、どう系統的につながっていくのかという問題である。つまり、山内清男氏(1937)、藤森栄一氏(1956)、山口明氏(1978)、今村啓爾氏(1972)(註2)等は、踊場式をいわゆる梨久保(五領ヶ台式)以前におくが、一方で、平出第Ⅲ類A土器は、この系統上にある土器だと考えられている(註3)。ならば、時間的に相隔たる両者の土器は、いったいどんな経緯をたどって変化したのか。踊場式は果たして、いわゆる梨久保式にいったんはつながるのか、それと

も独自の系統を維持するのか、いずれにしろ両者の時間は整然と埋められなければならない。しかし、この点については今までほとんど触れられたことがない。いわゆる踊場式土器の抱えた問題の解決は、中期初頭土器群全体の動きの中で把握され、理解されるべきで、そのとらえ方いかんによっては、中期初頭土器の全体像をも左右することになりかねないとさえ考える。

こうした「五領ヶ台式」の是非、「踊場式」の扱いという2点の大きな課題をふまえた上で、中期初頭土器群の再整理を行いたい。

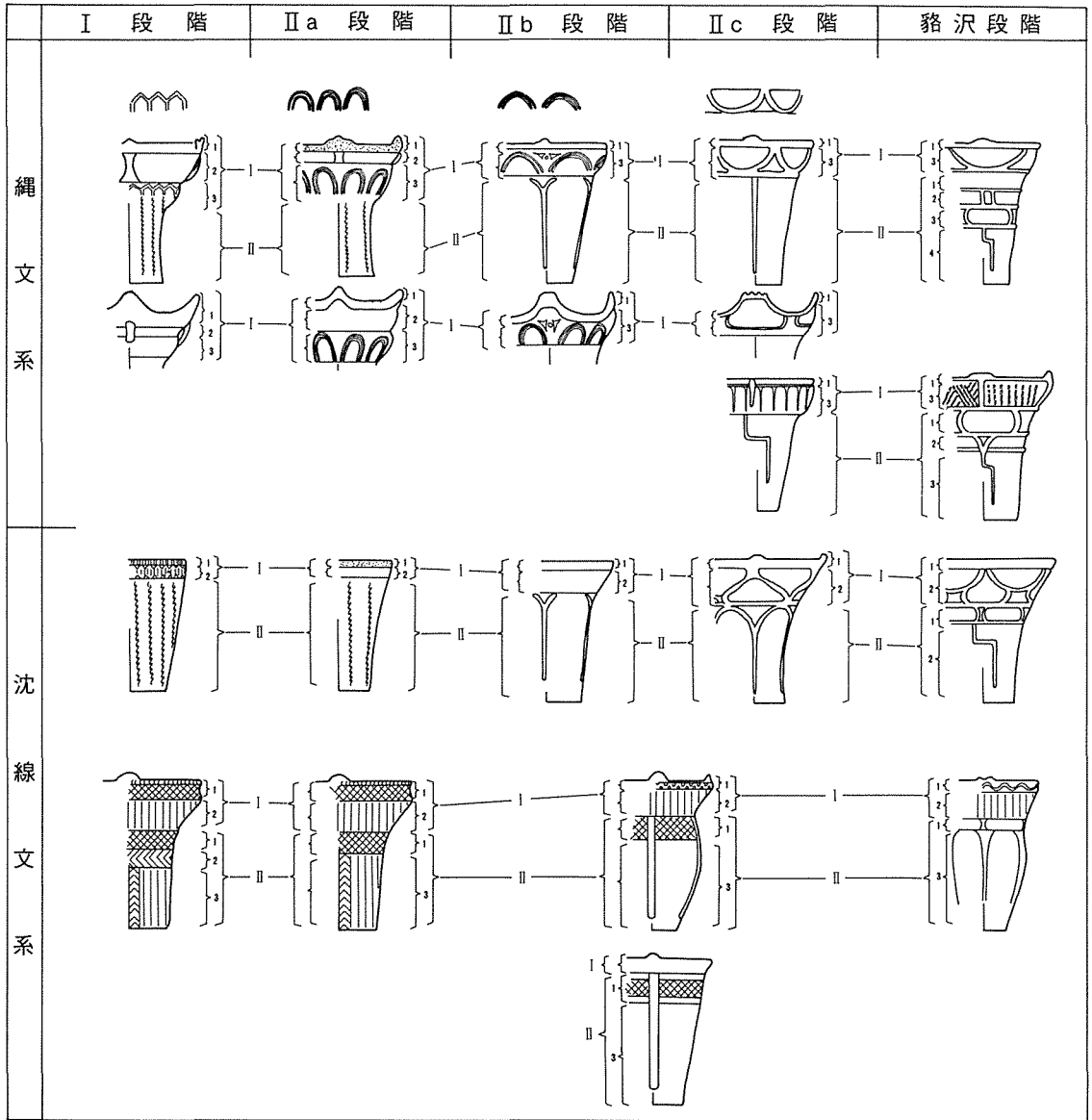
### Ⅲ 研究の視点と方法

前節で触れた通り、中期初頭土器研究は、宮の原貝塚の発掘調査と、今村氏によるその資料分析が、一面ですぐれた成果をもたらした。それは、中期初頭土器でも特に前半期の時期細分が層位的検証に基づいてなされたことである。その後、中期初頭土器全般の編年体系を示した「五領ヶ台式土器の編年」では、その方法論的基盤が型式学的方法によるものであることを、氏自身も明言している。

型式学的方法の有効性と危険性については大方の説くところであり、慎重に対応すべきであろう。私自身は型式の連続性を正しく認識することから得られるであろう多くの情報には大きな期待をし、積極的にその方法を取り入れたい一人である(三上 1986a)。特に中期初頭では「編年の手がかかりとなるような層位的所見がわずしか知られていない」(今村 1985)という指摘もあるように、層位学的方法に大きな期待を抱くことは困難である。従って私は、勿論宮の原での層位的所見を是認した上で、先にも述べた通り系統性を重視するという型式学的方法により、中期初頭土器群の組列を考えようとするものである。

具体的な資料の扱いについて述べたい。系統性ということで、先にも触れた、縄文系土器と沈線文系土器の2つの系統を設定した。縄文系とは口縁部または胴部の地文に縄文が施されることによって特徴付けられる一群である。沈線文系は、いわゆる踊場式土器に示されるような、主には半截竹管状工具等による平行沈線文が集合し、文様効果として幾何学的な文様構成を生む一群である。





第1図 縄文時代中期初頭土器変遷模式図

今村氏は五領ヶ台式土器を述べる際、「踊場式土器は今回はとりあげない」(今村 1985)として大方省略しているが、中期初頭土器群を理解するには前者と同様のウエイトをかけて整理することが最低限の必要条件と考える。なお、資料の扱いについては、各系統の土器を抽象化(模式化)して示した。多くの個別資料に共通する要素を抽出しそれを抽象化(模式化)でき得るということは、とりもなおさずその系統や変遷が型式学的により普遍的であるということの信頼性を高める指標となるものとも考えるからである(第1図)。そして、

そこに付属する個別資料を客観的データの提示として集めた。

細かな点について補足しておきたい。本論では土器の系統を考えるため型式名を一端棄却し、土器の流れを現す時期細分を段階として区切ることにした。細分された段階の記号としては、現在最も新しい、今村氏のいうⅠ・Ⅱを用い、その中の細分については a・b・c を用いた。同じ記号を用いたが、内容は氏と異なる部分が多い。従って、基本的に異なる部分をまず明らかにした上で本論に入ることにしたい。

まず今村氏のⅠ式のa・bの細分については疑問がある。氏は、Ⅰa式の特徴を「短沈線文の充填」としてあげ、Ⅰb式の特徴として「細線文」を示すものの、Ⅰa式にも一部細線文があるという(今村 1985)。そもそも「中部高地や東海地方では太めの沈線等特色とする典型的なⅠa式は知られていないが、かわりに上記したⅠa式に並行する可能性の強い細線文の土器が多少知られる」(今村 同)ことになる。益々短沈線文の有無によってa・bと分離することについては説得性に欠ける。事実、この短沈線文をもつ土器の位置付けを、能登氏は新しく考えており、今村氏とは全く逆転した編年観となっている(能登 1981)。このことから分かるように、やはり現時点では短沈線文と細線文の別が決定的な時間差になっているのか疑問で、仮に時間差があったとしても、その前後関係についての決め手に欠けているのが現状であろう。短沈線文については資料があまりにも少ないのが実状であり、現時点では一時期内の文様のバラエティーとしておいてもよいのではないかと考え、Ⅰ段階内での細分は、とりあえず認めない。

Ⅱ式も問題が多い。Ⅱa式については良いとして、Ⅱb式とⅡc式の場合は、後述するように系統の異なった土器群の違いを、「時間差」として誤って扱ったのではないかと考える。また、大石式なる型式名も設定されているが、新形式名の必要性にも疑問を抱く。中期初頭土器の範疇で扱えることができると考えるからである。従って、私はⅡ段階については同じようにa・b・cと細分するが、内容は今村氏とはかなり異なっている。

以上の大きな2点を明らかにした上で、縄文系・沈線文系の各々の型式内容と連続・系統性を考え、さらに中葉土器群への変遷過程を探る。その上で最後に型式名について考えることにしたい。

## Ⅳ 中期初頭土器群の変遷

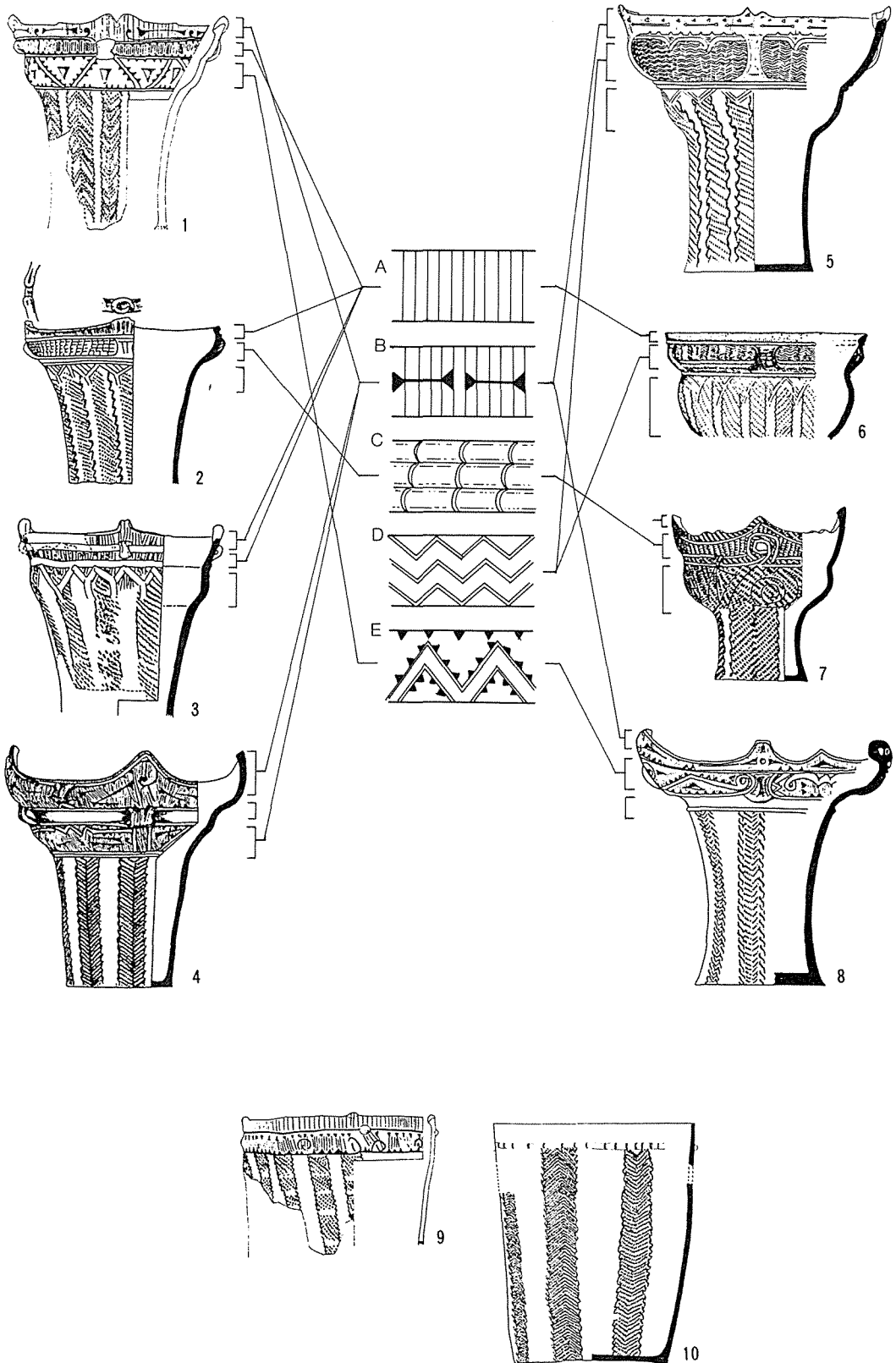
### 1 縄文系土器

器形にはいくつかのバラエティーがあるが特に今回は深鉢形土器に限り、その中でも全段階を通して最も安定した変遷を示し、主体となったキャリパー形と円筒形の2者を中心に考えたい。前者にはさらに口縁が平縁と波状縁の2種がある。

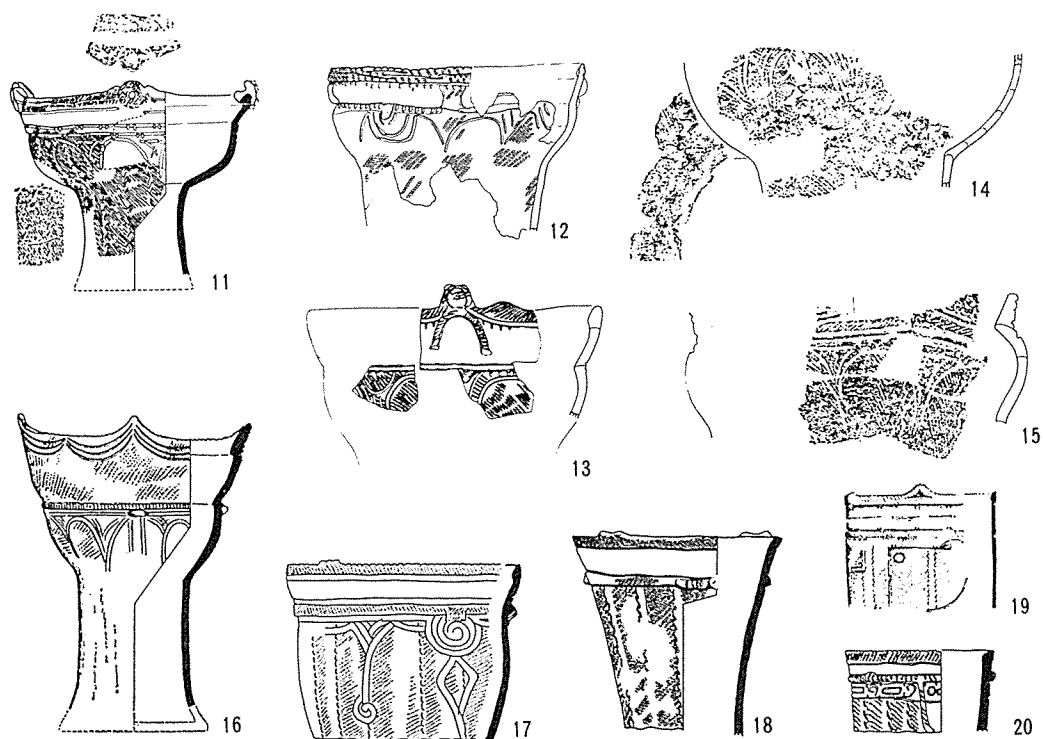
Ⅰ段階(第2図1~10) キャリパー形は、頸部の

くびれを境に、その上を口縁部、下を胴部とすると、口縁部は大きな弧を描くようにふくらむことが特徴で、それが3段となる場合も多い。胴部は底部にストレートにむかうものと、底部に対し、内反気味に張り出す2者がある。こうした形状から、文様帯は口縁部文様帯一第Ⅰ文様帯、胴部文様帯一第Ⅱ文様帯と大きく2分して理解することができる。口縁部文様帯はその形状に基づいてさらに3帯に細分され、それぞれを、 $I_1$ ・ $I_2$ ・ $I_3$ 分帯と呼びたい。文様帯について補足しておきたい。このⅠ・Ⅱ文様帯間の区画は、必ずしも明瞭でない場合もある。つまり、器形のくびれに注目し、ここを境として両者を分けたが文様帯間の区画文のない場合が多いのである(3・5・6)。区画文という観点からすると、 $I_2$ 分帯の下端には必ず横区画がされるので、ここを区切りとすべきかもしれないが、ここでは次の段階の文様帯のあり方から考えて、器形上の屈曲点をもって両文様帯の境としたい。このように規定される第Ⅰ文様帯内への文様施文は、模式図(第2図)で示したように、各分帯内へ大きくは5種の文様が、各々の個体を選択的に施文される。Aは櫛歯状工具による細線文、Bはそこに三角印刻文の組み込まれるもの、Cは爪形文を間隔をおいて連続的に施文する、いわゆる瓦状の押し文、Dは竹管状工具による山形文、Eは大型の山形文に等間隔に三角列点文の配されるもの、である。それら5種の各細分帯内への厳格な施文規定はなかったようで、そのいずれかを選択し、いずれかの文様帯へ配すことは製作者の意図に委ねられていたものと思われる。ただし、 $I_3$ 分帯に、「V」字状または「Y」字状文の、横に連続して配される文様パターンは多いようである。また、4単位の橋状把手をもつことも第Ⅰ段階の特徴としてあげておきたい。第Ⅱ文様帯は一律に縄文となる。これは等間隔に空白部をもつ縦位帯状を特徴とし、縄文部は結節を伴う羽状縄文となる場合が多く、その左右両端は結節回転文により区画される。

波状口縁の土器も、概ね前記した一群と同じ構成を示す。円筒形土器は文字通り形状は筒形で変化が少ない。従って文様帯の区分も、縄文部とその上部という文様区画は、そのまま第Ⅰ文様帯、第Ⅱ文様帯とすることができる。第Ⅰ文様帯は1~



第2図 縄文系I段階



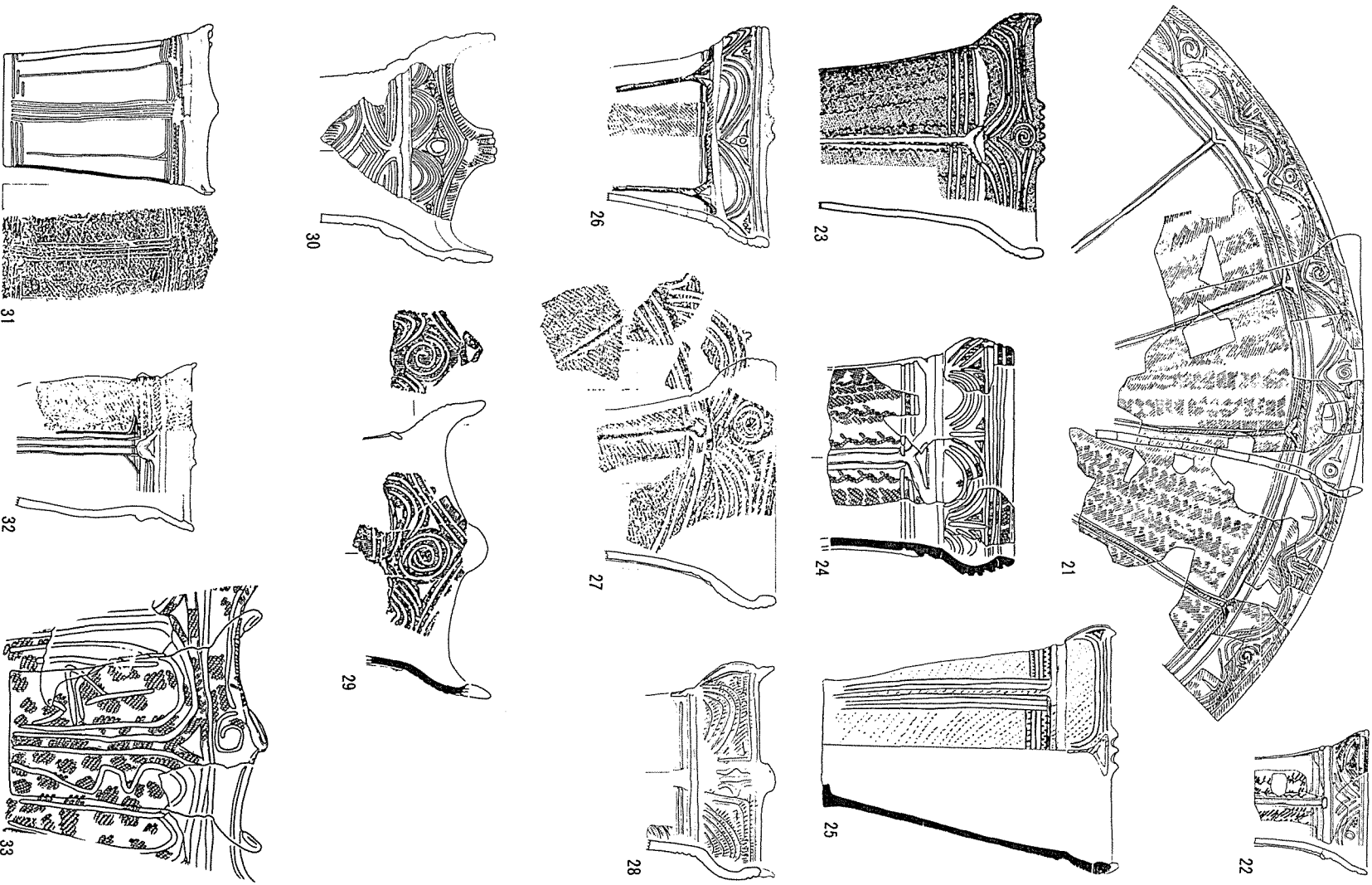
第3図 縄文系II a 段階

2帯に分帯され、その内部の文様要素はキャリパー形と同じである。また、第II文様帯はやはり縄文で、施文方法も前者と同一といえる。

II a 段階(第3図11~20) 器形上での大きな変化はないが、量的に円筒形土器がやや多くなる。キャリパー形土器では文様帯についてもI段階と変わらない。第I文様帯はやはり3分帯であるが、I<sub>2</sub>分帯が狭まると共に一律に空白無文化し、I<sub>1</sub>・I<sub>3</sub>分帯には縄文の施文されることが規則的となる。同時に、I段階で盛行した細線文等の文様要素の多くは極端に減少する。また、I<sub>3</sub>分帯は広くなり、沈線による半円弧文により飾られる。これは、I段階にあった「V」または「Y」字状文が連続的に変化し、その上端で連結して簡略、大型化したものと考えられる。本段階から三角列点文が簡略化されたと思われる、沈線に沿った交互の鋸歯状刺突文や、刺突列点文が始まる。橋状把手はごく簡略化された形、あるいは単に突起といてもさしつかえない程度となって残る。第II文様帯では、縦位帯状に施されていた縄文は空白部がなくなり全面に展開されるようになる。結節縄文は残る。

円筒形土器においても文様帯のあり方は前段階と変わらない。文様は第I文様帯でI<sub>1</sub>分帯—縄文、I<sub>2</sub>分帯—無文というパターンが圧倒的で、第II文様帯も結節縄文を伴う全面縄文であり、いずれもキャリパー形と同一の文様施文構成をとる。

II b 段階(第4図21~33) キャリパー形土器では、その形状が特に胴部において、底の張り出すものは少なくなり、ストレートに底部に収約される形となる。文様帯は、3分帯であった第I文様帯は2分帯へと少分帯化される。それは、無文であったI<sub>2</sub>分帯の消失、ないしはI<sub>3</sub>分帯への統合と考える。というのは、I<sub>3</sub>分帯にあった半円弧文が本段階には第I文様帯の主文様として大型化し、横に広く展開するようになるからである。ここに文様の連続的変化と、文様帯の変化をみることができる。この半円弧文間には玉抱き三叉文をもち、半円弧文と横沈線文の接点には交互刺突文の施されるパターンも多い。第II文様帯は、やはり全面縄文である。そして縦位隆帯文による「Y」字状文が現われ、第II文様帯の縦位4単位の分割が意識されるようになった。



第4図 縄文系Ⅱb段階

以上のスタイルは、波状口縁の土器にもそのままあてはまる。

円筒形の土器では、口縁部がやや外反する形状となる。文様帯は、第Ⅰ文様帯の2分帯が1分帯へとやはり少分帯化し、統合される。第Ⅱ文様帯の上端「Y」字状縦位隆帯文による胴部4単位の分割や、第Ⅰ・Ⅱ文様帯の全面に展開される縄文施文は、キャリパー形と同じありかたを示す。

Ⅱc 段階(第5・6図34~68) キャリパー形土器の器形の上での大きな変化はないが、文様構成上のバラエティーが増える。前段階までの変化の系統上における例が34~42であり、第Ⅰ文様帯モチーフの変化がよみとれる。前段階に沈線で描かれた半円弧文が、隆帯によって半円弧ないしは波状に表現されるようになり、中にはそれが重三角文となるものさえある(34・37・38・41)。これは、後に中葉期の土器の主要なモチーフとなり(三上 1986a)、その息の長い系統をたどることができる。三角区画帯間に玉抱き三叉文をもち、地文に縄文のある点に変わりはない。第Ⅱ文様帯では、やはり縦位4分割が上端「Y」字状縦位隆帯文によって行われるが、この「Y」字の上端部分が随分肥大化されているもの(36・42)のある点は見逃せない。地文にはやはり縄文が施される。波状口縁の土器(43・44)も構成は平縁と同じである。

キャリパー形土器のもう1つのバラエティーが、第5図の下段の45~51である。第Ⅰ文様帯にT字状文が密に入り、第Ⅱ文様帯にクランク状隆帯文が入る事の特徴としており、技法的には若干の連続押引文も使われる。これらの一団に対して、今村氏は大石式という型式を設定したわけであるが、共伴例等をもて、前記したキャリパー形土器に伴う場合も多く、積極的に分離する必要は認められない。むしろ、本段階内でのバラエティーとしておいた方がよいと考える。

円筒形土器は、口縁部の外反が強くなる。そして、文様帯およびモチーフの入り方により大きく3つのバラエティーを生じる。52~55は前段階の残影が最も強い。本段階では、断面カマボコ状の沈線による弧線文や、連続「Y」字状文が特徴となる。第Ⅰ文様帯は狭い。56~62は、第Ⅱ文様帯にキャリパー形土器にもみられた上端の肥大化した「Y」字状縦位隆帯文の入る一団でやはり4単

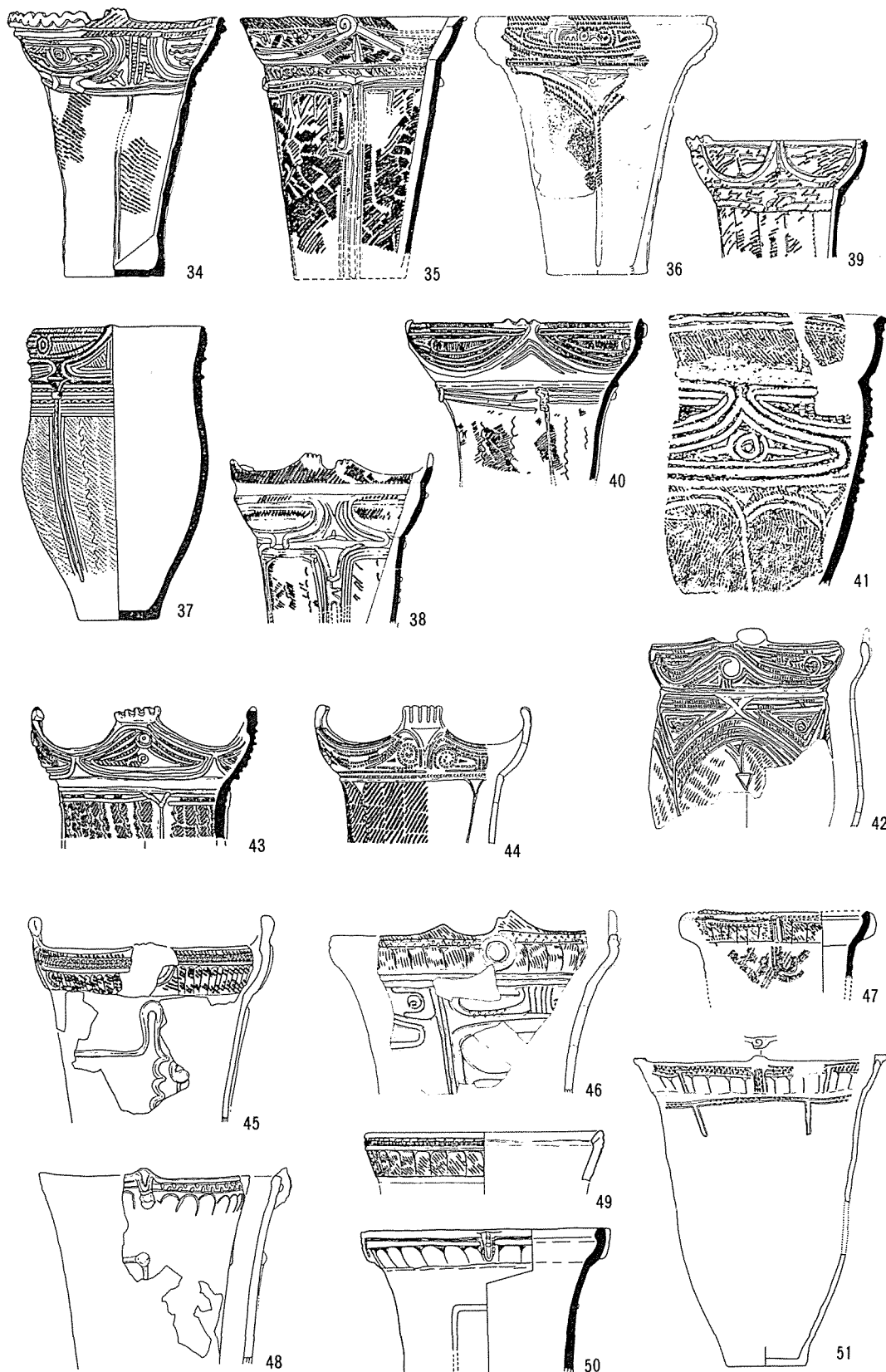
位の構成を示す。そして、63~68は第Ⅰ文様帯Ⅰ<sub>2</sub>分帯が広く、ここにキャリパー形土器にあった隆帯による大型の半円弧文や重三角文の入る一団である。第Ⅱ文様帯にはやはり上端の肥大化した「Y」字状縦位隆帯文もあり、本段階で共通のあり方を示す。

以上が縄文系土器群の中期初頭段階における流れである。それらは変化に一定の方向性を持ち、やがてその終末には中期中葉土器へとつながる要素をもっていた。中期中葉期における最初の段階である貉沢式と呼ばれる型式が、中期初頭終末からどの部分がどのように移行してゆくのかについて、若干触れておきたい。ただ、今回は貉沢式の型式内容のすべてについて立ち入って触れることができない。従って、ここでは一連の流れにそって貉沢段階と呼ぶことにしたい。

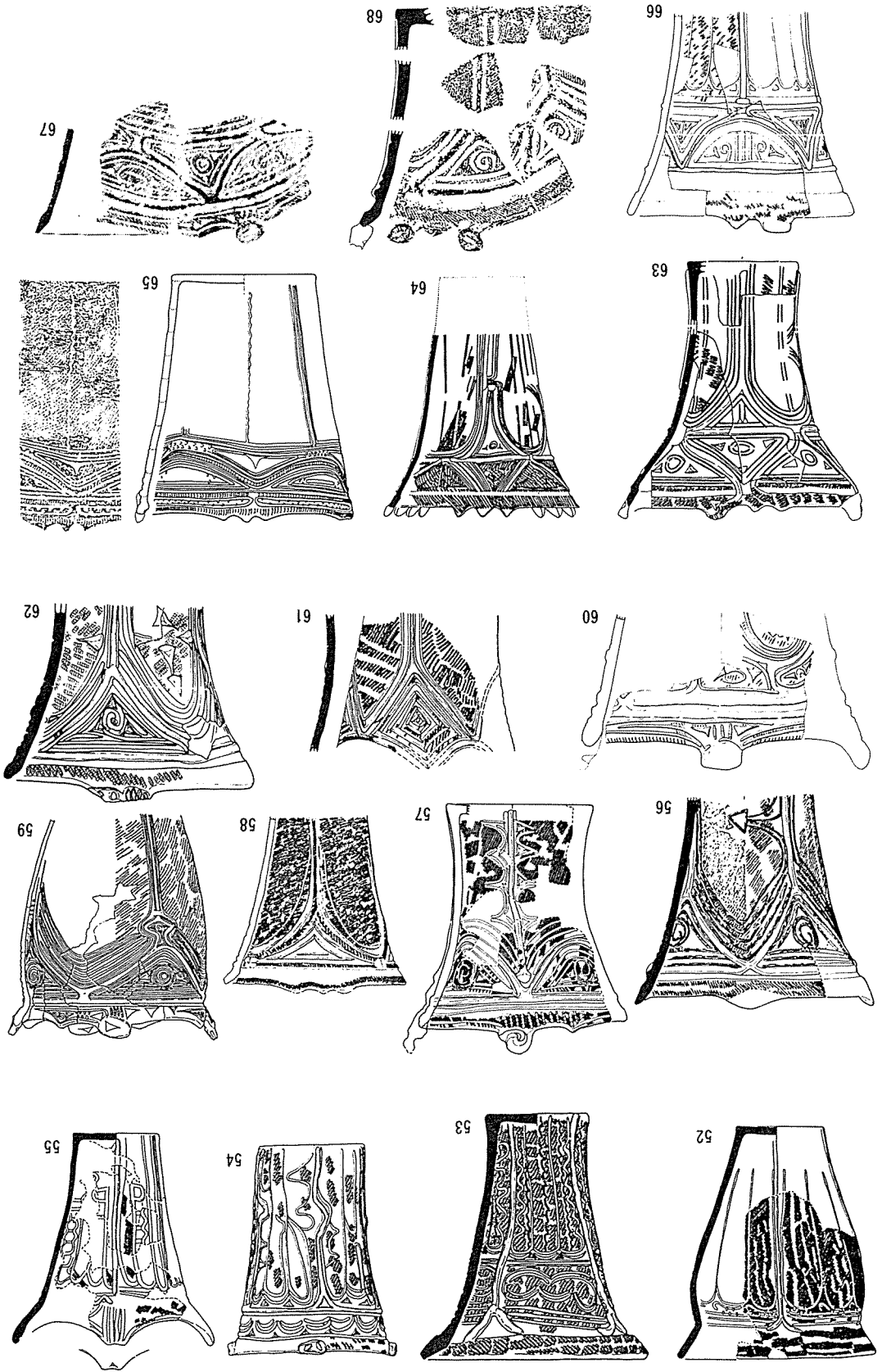
貉沢段階(第7図) 該期の土器研究は寺内隆夫氏による研究に詳しい(寺内 1984)。その成果を踏まえ、初頭・中葉という別や、移行過程について考えてみたい。

キャリパー形土器は、口縁部の文様の違いによりやはり大きく2分できる。1つは前段階に半円弧文や重弧文の入っていた一団で、それがこの期に重弧文として確立する。これは以後中期中葉土器の最も特徴的なモチーフの1つとなった。こうした初頭期の伝統を強く引く反面、総体としては大きく変化する。まず、縄文使用の激減があげられる。よって、この段階になるとすでに「縄文系」という表現はあてはまらなくなる。そして、あたかもそれに代わるかのように竹管状工具による角押文と、その連続施文が盛行することになった。モチーフでは楕円区画文が誕生し、器面を画するようになる。これは初頭期にあったクランク文が、その形を変えて連続的に変化した結果だといわれる。ただし、クランク文自体も若干残る(71・76)。この楕円文の流行はすさまじく、口縁部には重三角文よりもむしろ、そこに楕円文の入るものの方がこの時期に限っては多い。これらいくつかの要素の消滅や誕生が、土器型式において初頭・中葉を画する一つの画期たりうる所以となっている。

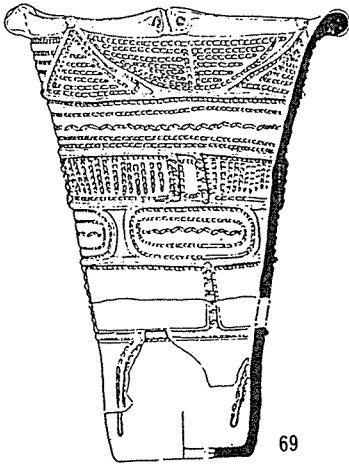
キャリパー形土器のもう1つ、Ⅱc 段階にT字状文の入った一団は、それと同形のまま表出法が角押引文によってなされるようになる。胴部には



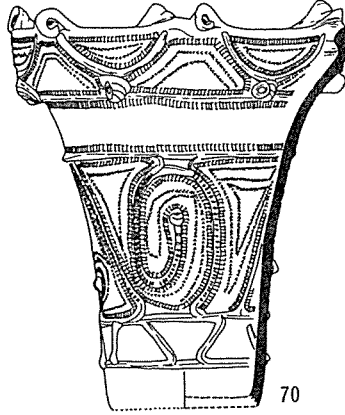
第5図 縄文系Ⅱc段階(1)



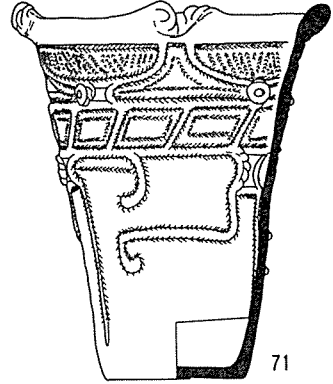




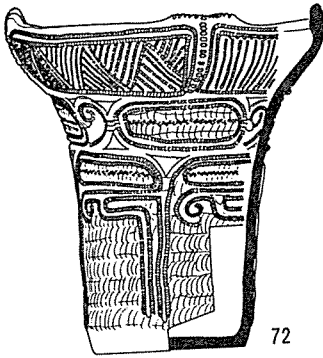
69



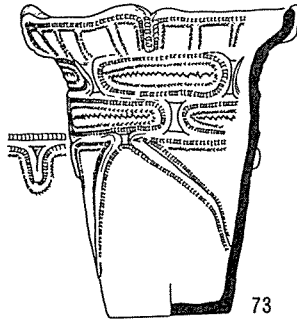
70



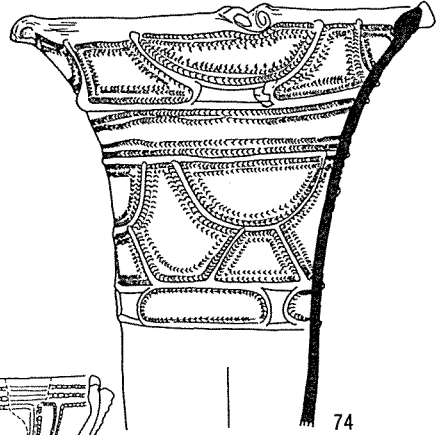
71



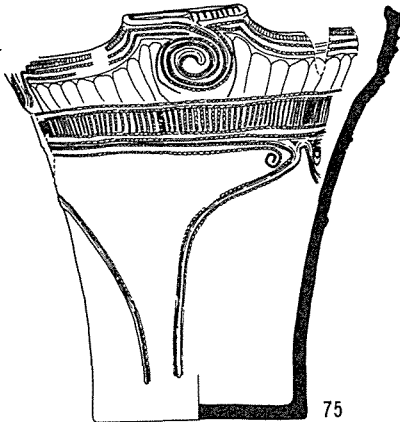
72



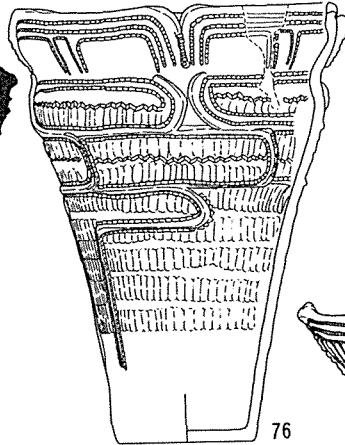
73



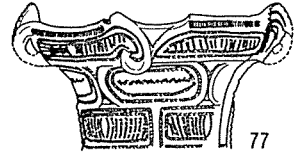
74



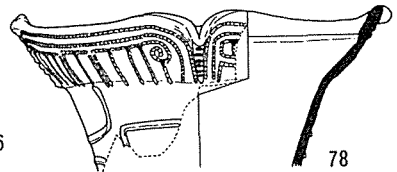
75



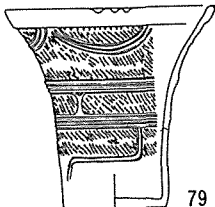
76



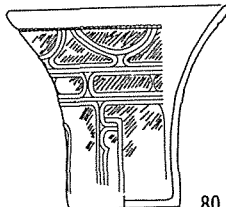
77



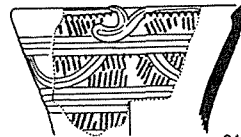
78



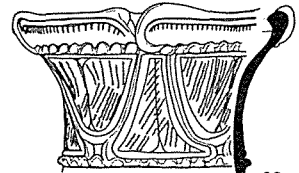
79



80

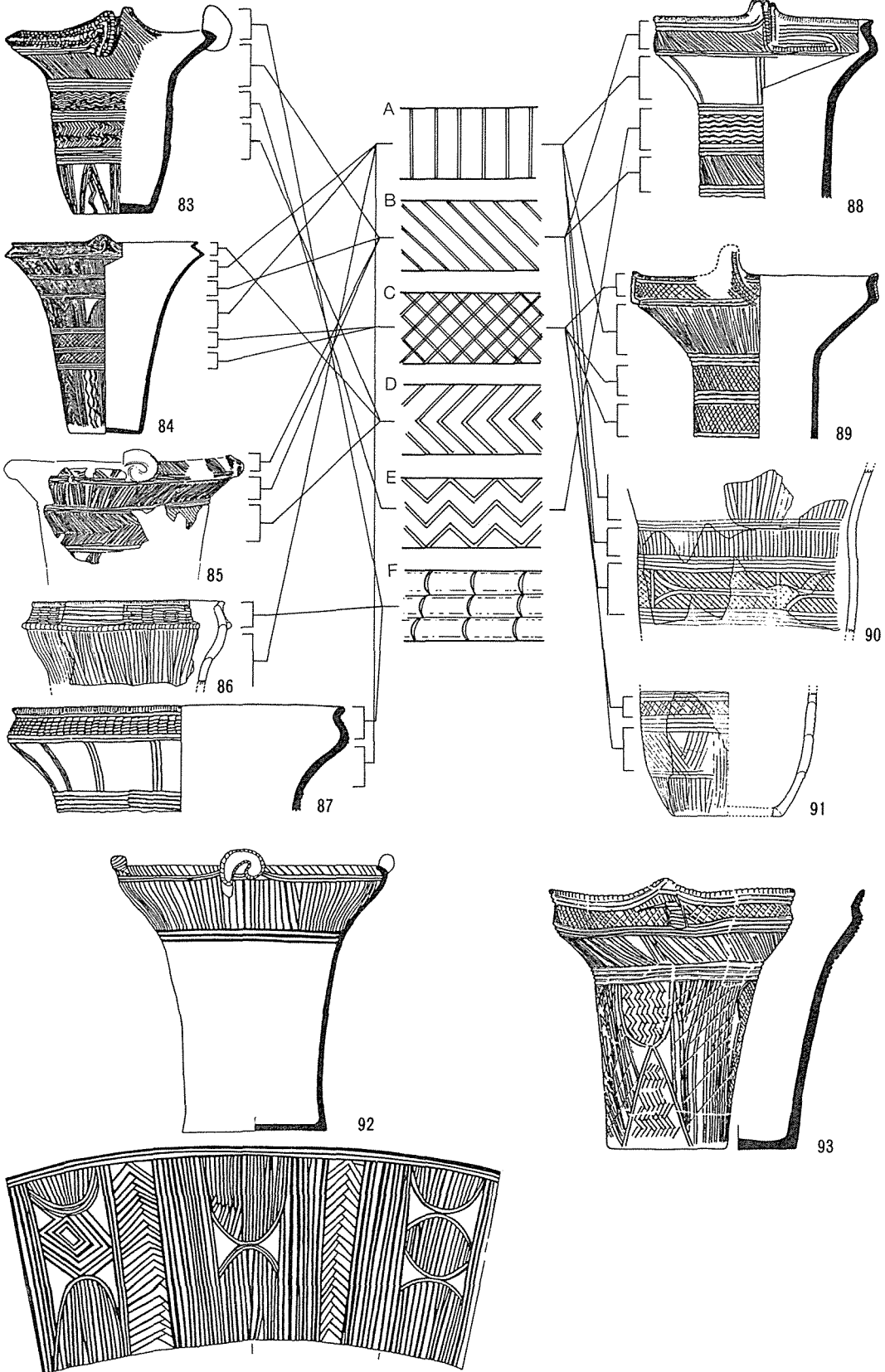


81

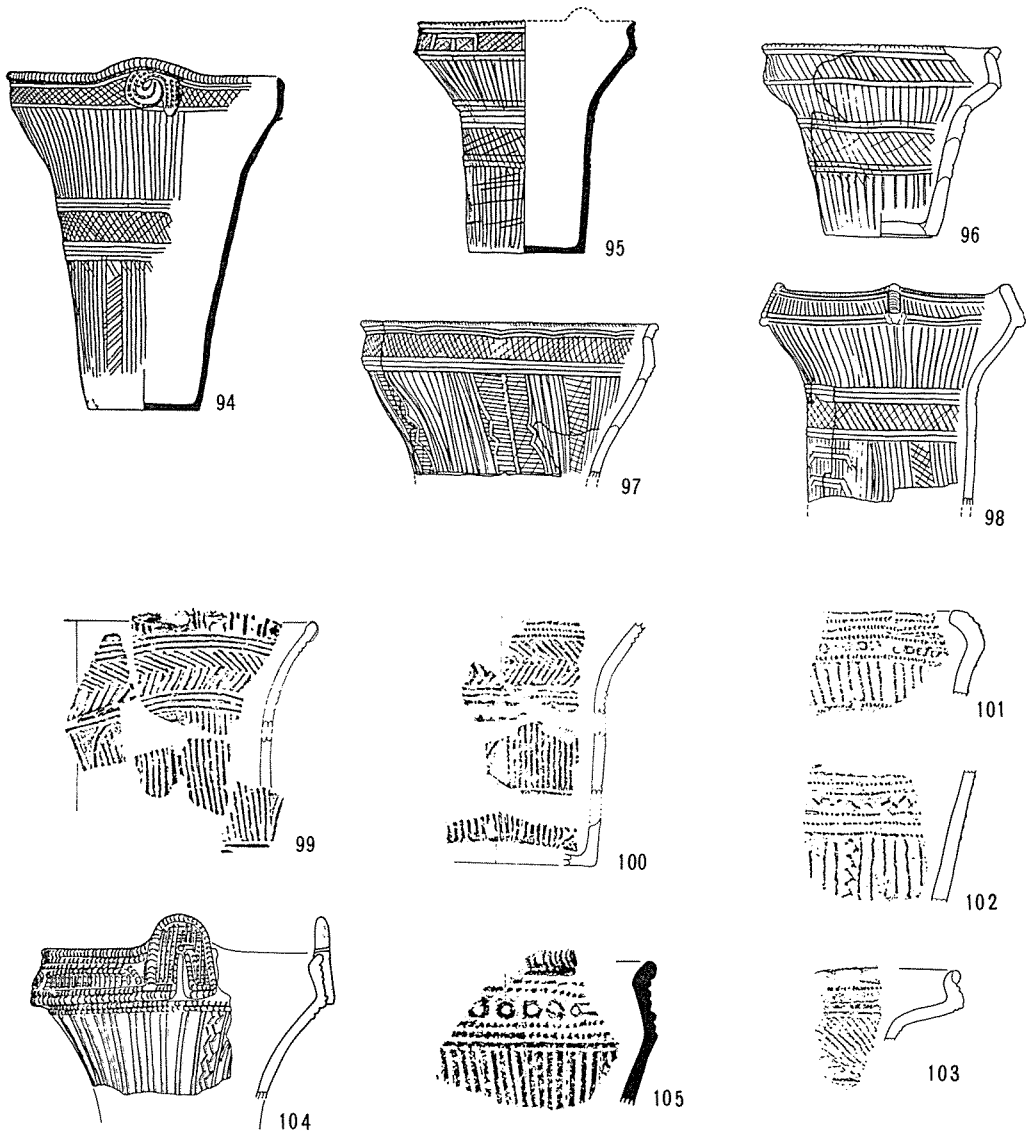


82

第7図 貉沢段階



第8圖 沈線文系I段階



第9図 沈線文系 I・II a 段階

やはり楕円文やクランク状文が入る。

円筒形の土器についても、重三角文の確立化、楕円区画文の導入、クランク文の残影等、同様の变化を示す。ただ、縄文という要素が他ではほとんどなくなってしまうなかで、本器形に限ってわずかに残されたようである(79~82)。

以上が縄文系土器群の変遷である。それらは極めて連続的に変化し、やがて中葉土器群へとスムーズに移行していった。中部高地に顕著な中期中葉の華麗な土器群を生む確かな母胎となっていたのである。

## 2 沈線文系土器

藤森栄一氏により踊場遺跡のb類として分類された一群を中心とする(藤森 1934)。竹管状工具による平行沈線文を主たる文様要素に構成され、やがて平出第Ⅲ類Aとされる土器に移行するとされるが、その間の型式推移について語られたことはない。そうした問題の解明も含め、その変遷をたどってみたい。ほとんどが深鉢形の土器であり、前期の末葉段階にはすでにその祖形ができていたと考えられる。

I 段階(第8図83~93) 器形のうえでのバラエ

ティーは少ない。頸部を境として上半はラッパ状に大きく外反し、口縁部は「く」字状に内折する。その下半はストレートに底部に至る。文様帯もこうした器形の特徴を反映して、頸部から上位の第Ⅰ文様帯と、下位の第Ⅱ文様帯に分離できる。第Ⅰ文様帯は内折部分のⅠ<sub>1</sub>分帯と、頸部までのⅠ<sub>2</sub>分帯に2分でき、84のようにさらに細かく分かれるものも若干ある。第Ⅱ文様帯は3分帯と多帯に分かれるものと、1帯のみという2つのバラエティーがある。第Ⅱ文様帯が1帯のみの92・93はそれらがモチーフなどの面で前期末葉土器の流れを正統に継承した一群といえる(註4)。3分帯になるものは、第Ⅱ文様帯の上半にやや狭い等間隔のⅡ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>2</sub>の2帯構成を示す場合が多く、それ以上に分かれるものもまれにある(84)ように、細分帯化することが本段階の特徴といえるかもしれない。その場合通常Ⅱ<sub>3</sub>分帯が最も広い分帯となる。

そうした各文様帯内に配される文様要素には、いくつかのバラエティーがある。いずれも半截竹管状工具による沈線文により、A—縦位、B—斜位、C—格子目、D—羽状、E—山形、F—瓦状押引、に構成される。そうした文様の文様帯内への配置は、本段階の縄文系土器同様必ずしも厳密な相関性はなく、上記の文様の範囲内から文様帯へ比較的自由的な選択がなされたようである。ただ大雑把には、Ⅰ<sub>1</sub>分帯—格子目・斜位沈線・瓦状押引文、Ⅰ<sub>2</sub>分帯—斜位・縦位沈線、Ⅱ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>2</sub>分帯—格子目・山形沈線、となる場合が最も多い。そして、Ⅱ<sub>3</sub>分帯ないしは第Ⅱ文様帯が分帯されないものについての第Ⅱ文様帯全体は、92のような「U」字と逆「U」字の組み合わせ状、ないしはダンゴ状とでもいえそうなモチーフを主文様としてもつ場合が多い(註4に同じ)。

他に本段階の特徴として、口唇部に爪形文の連続施文や、口縁部に一単位の渦巻状突起のつくことがあげられる。

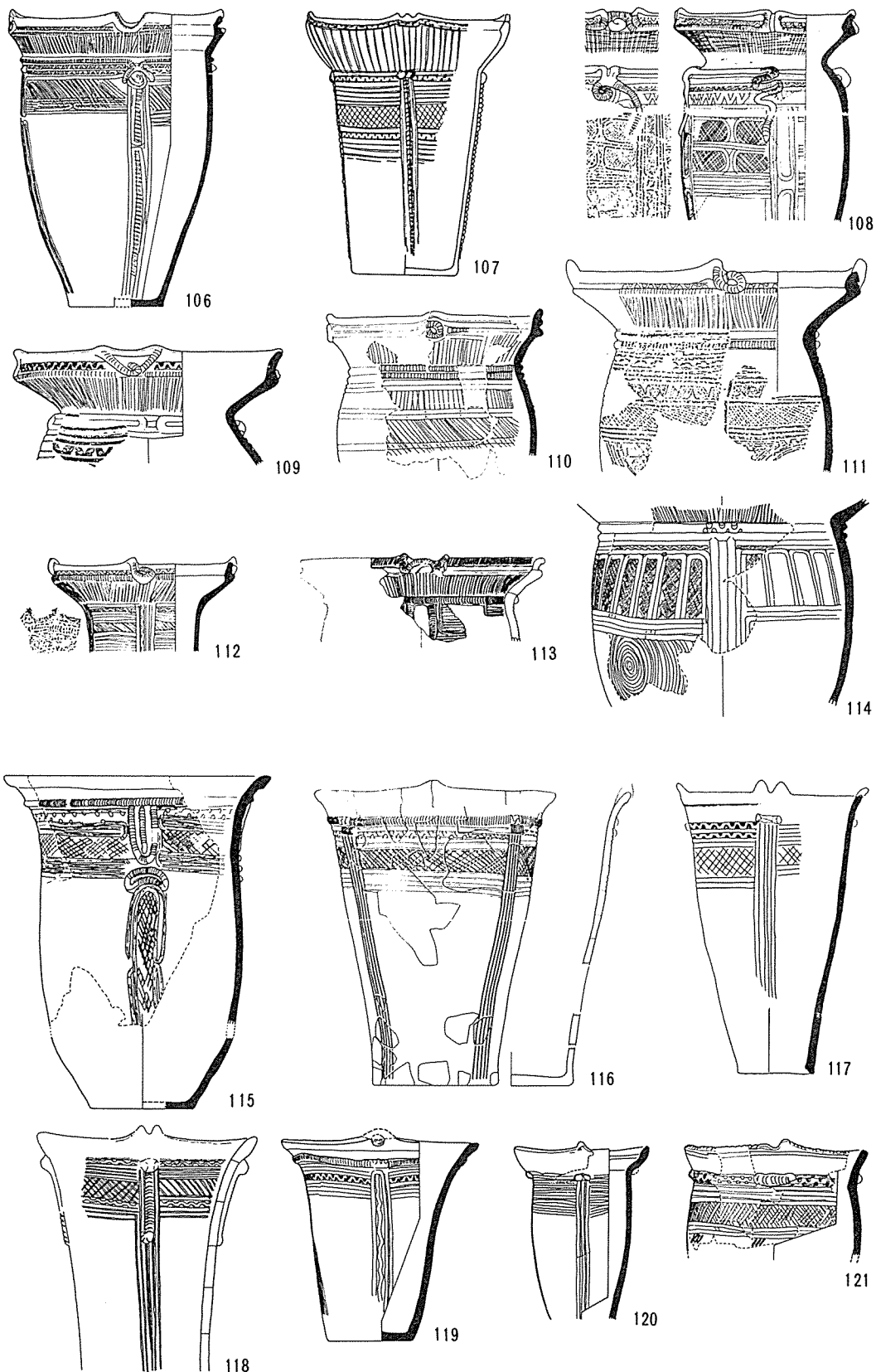
なお、本段階でも特に古い時期か、あるいは前期最終末に位置付けられそうな一群に注意したい。格子目ないしは縦位沈線文が沈線ではなく、細い粘土紐によって表現される一群である(第9図99~105)。さらに結節隆帯となっている部分(100~105)もあり、明らかに前期末葉段階の要素を備えている。これは本段階が、前期土器の流れにのって発

展している事実を示していることになろう。言葉を変えれば、中期の初頭である本段階の沈線文系土器は、前期からの伝統的な表現法である隆帯貼付と竹管状工具による結節施文が激減し、ほぼ一律に、まさに沈線文によって表現されるようになったことによって画期とされ、また象徴される段階といえるのである。

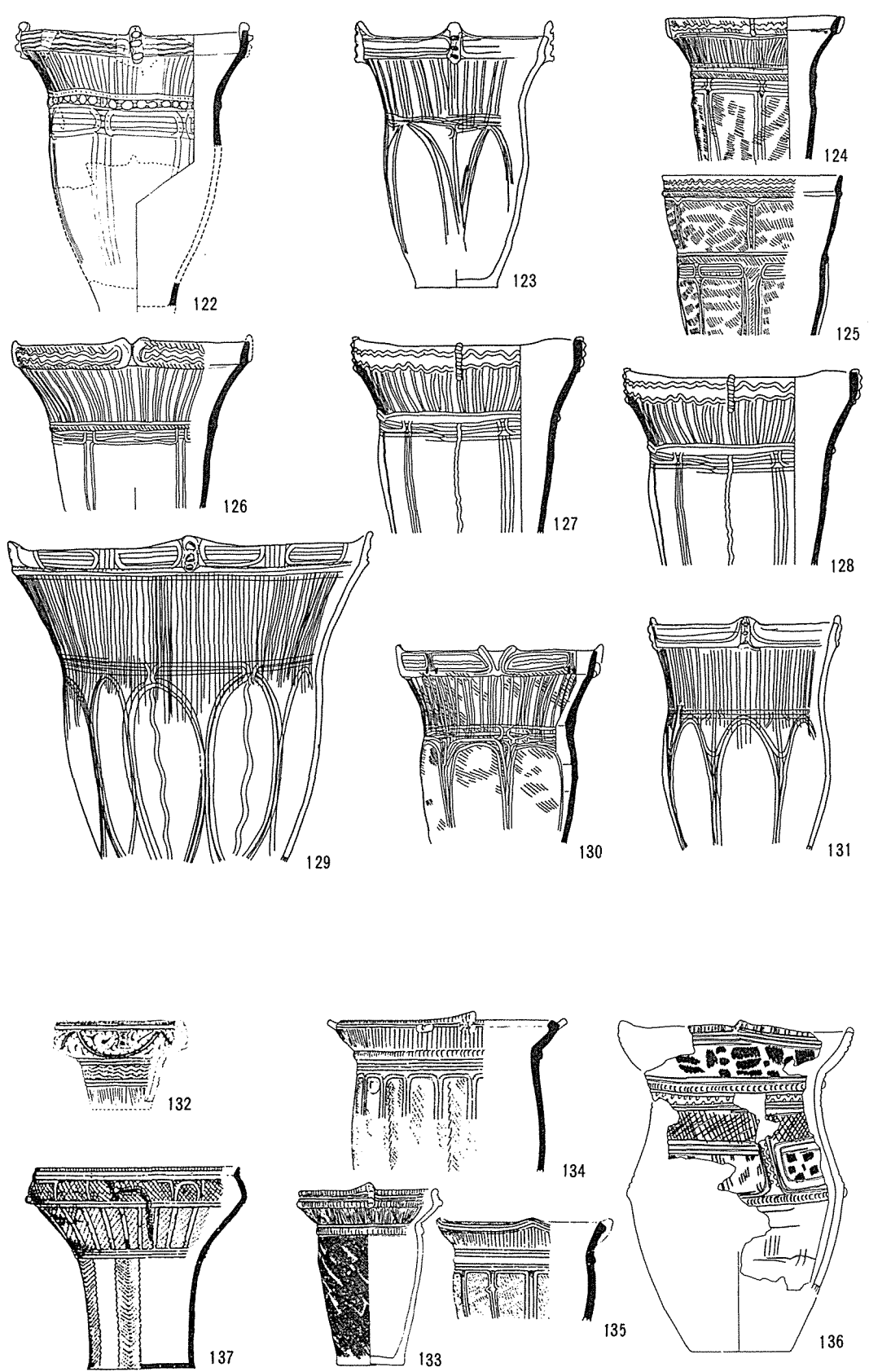
Ⅱa 段階(第9図94~98) 器形や文様要素において前段階と厳密に区別することはいささか困難といえる。しかし、文様帯の系統性という観点で本段階の区分が必要となる。それは第Ⅱ文様帯の3段以上の多段構成が減少し、Ⅱ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>2</sub>分帯という2分帯構成が確立することによる(註5)。このⅡ<sub>1</sub>分帯に格子目文の入る割合が非常に高くなり、またⅡ<sub>2</sub>分帯では、縦区画を促すかのような幅狭の縦位区画施文の存在(94など)する点も注意したい。こうした現象は、本段階を狭む前後の段階をつなぐ重要な一過程として位置付けられるのである。

Ⅱb・c 段階(第10図106~121) 縄文系にみられた細分はできない。器形では、口縁部の立ち上がりやや短くなり、また胴部のふくらみも現れる。第Ⅰ文様帯ではⅠ<sub>1</sub>分帯がやや狭小化し、ここの主流となっていた斜格子目文がなくなる代わりに、交互刺突文が配される。ただしそれさえもないくらい幅狭なものもある。Ⅰ<sub>2</sub>分帯の縦位平行線文は依然続く。また、口縁部にあった突起は、渦巻き文や、2本の粘土紐により装飾的に作り出された形状へと簡略化される。第Ⅱ文様帯ではⅡ<sub>1</sub>分帯のみがそのまま継承され、Ⅱ<sub>2</sub>分帯は無文様化する。Ⅱ<sub>1</sub>分帯のモチーフはやはり斜格子目文である場合が多く、この他には若干の斜線文や横平行線文・交互刺突文が加わる程度である。なお、この第Ⅱ文様帯には先にも触れたように、縦位にほぼ4分割する垂線が入る。詳しくみると、これは無文部であるⅡ<sub>2</sub>分帯のみでなく、Ⅱ<sub>1</sub>分帯をも通して分割する線となっている(模式図)。こうした胴部の4単位区画は、同期の縄文系土器にもみられた同じ様相であった。

深鉢形土器のもう1つのタイプとして、口縁部である第Ⅰ文様帯が狭く、口唇部がやや肥厚して作られ、無文となる一群がある(模式図下・115~121)。前者の簡略形とも言えようか。第Ⅱ文様帯の文様構成は、前者と全く同一である。こうした一群も



第10図 沈線文系Ⅱ b・c 段階



第11図 沈線文系貉沢段階(122~131) と折衷様の土器 (132~137)

比率的には高い割合で存在する。

以上が本段階の特徴であるが、これらは山口氏によってF形態とされ(山口 1978)、今村氏のⅡb式に位置付けられたもの(今村 1985)に他ならない。そしてまさにこれらの一群こそ、山口・今村両氏もいうように、山内清男氏が五領ヶ台式土器として設定したと指摘されている一群である。しかし、今このようにその系統をたどってゆくと、これらはその系統の中のわずかな一時期を構成するいわば部分であるにすぎないことが理解できる。従って逆にここに示した系統が理解されるならば、五領ヶ台式の扱いについては自ずと再考がうながされるのである。このことは本論の目的に関わる問題でもあり、後章にて詳しく論ずることにした。

**貉沢段階**(第11図122~131) 器形は頸部上半の外反が弱くなり、口縁の折れも垂直に近くなる。第Ⅰ文様帯はⅠ<sub>2</sub>分帯がやや広がる。Ⅰ<sub>1</sub>分帯には波状沈線文が入るが、これは前段階の交互刺突文のネガの部分が簡略的に変化し、沈線による波状に形を変えて表現されるようになったと考えられなくもない。また、口縁部にあった把手状の装飾は、単に1本ないしは2本の粘土紐を縦位に貼付するのみの形状となり、一層簡略化される。Ⅰ<sub>2</sub>分帯の縦位の平行沈線文は相変わらず継承される。

第Ⅱ文様帯では、Ⅱ<sub>1</sub>分帯の狭小化と共に、そこにあった格子目文や斜線文は極めて手の抜かれた表現となる。むしろⅡ<sub>2</sub>分帯は形骸的に残ったといふべきかもしれない。部分的に楕円形に区画される箇所もあるが、これはⅡ<sub>2</sub>分帯との区画箇所と同じであり、その延長部にあたる。それは前段階にⅡ<sub>1</sub>分帯をも縦に通して区画していた意識が、そのまま楕円状という、本段階に盛行するモチーフを応用する形で取り入れた結果と考えられる(模式図)。Ⅱ<sub>2</sub>分帯はやはり縦位に区画されるが、その区画形は、縄文系土器のⅡc段階にみられた、上端の肥大化した「Y」字状モチーフが簡略化した形状を想定させる(123・129~131)。

以上の様相を特徴としてもつ土器は、従来「平出第Ⅲ類A」と称せられていた一群である。それらは踊場系の土器に由来するのではないかとされながらも、踊場式自体の編年の位置を含めて、その系統はいま一つ明確にされ得ていなかった。こ

こに改めてその可能性を呈示し得たと考える。

やがてこの平出第Ⅲ類A自体、その後何段階かの変遷をたどるようであるが(鶴飼 1977)、ここで示したものはその一番古いと考えられる一群である。その特徴は前記した通りであるが、その他にも例えば縄文の施文(124・125・130)もその1つとしてあげることができる。何故ならば、基本的に貉沢段階には縄文はほとんどなくなってしまいが、中期初頭Ⅱc段階の縄文系の影響がわずかに残ったと理解できるからである。

以上、沈線文系土器の型式内容と系統について触れてきた。それらは、その後半に位置付けらるる本来の五領ヶ台式土器を含め、何段階かにわたって方向性ある変化を示し、やがて中葉の土器へと続いた。縄文系土器と共に、中期初頭の土器は極めて安定的に変遷していることが知れるのである。

次に、こうした縄文系・沈線文系と2つの系列の土器の、各時間帯内での併存・セット関係について触れておきたい。例えば、連続山形文であるとか胴部区画法であるといった個々の文様要素の共通・類似点については、本章中にて触れてきた通りで、それが並行関係を知る1つの根拠となっているはずである。そして、両者の共伴関係については、先に梨久保遺跡の報文中にて触れてきた。ここではもう1つ、同時帯内において互いの影響を受け合っていると思われる資料を検討することにより、一層両者の関係を裏付ける補強としたい。

### 3 縄文系・沈線文系両要素をもつ土器

資料は決して多くはなく、若干みられる程度である。逆にそれだけ器形と文様との相関規制が強かったといえるのかもしれない。

**I 段階** 2点を示した。132は口縁部の細線文・三角列点文等から縄文系、胴部の連続山形文及び平行線文は沈線文系であり、頸部を境としてミックスされた形になっている。137はその逆である。Ⅰ<sub>1</sub>分帯の斜格子目文、口唇部の爪形文、Ⅰ<sub>2</sub>分帯の縦位平行沈線文という構成は、沈線文系土器そのものであるのに対し、胴部の带状の縄文施文とその両端の結節回転文はいうまでもなく縄文系の要素である。また、両者ともに器形の形状も同じこ

とがいえ。132の口縁部の丸い内湾はやはり縄文系であり、胴部形状は沈線文系に同じである。137についても「く」字状に折れる口縁部形態は、沈線文系独自のものであり、底部の張り出し底となる形状は沈線文系にはない、縄文系の特徴であることは明らかである。

Ⅱa 段階 133～135はいずれも口縁部沈線文系、胴部が縄文系となっている。

Ⅱb・c 段階 136は全体的に縄文系の要素の強い中に、Ⅱc分帯のみ沈線文系のモチーフが取り入れられたものと考えられることができる。

以上が、特に目だった両者のいわば折衷的な土器である。これらの資料を含め、改めて縄文系・沈線文系とした両者の併行関係を検討すると、本章で述べた各々の段階における両者の共存については、ほぼ問題がないと考える。従って、従来考えられていた踊場式→梨久保式(五領ヶ台式)というような図式は、それが実は併行関係にあったことを再度明確にし、また従来の踊場式はいくつかの過程を経て平出第Ⅲ類Aに移行したことが明らかとなった。

それでは、中期初頭に存在する土器群が、縄文式土器編年の中にどう位置付くのか、以上の成果をふまえて検討し、まとめたい。

## V 中期初頭土器群の再認識

中期初頭土器群を構成する主要な2系統の土器について述べ、各々の時間的な同時性、セット関係について触れた。そして最後にもう1点検討しなければならない課題がある。両者の空間的な広がりとその中心、それに基づく相異の有無についてである。

縄文系・沈線文系の両者が遺跡単位で共伴し、そうした組成を示す地域は、西関東から中部山岳地帯までの広汎なひろがりを見せていることは先にも述べた(三上 1986b)。そしてこの広い地域の中での型的な内容については、現在加速度的に増加している該期の資料を見渡しても、小地域単位で特徴を異にすると指摘できるデータも少なく、またその必要性は認められていない。山口氏のように、要するに「既存の土器型式は内容的に共通する要素を多く含んでいる」(山口 1980)のである(註6)。それではその分布の中心領域の

問題はどうかであろう。これは非常に難しい問題であるが、ただ、土器の変遷が型式学的に最も連続的にたどれる地域が、より安定的なその型式の保有地であったということだけは許されるのではなからうか。その点からすれば、今回取り上げた資料の多くを出土する諏訪湖盆地から八ヶ岳西南麓にかけての中部高地は、その中心から大きくはずれる地域ではないと考える。一方、沈線文系土器は特に中部山岳地帯で根強く、西関東地方ではあっさり初頭段階で終わってしまい、中葉期にまでは残らなかった。本論のⅡc段階に位置付けられた、本来の「五領ヶ台式」の型式としての存続は、前後のつながりを考えた時、大きな疑問符が打たれることになったのである(註7)。

さて、こうした以上の条件は、両系統の土器群が同一の型式名で呼ばれるべきであるという、必要かつ十分な内容を示しているに他ならない。そして、結論から先にいうと、それらを総称する名称は、「梨久保式」の名こそふさわしいと考える。その妥当性を理解するために再度、五領ヶ台式と梨久保式について触れておきたい。

### 1 五領ヶ台式土器について

本論に入る前にふれた2つの問題についてここで改めて考えたい。本来の五領ヶ台式土器以前にもう一型式が設定され、五領ヶ台Ⅰ式とされたこと。そして、五領ヶ台式土器の系統に対する疑問。前者は今村氏の提唱、後者も氏によって細かく検討されている。従って、氏の考えを吟味し、本論の成果を加味することが、その問題を明らかにするために効果的と考える。

まずその五領ヶ台Ⅰ式は、宮の原貝塚の第6層でまとまって出土し、第6群・第7群a類としたもので、「今まで関東地方では良くその存在が知られていなかった型式の土器で」(今村 1972)あった。これらは層位的、型的に「十三善台式と五領ヶ台式の間隙を埋める新型式として『宮の原式』の設定が考えられる」(同)としながらも、種々の事情を考慮して、五領ヶ台Ⅰ式としたという経緯が知られる。しかし、さらに中部地方との対比に触れ、「五領ヶ台Ⅰ式はほぼ梨久保式に、五領ヶ台Ⅱ式はほぼ神殿・唐沢式と呼ばれるものに対応するようである」(同)という記述がある。そして



「中部地方の五領ヶ台式は、西関東のそれに似すぎている」(今村 1985)といい、横浜市中駒の資料について「長野県の梨久保式や踊場式によく似ているが、関東地方の編年の中にはぴったりと該当する型式が無い」(今村 1985)という。この2者の記述は矛盾するが、いずれにせよここであえて宮の原式を想定し、五領ヶ台Ⅰ式を設定した意義が非常な疑問となる。氏自身もいう梨久保式でよかったはずである。事実、昭和26年に設定された梨久保式土器の中には、今村氏が五領ヶ台Ⅰ式として呈示した土器の大方は含まれている。そもそも、五領ヶ台式土器とは、今村氏が、八幡一郎・三森定男両氏の資料を自身で実見した結果、「当初の五領ヶ台式が、主にⅡ式をさしていたことは明らか」(今村 1985)なはずであった。

次に問題となるⅡ式であるが、3細分された各々の系統観や型式内容について、不透明な部分が多い。今村氏の用いた資料(今村 1985)をその年代順に並べるとそれがより具体的になる。Ⅱa式はほとんど縄文系の土器であるのに対し、Ⅱb式は沈線文系とした土器がほとんどで、Ⅱc式では再び縄文系が大半を占め沈線文系は全くない。要するに縄文系と沈線文系の土器が交互に出現するという系統を語る。この系統観の中では、氏がいう「五領ヶ台系」とは一体何であるのかという本質が見えなくなる。この点についてさらに具体的に指摘すると、五領ヶ台Ⅱb式こそ「本来の五領ヶ台式は大体この型式をさしたもの」(今村 1985)と考える今村氏が、この土器についてもう一方では「系統的には踊場系の強い影響を受けており、五領ヶ台式の系統と、踊場式の系統の融合によって成立した型式といってよい」(同)という矛盾した記述を行い、五領ヶ台式の本質と系統をわからなくする。ならば「五領ヶ台式の系統」とは一体何を示すのかということである。その系統がそれ以前にたどれるとしたらそれはⅠ式であるが、そのⅠ式は「梨久保式に対応する」土器として前述した通り今村氏が昭和47年に設定した土器型式なのである。だとすれば昭和26年に提唱された「梨久保式土器」の内容こそ十分に消化された上で使われることが型式設定の常であったはずである。

さらに、そもそもこの「本来の五領ヶ台式土器」とされるⅡb式土器は、今村氏も「踊場式の系統

の融合」のあったことを想定しているように、私のいう沈線文系後半の土器である。そして、この沈線文系土器は、昭和9年に藤森栄一氏によってまとめられた踊場b類土器(藤森 1934)にその系統を発するものであることが明らかとなった。従って、本論で示した系統観が有効なものであれば、五領ヶ台式はその存在すら危ぶまれる事態となるのである(註8)。

## 2 梨久保式土器の再認識

梨久保遺跡出土の中期初頭土器がいかなる内容を持っていたか、そして、それらが研究史的にはどう扱われてきたかについては、梨久保遺跡の報文中にて触れたように本論の第IV章の内容とほぼ一致し、また研究史的には梨久保式設定時に縄文・沈線文両系統の土器を明確に認識し設定されている事実(戸沢 1951)に改めて注目すべきで、資料的実態もそれに矛盾していないことを知った。要するに該期の土器は器形と文様の相関性が非常に強く、その規制の中で作られていたのである(註9)。

そもそも中期初頭土器研究の混乱はこの2者、すなわち梨久保式における縄文系・沈線文系土器という関係の不透明さからきている。「前期末から中期初頭にかけての編年は、ある程度の体裁を整えたかみえるが、その中心となる諏訪湖岸の土器型式の編年序列が、そのまま時間的経過を示すものとは限らないという編年研究としては最大の問題点が残されている」(松村 1974)という指摘にも明らかで、その後沈線文系と縄文系の編年をめぐっていくつかの論攻が出されたが、両者の併存を説く積極的な意見は少なかった。踊場式の名は梨久保式以前の型式として根強いのであるが、その根拠はほとんどなかったし、そもそも踊場式は1つの型式として時間的にも空間的にもそれだけで独立して存在することはないのである。このように、踊場の土器を含めて設定された梨久保式土器は、その理解が至らぬままその一部を構成する踊場の土器とそれ以外の土器の扱いをめぐって混乱し、それが拡大してしまったのである。そして、中期初頭でも後半期の一部に対しては確かに唐沢式など新たな追加もあったが、これはむしろ梨久保式の後半の形として理解しておいた方が本

論中でも述べたように、型式学的にもスムーズである。戸沢氏自身、本論のⅡc 段階に相当する長野県岡谷市原沢遺跡の資料(37)に対し「縄文時代中期初頭という時期をめぐる、土器編年学的研究の上で考古学的には重要な資料」であるとし、これを改めて「梨久保式」と認識されているし(戸沢 1973)、また同じ様相の土器に対して藤森氏も「梨久保式最後の姿」(藤森 1966)とすべきだという発言を行っている。こうした後半の土器を含めることによって、中期初頭全般の土器はすべて梨久保式土器としてそろってくるのである。

以上、冗長に中期初頭の土器を縄文系・沈線文系と分け、その系統性、共存関係等について述べ、その在り方は梨久保式土器が設定された時点における型式観が、資料の豊富となった現在も、中期初頭土器全般を指す概念として、最も適切な内容と意義を含んでいたことを改めて知ることができた。そして、かつて「鶴の土器」と呼ばれた一群は、まぎれもなく以後中葉期に隆盛を迎えた「井

戸尻文化」の一翼を担った華麗な土器の確かな礎となっていたのである。つまり中部山岳地帯では、例えば平出第Ⅲ類A土器に代表される西関東地方には全くない土器の存続にも現れているように、中期初頭土器群の伝統が根強く継がれ、それが強力な地域色となって独自の文化を築いてゆくことになったと考えたい。最後にここに再度縄文時代中期初頭に中部・西関東地方に分布を持つ土器の、編年的に最もふさわしい型式として「梨久保式土器」の名を提唱して本稿をとじることにしたい。

本論は、本文中でも触れた通り岡谷市梨久保遺跡の報告書をまとめる中から疑問に感じたことについて追求したことをまとめたものである、報告書作成当初より多くの方々より種々の有益な助言や指導をうけることができた。戸沢充則・樋口昇一・会田進・長崎元広・唐木孝雄・寺内隆夫各氏や明記しないが学恩をうけた多くの方々に深く感謝する次第である。

- 註1 中期初頭土器の研究には山口明氏の業績(山口 1978・1980)も大きい、型式名には慎重で、あまり触れられていない。少なくとも特に五領ヶ台式については後述するように、ごく限られたものに適用するに止められており、五領ヶ台式を拡大して解釈した今村氏とは対照的である。
- 註2 今村氏は、宮の原貝塚のデーターでこの踊場に類似する土器を5群a類と分類し、五領ヶ台式とした6群よりも層位的には「先行している可能性を示している」(今村 1972)とした。しかし、そのデーターを見る限りごく少量5群a類が確かに下層より出土しているものもあるが、ほとんどは6群と同一層中より出土しており、氏自身も懸念するように「むしろ五領ヶ台式に近い」(同)のではないかと考える。最近、その両者が併行するものではないかとする考えが、ようやく出始めている(今村 1974、能登 1981)。
- 註3 宮坂光昭氏(宮坂 1965)や藤森栄一氏(藤森 1966)により、古くから指摘されていた。
- 註4 この間の詳しい型式推移については、諸磯C式→晴ヶ峰式→梨久保式にかけての系統的な変化として触れてある(三上 1987)。
- 註5 山口氏も多段のものをより古く位置付けている(山口 1978)。
- 註6 ただし、縄文系・沈線文系両者の共伴の比率には少なからぬ違いがある。これは地域単位、さらには遺跡単位でさえ両者の比率に相異のあることは事実で、このことは今後の課題とされなければならない。
- 註7 「中部高地を本拠地とする踊場式土器」(今村 1985)、「細線文土器群は関東を中心に、そして、集合沈線文土器群は比較的中部地方に偏在する傾向を示している」(能登 1981)。本来の五領ヶ台式が、筆者の考えるように沈線文系(踊場式)後半にあたるものであれば、本来ならば上記のように考える研究者は、その中心地にあたる型式名を冠することがふさわしいと考えるべきで、五領ヶ台式を使うことが矛盾となる。
- 註8 遺跡での在り方は、先にも記したように縄文系と沈線文系土器がセットになって出土する例が増加している。従って、両者を総称する型式名称に苦慮する傾向が現われ始めた。例えば、一軒の住居から出土する中期初頭土器の説明に際して、「五領ヶ台式土器は本来集合沈線文系を含まないものとするが……中略……この土器もあえて含めて説明する。」(小野 1986)といわざるを得ない状況を生んでいる。その一部を示すにとどまる五領ヶ台式という名称では、中期初頭土器を総括する型式名としてはもはや不完全で、実態に対応でき得ないという矛盾さえおこしているのである。
- 註9 縄文時代中期中葉の土器にもこうした現象が厳然と存在することを述べたことがある(三上 1986a)。

図版掲載土器出土遺跡一覧表 (数字のみは住居址、土は土壌、Pはピット)

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	東京 明神社北	47	長野 船霊社11	93	長野 大洞
2	神奈川 宮の原	48	長野 梨久保84	94	長野 籠畑10
3	長野 大石 土855	49	東京 們田IV	95	神奈川 宮の原
4	神奈川 宮の原	50	長野 大石18	96	長野 高見原
5	長野 梨久保	51	長野 雨堀	97	長野 高見原
6	長野 梨久保	52	長野 大石 土435	98	長野 高見原
7	神奈川 宮の原	53	長野 頭殿沢14	99	東京 小山田12
8	長野 籠畑	54	長野 頭殿沢14	100	東京 小山田12
9	東京 明神社北	55	長野 大石 土429	101	長野 高風呂
10	長野 羽場下2	56	長野 大石 土587	102	長野 高風呂
11	長野 大石 土201	57	長野 大石 土587	103	長野 高風呂
12	長野 梨久保 495P	58	山梨 机腰	104	長野 梨久保 394P
13	東京 們田IV15	59	東京 前田耕地	105	長野 瑠璃寺前
14	神奈川 京王帝都相模原線	60	東京 神谷原	106	長野 大石1
15	神奈川 尾崎	61	長野 船霊社 土11	107	長野 曾利 土14
16	長野 九兵衛尾根	62	長野 頭殿沢10	108	長野 大石1
17	神奈川 宮の原	63	長野 頭殿沢10	109	長野 大石1
18	神奈川 宮の原	64	長野 竹之城原	110	長野 大石30
19	長野 梨久保	65	東京 武蔵J地区	111	長野 大石1
20	神奈川 宮の原	66	長野 雨堀	112	長野 大石1
21	長野 雨堀	67	山梨 下向山	113	東京 們田IV
22	長野 雨堀	68	長野 曾利134	114	長野 大石28
23	長野 曾利57	69	長野 頭殿沢9	115	長野 大石28
24	長野 頭殿沢 土184	70	長野 大石15	116	東京 武蔵J地区
25	山梨 下向山	71	長野 大石2	117	山梨 下向山
26	東京 神谷原 土27	72	長野 大石15	118	神奈川 山之台
27	神奈川 山之台	73	長野 大石3	119	長野 大石1
28	東京 神谷原113	74	長野 大石3	120	長野 大石 土485
29	長野 頭殿沢	75	長野 大石38	121	長野 大石 土1157
30	東京 神谷原	76	長野 大石21	122	長野 大石 土890
31	東京 武蔵J地区	77	長野 大石14	123	長野 北丘B
32	東京 神谷原 土31	78	長野 大石14	124	長野 大石3
33	長野 頭殿沢 土182	79	長野 荒神山77	125	長野 大石3
34	長野 船霊社11	80	長野 荒神山77	126	長野 大石3
35	長野 船霊社1	81	長野 大石25	127	長野 大石15
36	長野 高部13	82	長野 樋口内城9	128	長野 大石15
37	長野 原沢	83	長野 籠畑10	129	長野 荒神山49
38	長野 船霊社14	84	長野 広畑	130	長野 大石13
39	長野 船霊社1	85	長野 梨久保	131	長野 荒神山49
40	長野 船霊社10	86	長野 高見原1	132	東京 神明社北
41	長野 曾利42	87	神奈川 宮の原	133	山梨 上平出
42	長野 頭殿沢11	88	神奈川 宮の原	134	長野 月見松
43	神奈川 山之台	89	神奈川 宮の原	135	長野 月見松
44	東京 神谷原 土30	90	長野 高見原1	136	長野 梨久保
45	長野 梨久保97	91	長野 高見原1		
46	東京 神谷原113	92	長野 羽場下2		

## 引用参考文献

- イ 池谷信之・山下正博 1981 「秦野市山之台遺跡出土の土器と石器」小田原考古学研究会会報第10号  
 今村啓爾 1972 「前期末～中期初頭の土器編年について」『宮の原貝塚』  
 1974 「登計原遺跡の縄文前期末の土器と十三菩台式土器細分の試み」『とけっぱら遺跡』  
 1985 「五領ヶ台式土器の編年」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第4号
- ウ 鶴飼幸雄 1977 「平出Ⅲ類A土器の編年的位置づけとその社会的背景」信濃29-4
- エ 江坂輝弥 1949 「相模五領ヶ台貝塚調査報告」考古学集刊第3冊
- オ 小野正文 1986 「第5章 縄文時代中期」『釈迦堂1』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集
- テ 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」下総考古学7
- ト 戸沢充則・宮坂光昭 1951 「長地村梨久保遺跡調査報告」諏訪考古学7  
 戸沢充則 1953 「諏訪湖周辺の中期初頭縄文式遺跡」信濃5-5  
 1973 「原始・古代の岡谷」『岡谷市史上巻』  
 1984 「藤森栄一論」『縄文文化の研究10』
- ノ 能登健 1981 「五領ヶ台式土器」『縄文土器大成2』
- フ 藤森栄一 1934 「信濃上諏訪町踊場の土器」人類学雑誌49-10  
 1935 「古式縄紋土器の終末と厚手土器の進展」考古学評論第1巻第2号  
 1956 「中部・複雑な中期縄文式土器とその消長」日本考古学講座3  
 1966 「中部高地の中期初頭縄文式土器」富士国立公園博物館研究報告16
- マ 松村恵司 1974 「縄文時代中期初頭土器研究史」史館第3号
- ミ 三上徹也 1986 a 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」長野県考古学会誌51号  
 1986 b 「縄文時代中期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』  
 1987 「第4章 大洞遺跡5-1(前期末葉～中期初頭土器の編年)」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 宮坂光昭 1965 「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査」長野県考古学会誌3号
- ヤ 山口明 1978 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」駿台史学第43号  
 1980 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『縄文土器の交流とその背景』静岡県考古学会シンポジウム4
- 山内清男 1936 「日本考古学の秩序」ミネルヴァ1巻4号  
 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学1巻1号

(本稿を草するに際し資料として用いた報告書については割愛した。御寛容いただきたい。)

## 五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ

—型式変遷における一視点—

寺内 隆夫

- 
- |   |  |
|---|--|
| <p>I 土器装飾の分析</p> <p>1 土器研究の流れ</p> <p>2 視点と対象</p> <p>(1) 実用的機能と非実用的機能</p> <p>(2) 運用・統辞・意味</p> <p>(3) 五領ヶ台式土器から勝坂式土器への<br/>転換期を狙う</p> <p>3 統辞部門の分析にあたって</p> <p>(1) 土器装飾としての制約</p> <p>(2) 土器装飾の構成</p> <p>II 五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ</p> <p>1 装飾構造の変化</p> <p>(1) 五領ヶ台式土器の装飾構造</p> | <p>(2) 勝坂式土器の装飾構造</p> <p>(3) 小結</p> <p>2 装飾構造の変化にともなう個別装飾の<br/>変化</p> <p>(1) 玉抱三叉文の変化—主装飾の場合</p> <p>(2) 連続「コ」の字文の変化—補助装飾<br/>の場合</p> <p>(3) 人面装飾と人体装飾—具象文の変化</p> <p>(4) 小結</p> <p>III まとめ</p> <p>1 まとめ</p> <p>2 展望</p> <p>3 おわりに</p> |
|---|--|
- 

## I 土器装飾の分析

## 1 土器研究の流れ

19世紀に入り、西洋から導入された学問が興隆する時期、縄文土器の研究があらためて祖上にとぼると、歴史学・人類学の学問体系の中でどのような位置づけを与えるべきか、といった分類と帰属が問題になった。当時の世相を反映し、まずはじめに、その土器を使用した民族が究明されるべき重要課題となり、厳密な時間的な位置づけはそれに附随する問題とされる傾向にあった。そこには、最終的には大和民族によって席捲される土器文化・民族というストーリーが前提として見え隠れしていた。

その後、考古学の発達にともなって、縄文土器の位置づけが先入観念や恣意的な解釈を離れて「真に執るべき科学的」(山内 1937)な方法によって解明される方向が示された。20世紀前半に入ると、縄文土器の時間的・空間的体系の確立に多くの才能が投入されていった。その前提は、「文化の変遷は進行中の状態で観察することは出来ない」(山内 1937)という言葉に示されるように、年代差・地方差をより細かく分類し、モザイク状に組

み上げた(系統関係を把握した上での)縄文土器の体系を作ることにあった。個々の土器の内容を知ること、それに対比される土器との差異を明確にすることであり、よって、対比される枠組みはできるだけ細かい方が土器文化の動きを鮮明に描けるのである。

こうした研究動向にそって、各地域で多くの型式(枠組み)が設定され、他の型式との差異が述べられていった。しかし、隣接する型式と型式の差異を一刀両断に示すことは土器装飾の性質上無理があり、見解の相違を生み議論が泥沼化することもたびたびおこった。これは、枠組み(型式)の設定自体の持つ固定的な属性が、土器文化の複雑な動きに対処しきれないためであった。

一定の小地域の短かい時期に存在する土器群には、我々の設定した典型的な型式のほかに、搬入されたもの、他型式の装飾要素の一部を取り入れたものなど、多種多様な土器が存在している。こうした事実が、型式設定における矛盾の中から再度脚光を浴びることになっていった。1970年代頃から主流となる研究(もちろん土器研究の初期から論じられてはいたが)は、土器そのものとその背後に存

在する人間社会の運動状態の解明に向った。静態的な枠組みの設定から、その枠組みを越えた運動状態を鮮明に描くことに目標が変化したのである。しかし、ことわっておかなくてはならないのは、このことによって枠組みを設定する努力が放棄されたのではなく、より細部にわたる分類と系統の把握が必要条件となっていたのである。土器に対する視点の向け方が変わったとしても、枠組みの設定をより細かく究極まで進めることで文化の動きを鮮明に描く、という方針は生きているのである。

土器の細分が進む一方で「細別型式の年代的連続がよく認められ、自然に大別をなすべき区切りを発見し得ない状態である。」(山内 1937)といわせた縄文土器をいくつかの群にまとめる研究もなされてきた。岡本勇氏はその一連の論文(岡本 1965・1966・1968・1969・1975)によって、山内氏の提唱した5期区分を克服する端緒として、型式群の設定を行なった。しかし、氏の主張は細別型式の総合化を生産力の発展に即して行なおうとした点で多少問題が残る(堀越 1971)。土器装飾に示された象徴的な文化の体系と生産の体系とはたがいに干渉する部分はあるものの、一致するとは限らないからである。

また、小林達雄氏は「様式」の概念を用いて「型式群」を説明しようと試みた(小林 1966・1977)。しかし、氏のいう「共通の気風」を分析する方法は具体的に示されず、抽象的な一般論の段階にとどまっていた。

その後小林氏は火炎土器を対象にしてその分析方法の一端を発表している(小林 1981)が、1977年には谷井彪氏により、勝坂式を対象として「型式群」、「様式」を具体的に捉える方法がうちだされた。その「勝坂式土器の文様構造について」(谷井 1977)と題する論文は、新しい角度からそれまでの型式研究の不備を指摘し、抽象的な説明しかされなかった「様式」を「実体レベル」で把握する方法を具体的に示した。土器装飾にはその製作・使用する集団の分類・論理体系が表出されているという前提にたち、勝坂式土器の基本構造と各レベルにおける交換体系をとりあげた内容は、個別の結論では煮つまっていない面も認められるものの、その新鮮な切込み方については評価される

べきものであろう。本稿の出発点においても谷井氏の論文に触発された部分が多いことをことわっておきたい。

土器装飾を盛んにおこなった縄文文化は、新たな装飾方法を開発し装飾を絶えず変化させていった。めまぐるしいほどの「あたりしき」への欲求は、土器製作を盛行させ、さらに土器を中心とした文化を活性化していったのであろう。細部におよぶ土器装飾の動きを明らかにしていくことは、その文化の活性化や沈滞化を担った人々の動きを捉える上で重要な意味を持つものである。しかし、まったく開放しっぱなしで土器装飾が変化していくわけではない。そこには特定の「まとまり」ができるのである。それは、情報の伝達が行きとどかないとか、材料の入手に差がある、といった問題の以前に、分類・論理体系がなくては人間社会が成立しないという点にかかわってくる。自己あるいは自己の所属する集団の確認は、他との差異によって知ることができるのであり、自己の認識できる世界を分類し、体系付けることによって可能となるのである。おのずと、土器装飾には伝統や規範という形で、時期によっては強い意志によって、またある時期にはほとんど無意識に近い状態でこうした力がおよぶと考えられる。よって特定の時期・地域には他と異なる「まとまり」が存在することになる。そしてそれは、その集団の分類・論理体系にかかわる以上、短期間で極端に変わってしまうことがなく、我々が「型式群」として捉えるものに相当する時間の長さを有していたと考えられる。これまでの研究はこの「まとまり」を具体的な分析によって示すことが皆無に等しかったが、谷井氏の研究指針を発展させること、さらに記号論の導入などによって可能となる部分も増えたと考えられる(鈴木 1983、中島 1985)。

土器研究の現状は、土器装飾そのものの、そしてその背後に存在する人間の運動状態と、めまぐるしく揺れ動きながらも一定の時間と空間内に認められる「まとまり」の両者を具体的に分析し得る段階に入ってきたといえよう。活性化の方向と規範化の方向は絶えず反発し、一方に傾斜することがあったとしても、土器装飾およびそこから垣間見る文化は、両者の均衡によって成り立っていることには違いない。そのため、今までのように

一方に偏った研究から、両者を総合した研究がなされなければならない。そしてその上で、土器装飾のもつ豊富な内容の分析を改めて行ってみるべきであろう。本稿においても、そのあたりを射程に含めていくつかの試みを提示していきたい。

## 2 視点と対象

前節で述べたことをそのまま実行するにはひじょうに大がかりな分析が必要であるため、本稿ではあらかじめ視点と対象をしぼっていききたい。

### (1) 実用的機能と非実用的機能

土器が装飾だけの美術品として生まれたものではなく、容器である点を忘れるわけにはいかない。たとえば、同一系統の土器において器種の構成に大きな変化が認められる。あるいは、特定の主要な形態に大きな変化が生じる、といった点を重視していくつかの型式を群にまとめたり、分離したりすることも可能である。これは実用的機能を優先して考えた場合であり、その指示することは、食生活を巡る文化の差や、生産基盤の差であろう(註1)。

一方、縄文時代にあつては、装飾に土器製作中のエネルギーの大半が注ぎこまれたと考えられる。しかし、その差はいちがいに生産基盤に一致するとは限らない。装飾の過剰となってくる中期を見ても、相模湾岸(五領ヶ貝塚など)から島嶼部(大石山遺跡など)と中部山岳地域には共通性の高い勝坂式土器が主体的に分布しており、房総半島から三国峠付近(新巻遺跡など)には阿玉台式土器が広がっているのである。山間部の集落の住民と貝塚を形成する集落の住民が同様の生活基盤の上に立っているとは考え難く、よつてこの事実、ある集団が生産基盤の共通性(短絡的に海と山に分けて考えることはできないが大局的には許されるであろう)を離れて、同一の価値観(分類・論理体系)を保持していたことを示している。ここに非実用的機能である装飾に注意を払い、装飾の内容によって型式を群にまとめることが重要な意味をもつてくる。

さらに、実用的機能と非実用的機能の表現は同時に変化したり、同じ分布範囲を示しているとは限らないのである。そのズレは、時間軸にそつて考えてみると、生産基盤ののつとつた社会状況の

変化の「徴候」ととれる装飾の変化やまた、一方では社会からの必要性に従属する形で社会の変化に遅れて現われ、長い期間保持される装飾によって生ずる。このことを的確に捉えることができたならば、こうしたズレの存在から装飾の意味を探ることが可能になり、また社会の変化を土器装飾という社会の細部から読みとることも可能になろう。この点に関しては最終章で若干触れてみたい。

### (2) 運用・統辞・意味

非実用的機能を重視して型式群としての「まとめり」と土器細部の「動き」とを検討していくのであるが、土器に見られる非実用的機能は、時代によってその強弱が激しい。これは、装飾にどれだけの意味を盛り込めるか、という縄文人の精神の発達自体に差があること。また、宗教的遺物の発達段階や、祭祀の体系の変化などにより土器装飾の意味が相対的に異なっていることがあげられる(註2)。そのため、縄文時代の全般を同一に見ることは難しい。よつて今回は具象文(即物的に強い意味をもっていることがわかる)が多くなり「物語性文様」(小林 1979)と呼ばれたりもし、実用的機能までも束縛するような大把手や隆線装飾の発達する中期前半に視点と据えていきたい。

土器の非実用的機能の分析にあつては、先ほどあげた運用面のほか、統辞部門・意味部門といった土器装飾を直接分析する方法が考えられる。

運用部門は、縄文時代における美術や信仰の体系の中での土器装飾の使われ方が問題となる。そのため広範囲の事物を分析する必要があり、土器そのものの分析を逸脱するため、ここでは除外しておく。

土器装飾にあらわれた意味を解説する研究は、古くから蛇体文の分析などを通じておこなわれてきた(江上 1963など)。近年では武藤雄六氏らを中心にしたグループにより積極的な意見が提出されている(武藤 1975、1978 a・b)。しかし、中世ヨーロッパの絵画分析や民族芸術の分析と異なり、装飾の意味を裏づける資料や伝承が皆無であるため、ややもすると、自分の思い込みに沿つた形に読み変えられてしまう危険性を捨てきれない。このことから、土器から直接意味を解説する研究はいつ

たん保留しておいて、周辺を固めることを優先すべきであろう。

一方、特定の意味や価値観は土器装飾に変換されて表現されるため、特定の意味は特定の装飾方法に一致することになる。このことから、キャンバスである器面がどのように分割されているのか、主となる個別装飾はどの位置に配置されるのか、主装飾と他の装飾はどのようなルールによって組織され、全体を形づくっているのか、などという統辞法を詳しく分析していくことで、土器装飾に隠された意味や価値観に迫ることが可能になるのである。本来統辞部門と意味部門は併行して分析されるのが最良であるが、意味部門を保留せざるを得ない現状では、統辞部門において隣接する時期と地域の土器を比較しその差異を明確にすることで、特定集団の独自性を探っていくことにせざるを得ない。その独自性こそその集団に共通の価値観や論理体系を象徴的に現わしたものとしよう。

本稿ではこうした前提に立って統辞部門に焦点を当てて行くものである。

### (3) 五領ヶ台式土器から勝坂式土器への転換期を狙う

前項でも指摘したとおり意味部門に手を付けずに、統辞部門を分析するには、時間的・空間的に隣接する型式との差異を明らかにしていくことが重要である。今回は紙数の関係上、空間的に隣接する型式との関係は除き、同一系統の土器が時間的に変遷する中で、特に画期となる時間幅を選ぶこととした。

一つの土器装飾の構造が画期を向かえる要因には、他地域からの圧倒的な力により席捲されてしまう場合がまず考えられる。しかし、土器製作技術や装飾効果のいずれもが系統関係を追える場合、その転換は何を意味しているのであろうか。

絶えず変化しながらも全体構造がある程度保たれているのは、その背後に集団の価値観や分類・論理体系が関与している点を再三述べてきたが、現実それを支えているのは、1つには、意識・無意識を問わずに土器製作者にかかる伝統である。そしてさらに直接的には土器製作時における上の世代からの製作技術に関する伝承であり、下の世代の学習にある。

そのため、土器装飾構造が転換を迎えるのは、土器製作を行う新しい世代が、それまでの価値観に不信感を抱きはじめた時点で芽ばえるといえよう。個人の製作意欲は各構成要素のレベルに「新しさ」を加えることで解消可能な場合が多い。しかし、背後に大きな社会変動があった場合、集団の価値観なども変化を余儀なくされ、それは土器製作そのものの位置付けの変化とともに、そこに表現される装飾構造の転換にもつながるのである。

こうした仮定を念頭におき、五領ヶ台式土器から勝坂式土器(以下特定の場合以外「土器」は省略する)への転換期に焦点をしばるのであるが、五領ヶ台式と勝坂式をどこで分けるかについては諸説があり統一されていない。勝坂式の設定直後にはすでに、山内氏(山内 1940)と甲野・八幡両氏(甲野 1935、八幡 1938)との扱え方は異なっており、その後貉沢式の所在が問題となることで、さらに、意見の分れることになった(藤森 1965、武藤 1978)。勝坂式の成立に問題をしぼると、1 山内氏説の踏襲一勝坂Ⅲ(藤内)式から(佐藤 1974、今村 1986)。2 甲野氏説を踏襲一勝坂Ⅱ(新道)式から(戸田 1971)。3 勝坂Ⅰ(貉沢)式から(谷井 1977、鈴木 1983、下総考古学研究会 1986)。などがある。

貉沢式については井戸尻編年の設定当初から位置付けが問題となっていた。五領ヶ台式と勝坂式の間に入る阿玉台式の影響を受けた土器との見方もあったが(戸田 1971)、詳細にわたる分析の結果、阿玉台式の影響はさほどなく、西関東・中部高地の五領ヶ台式から直接継承した部分がほとんどであることが判明している(中西 1979、寺内 1984)。さらにその内容からも、この段階を勝坂式から分離する理由は薄いと考えられる(寺内 1984ほか)。よって、ここでは、筆者も参加した下総考古学研究会の共同研究の成果を踏襲し、井戸尻編年でいう貉沢式を勝坂Ⅰ式として考えていく。さらに本論の中でこの段階から勝坂式とした根拠を補足していくこととする。

## 3 統辞部門の分析にあたって

### (1) 土器装飾としての制約

各種の装飾はデタラメに付されるのではなく、その時期特有の統辞法によって組み立てられ、一個の意味を形成している。しかし、土器の製作者



たちが満足のゆく表現をしようと試みたとしても、キャンパスが土器である以上、素材からくる制約がどうしてもつきまとうことになる。

第1には、粘土でつくられた焼物であることによって、装飾の方法が限定されてしまう点である。特に施文具と施文手法の限定については、型式研究の基本として盛んに論じられてきたところである。技法としては貼り付けるか、塗り付けるか、あるいは何らかの工具を動かしてその痕跡を残すか、のいずれかに限定される、と言ってよく。そのため、表現されるモチーフもおのずから限定されていくのである。縄文時代の早期には施文具、施文手法のほとんどが出そろってしまい、勝負はその内の何を主に使うか(縄文のパラティエーで勝負するのか竹管状工具と粘土紐の貼付けで勝負するのか)と、各々の個別装飾をどのように配置して一つの土器の装飾としてまとめあげるか、にかかってくるのである。

第2には実用的機能からくる制約である。縄文土器の基本が煮沸に使用する深鉢形土器にあることは承認済みのことと思われる。この深鉢について考えるならば、火にかけることから使えない装飾もあろうが、それとともに、その機能から口頸部の膨らむ円筒形が主流を占めることに着目しなければならない。まず、容器であるため内面への装飾は敬遠され、視線を集めやすいことから外表面を対象とする場合がほとんどになる。そして、その外表面に施された装飾が、その口頸部の膨らむ器形から上下に2分割されることを余儀なくされている点に注目すべきであろう。この2分割は、縄文時代の多くの時期の装飾を規定する要因の一つとなっている。

第3に口頸部のふくらむ器形は無意識に口頸部への視線集中の傾向を生み(上野 1981)、口頸部主流の装飾構造の成立をうながしているといえよう。

第4に円筒形という制約から、外表面に描かれた装飾は必然的に一度に全装飾内容を見ることができない。このことは、同一装飾の機械的な繰替しによってどこから見ても同じ効果を表現する場合と、中期の土器に代表されるように、「物語性文様」の展開となる場合を生みだしている。この場合は把手などを中心として分割された一つ一つ

の面(単位)が、一度に目に入る「場面」として完成されている。その面と同一構成の装飾が単位毎に若干の差をもちながら展開されるのは、土器を回転させて見る行為の時間的経過と、土器表面に描かれた場面の時間的経過を一致させて示している、とも考えられよう。また異なった装飾との組み合わせとなる場合には、空間の移動を示していることもあろう。後者の場合であっても、一つの土器の一連の装飾内における空間(場面)の移動であるため、それは時間の移動に近い意味をもつといえよう。

以上の如く縄文時代の深鉢形土器はその用途に即した形から、上下に長いキャンパスが二分され、しかも視線が口頸部に向きやすい傾向にあることを指摘した。このことは口頸部文様帯と胴部文様帯で空間を二分し、さらにキャンパス上での上下関係、装飾量の多少がそこに付加され、装飾内容の主従となってしまうことがありうることを示している。また、円筒形である土器の装飾は一度に確認できる空間(単位)が横方向へ時間的に展開しやすい点を認めなければならない。

このように、土器装飾は土器の実用的機能に即した形からの制約を受け、表現が限定されてしまったり、知らず知らずのうちに分割・展開方法をその形から受け入れてしまったりしている。よって、土器装飾の分析においては、装飾の方法が直接その製作者たちの表現したい世界に一致するとは限らない、という点をまず確認しておかなくては大きな誤りを犯す場合がでてこよう。これは、強い意味付けをされた装飾要素と、単に機械的に器面を埋めていく装飾要素との見極めにも通じるところである。しかし、こうした制約を実に巧みに利用し制約を制約と感じさせない表現が発達していることも事実である。

## (2) 土器装飾の構成方法

一つの土器装飾全体は構造をもち、それは部分の集合から成り立っているが、それぞれの部分を全体の構造に見合った形に組織立てて統合して行く方法が統辞法である。そして個々の部分は各レベルにおける構成要素となる。ここでは次章の具体的分析へ入る前に各レベルの構成要素の説明を行っておくこととする。

構成要素の最小単位を装飾要素と呼ぶ。これは、竹管状工具による刺突の一つ一つの凹み、沈線の一本一本などをさす。これ自体では意味を形成できないものが多く、いくつかの装飾要素が集合して、意味を有すると考えられる個別装飾が成立する。ここで文様に限定せず装飾とした理由は、文様とした場合、製作技法にもかかわる輪積痕の意識的な残存やヘラ状工具による磨き、あるいは屈折底などの部分器形などを包括できないためである。しかし文章中で、文様だけにかかわる記述の場合は文様要素という言い方も使用する。

個別装飾とは、たとえば、三叉状の陰刻と円形の刺突が組み合わさってつくられる玉抱三叉文などで、土器装飾の単語とも呼べるものである。各々意味が付加されていると推定されるが、その配置、他の個別装飾との連結方法によって形成される脈絡の中で意味にも変化が生じると考えられる。

さらに、勝坂Ⅱ式の区画文と耳状突起の関係のように、個別装飾同志が必ず連結して慣用的に複合する場合があります、より上位の構成要素となっている。

個別装飾には、山形口縁の三角状空間といった視線の集中する箇所にくるものと、その周囲に配置されるもの、といったように主装飾と補助装飾の関係が約束事として存在する。こうした関係によって連結された個別装飾の集合は、より上位のレベルである文様帯(装飾帯)と単位装飾にかかわってくる。

文様帯は土器装飾全体の空間の基本的な分割にかかわっており、各文様帯は各々の領域において構造化した意味をもつと推定される。また単位装飾は把手などを基本として一度に見ることの可能な「場面」であり、他の場面との関係によって、時間的に限定された意味をもつものと推定される。

こうした各文様帯と単位装飾を統合して一つの土器装飾全体が成立しているのである。そこには、分割に関わる装飾要素や、各領域間や場面場面を繋ぐ装飾要素・個別装飾などが存在している。

部分が統合され、全体を形成しているのであるが、この統辞法は全面的に規制されているわけではなく、土器製作の活性化をうながすために、あるいは雑情報の混入などによって、絶えず新しい構成要素を各レベルで取り入れている。しかし谷

井氏も指摘するようにどのレベルの構成要素であっても、その型式の構造を否定してしまうこともあり得るし、逆にほとんどが異なっている場合でも、構造としてはその型式であると容認される場合があったと考えられる。

## Ⅱ 五領ケ台式土器から勝坂式土器へ

### 1 装飾構造の変化

ここでは、土器装飾における「筋書」とも呼べる基本的な分割と割り付け、及び主装飾の配置について見ていく。特に一度に見ることが可能な「場面」における上・下領域の統辞法に視点を定めていく。単位装飾の横方向への展開については安孫子氏や谷井氏の分析(安孫子 1969、谷井1979)があり、さらに近々、展開写真を軸にした研究が刊行されるやに聞いている。筆者自身展開図を多く見ていないため、この点に関しては保留しておきたい。

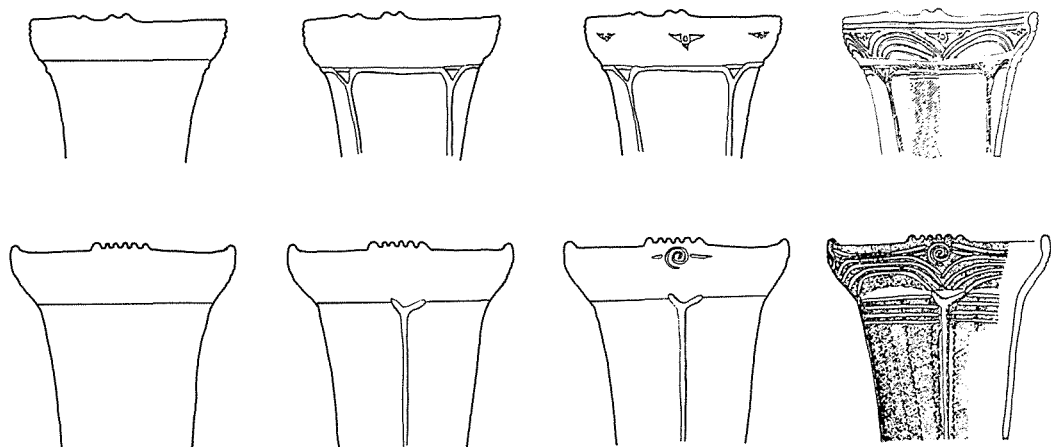
#### (1) 五領ケ台式土器の装飾構造(註3)

さて、第1図にあげた五領ケ台Ⅱ式(後)(註4)の例から、五領ケ台式の装飾構造と統辞法を考えていこう。まず1・2ともに特定の装飾が若干のちがいをもちながらも、横方向に繰返されていることがわかるが、この点に関しては確認だけにとどめておく。

さてこの二個体の土器装飾を構成している個別装飾・装飾要素を摘出しておこう。1、器形一キャリパー・2、突起・3、隆線一Y字状懸垂、横位隆帯。4、沈線一渦巻・弧状・横位。5、刺突一円形・刻み状。6、縄文。などである。

では、これらがどのような役割を担っているのかを見ていく。装飾構造の基本は第一に空間の分割にある。これは、器形と横位隆線(横位沈線)によって上下に二分され、上の領域は口頸部文様帯、下が胴部文様帯である。

下の領域で最も強調されるのは隆線による上下方向の懸垂文であり、それは上の領域を支える、あるいは上の領域へ上昇・下降の効果をねらっていると思われる。この上下方向の効果は五領ケ台Ⅰ式に結節縄文が横位から縦位に変化した段階にはじまると見てよく(第3図1)その後五領ケ台Ⅱ式には沈線や隆線の個別装飾によって強調され、



第1図 五領ヶ台Ⅱ式の基本構造

その位置付けが確立された。ほかには顕著な装飾がなく、上下の分帯をやわらげる横位沈線がある程度となっている。五領ヶ台Ⅱ式の前半には胴部装飾の密集する例も認められるが、その場合でも胴部装飾が乱雑にならないように統辞しているのは上下方向の懸垂文である場合がほとんどである(第3図2)。

これに対して上の領域の強調部分は、陰刻による玉抱三叉文・渦巻沈線と突起のセットである。この装飾は上の領域だけでなく、この土器装飾の主要モチーフでもある。五領ヶ台Ⅱ式の統辞法の基本は、空間の2分、主文様を口頸部に配し、その強調をおぎなう胴部の簡略化と懸垂文の存在にあり、他の装飾要素はその基本構造の補助となっている。この傾向は五領ヶ台Ⅰ式から一部に認められるが、顕著となるのはⅡ式で、特にその後半に入って完成の域に達する。

## (2) 勝坂式土器の装飾構造

勝坂式前半の装飾構造を語るにあたって、先に分析を加えた五領ヶ台Ⅱ式からの変化の中にとらえることとする。五領ヶ台Ⅱ式の基本構造は、空間の2分割・主要単位装飾を口頸部に配し、直線的に口頸部につながる胴部の隆線(沈線などの場合もある)の3点に集約されていく。このように、五領ヶ台Ⅱ式の土器装飾における「筋書」と呼べる部分はひじょうに簡単であった。多種類の五領ヶ台Ⅱ式の装飾要素は、それを飾ったり、補助したり、背景などとして発達していた、といえよう。

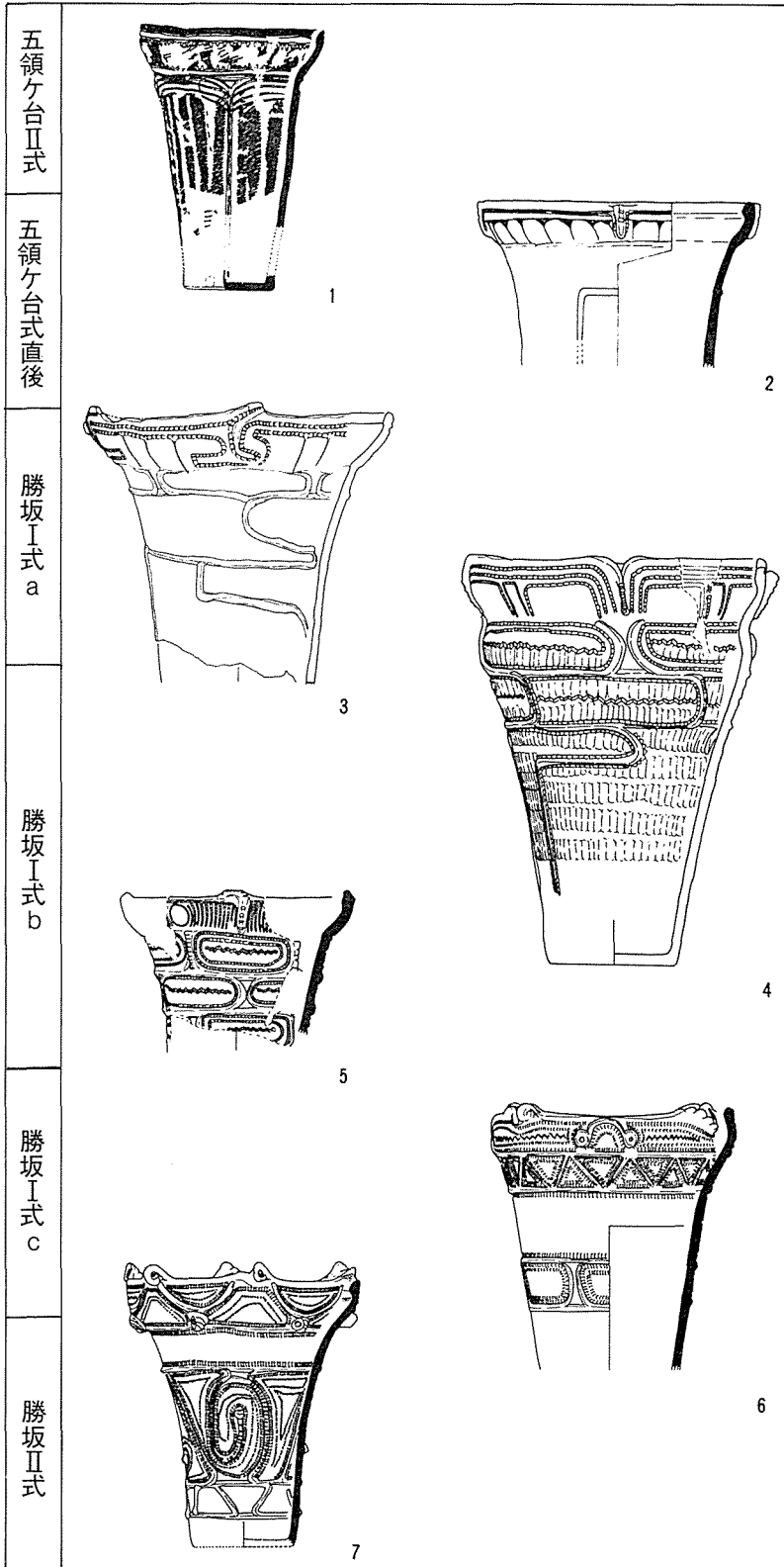
五領ヶ台式直後の段階に至ると、こうした「形容」する部分であった各種の装飾要素が激減する傾向を示し、勝坂Ⅰ式の段階に至ると、そのほとんどが、押引手法の沈線文に集約されてしまう。この「形容」する部分の減少・集約化の要因解明は別の機会にゆずるが、この点は時代を画する重要なポイントである。

五領ヶ台式直後の段階で、重要な点のもう一つは、「形容」する部分の減少・集約化の一方で、「筋書」の部分にあたる、胴部の隆線が屈曲をはじめたことにある。これは、その製作者・使用者たちの心理に、一部の「形容」する部分を変化させるだけでは済まされないほどの動揺が起ったことを示していよう。それまでの「筋書」自体に不安をいだいたためか、それとも積極的に変化を求めたのかは言及しないこととするが、少なくとも、尾ひれの変化では済まされない何かがあったことは確かであろう。

さて、第2図にそって、その「筋書」(構造)の変化について追ってみよう。

胴部で直線的に口頸部を支えていた(あるいはつないでいた)懸垂文は、五領ヶ台式直後の段階で屈曲をはじめ。ここに、胴部装飾の動揺がはじまるのである。

勝坂Ⅰ式a段階では屈曲はさらに強まり、横帯区画文と、屈曲する懸垂文が発達をつけ、b段階では重畳した横帯区画文が完成する。さらに、b段階からc段階に移る途上、重畳の傾向が過剰になり、横帯区画文と横帯区画文との間に空白部



分が生じたり、抽象文などが入るようになる。ここに至り、以後の勝坂式の基本的な装飾構造が完成するのである。

以上、五領ケ台式後半から勝坂式の初期段階の変化を追ってきたが、これをまとめると、

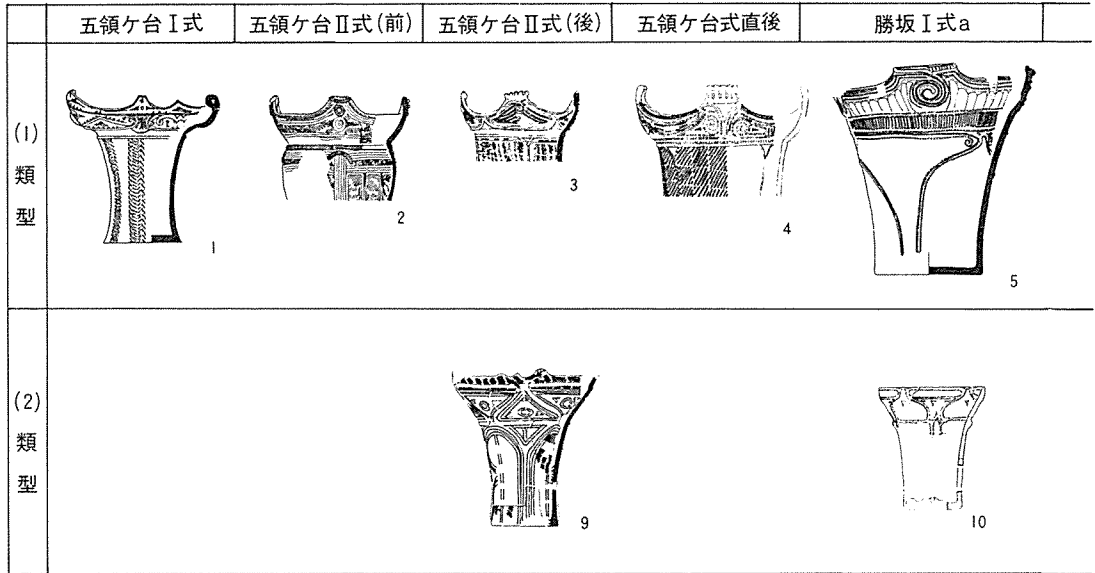
(1) 装飾構造が一変してしまっただけではなく、五領ケ台Ⅱ式の脈絡から変化し2分割のうちの、胴部装飾に語らせる部分が増大したことを示している。よって基本的な2分割は踏襲されている。

(2) その変化は「形容」する部分でなく、基本的な「筋書」の変化を示している。

(3) 勝坂Ⅰ式b・c段階では、口頸部から垂下していた隆線が分断され、抽象文・具象文が配置されることで、その装飾構造が口頸部へ繋がる、ということよりも、胴部での展開が重視される方向に変化する。

(4) そして、特徴として区切ること、棹組をつく

第2図 胴部文様帯の発展過程 (1 船霊社、2・3 神谷原、他は大石)



第3図 玉抱三叉文の変化(1 籠畑、2・5・7・11 大石、3・9・12 頭殿沢、4 山之台、  
註：細分は説明の都合上、五領ヶ台式直後から勝坂Ⅰ式までを特に細

ることを重視する方向に変化している。

こうした変化ののちに完成された勝坂式の裝飾構造は、

- (1) 口頸部と胴部の2分割
- (2) 横方向の重層性の強調
- (3) 胴部裝飾の複雑な展開が相対的に重視される。
- (4) 区切ること、枠組の重視

ということができよう。

## 2 裝飾構造の変化に伴う個別裝飾の変化

個別裝飾の変化については、これまで量的な変遷や形態の変化に中心が向けられてきており配置についてはあまり重要視されてこなかった。しかし、個別裝飾の配置の変化は単に胴部にあったものが口頸部に移ったという、個々の現象面における問題にとどまらず、土器裝飾全体との関係で捉え直さなければならない。主要な位置を占めていた個別裝飾がなくなることは、土器裝飾全体の構成がくずれ、変化をとげたことにもつながり、「物語性文様」の「物語」の内容自体に変化が生じたことを暗示している、と思われるからである。よって、ここでは、先に見てきた裝飾構造の変化に併行して変わっていった代表的な個別裝飾の事例を見ていくこととする。

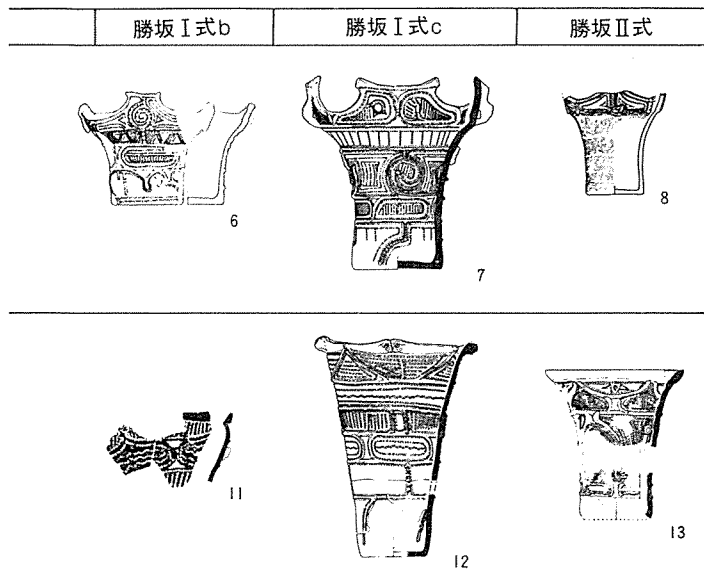
### (1) 玉抱三叉文の変化—主裝飾の場合

個別裝飾としての玉抱三叉文、あるいはそれに類似した渦卷文を三叉文で狭む形のは縄文時代の中では非常に息の長い裝飾の一つで、田戸上層式に効果として近いものが現われて以来、施文手法を変え、配置を変えながら流行したり下火になったりして続いてきた。五領ヶ台Ⅱ式は三叉文が比較的多く使われる時期にあたり、玉抱三叉文も口頸部文様帯を中心に認められる。

では、五領ヶ台Ⅱ式の玉抱三叉文の配置を見ていこう(第3図)。

- (1) 山形口縁をもつ土器の山形口縁直下の三角状空間に配置される場合。この場合胴部文様帯のY字状隆線が直線的に、この裝飾に向って伸びてくる配置が多くなっており、玉抱三叉文の主要な位置づけを伺わせている。
- (2) 平口縁土器の場合、口頸部文様帯にあって、横位に連続する弧状沈線裝飾や隆線による半楕円・三角形(重三角)裝飾とともに横位連続する。この場合の胴部Y字状隆線は玉抱三叉文に向う例と三叉文と三叉文の間に向う例が存在する。ここでも、胴部裝飾はひかえめにされており、主要裝飾の位置には玉抱三叉文があてられている。

以上が口頸部文様帯に配置された場合であり、



6・10 神谷原、8 曾利、13 伴ノ木山西) かくしてある

この外、胴部にあつて用いられる場合があるが、量的には口頸部の場合に比較して少ない。ここでは、主装飾としての変化を追うので先にあげた(1)・(2)について検討を加えることとする。

本題に入る前に、五領ヶ台式から勝坂Ⅱ式の間における三叉文の使用頻度を見て置こう。この時期の代表的な遺跡である大石・神谷原両遺跡のデータを参考にしてもわかるように(第1表)、五領ヶ台式直後には減少傾向になり勝坂Ⅰ式には皆無に近い状態になってしまう。そして勝坂Ⅱ式になると再び復活して用いられるようになる。このように、この時期の玉抱三叉文の配置の変化は、その背後に装飾構造の変化と装飾技法・効果としての三叉文そのものの減少とからみあっていることを念頭に置いておかななくてはならない。

以上の2点とともに(1)の類型についてみていこう(第3図)。これは五領ヶ台式段階ですでに認められるが、主体となるのはⅡ式のしかも新しい段階に入ってからである。さきにも述べたように胴部のY字状の隆線は直線的にこの個別装飾に向っており、配置とともにその象徴的な意味の重要性を示しているものと考えられる。

これが、五領ヶ台式直後の段階になると、その形状に解体がはじまる。山之台遺跡例(池谷1981)は比較的玉抱三叉文の形をとどめているが、こ

第1表 大石(上)・神谷原(下)遺跡における三叉文の増減

土器型式	三叉文のあり方	対象個体数	三叉文存在
五領ヶ台式		57	13
五領ヶ台式直後		10	1
勝坂Ⅰ式		60	3
勝坂Ⅱ式		49	18

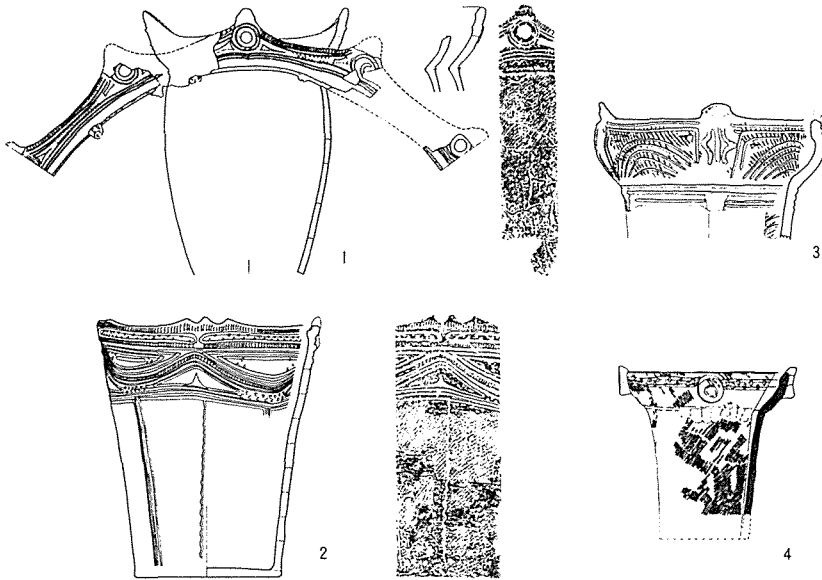
土器型式	三叉文のあり方	対象個体数	三叉文存在
五領ヶ台式		12	7
五領ヶ台式直後		4	2
勝坂Ⅰ式		59	4
勝坂Ⅱ式		67	38

でも一個の渦巻・三叉文が山形口縁直下に配置されるのではなく、2つに分裂した形になっている(註5)。この外の例、たとえば御伊勢前遺跡(橋口

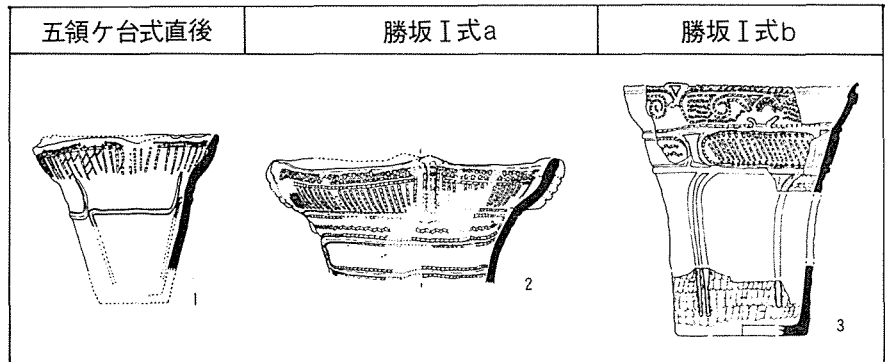
1981)例などは形の崩れの激しさが理解できよう。また、若干器形が異なるが、口頸部の主装飾の位置から口縁部の幅の狭い部分に移動し、さらに口縁部裏面に付く例などが多くなる。ここに五領ヶ台式の装飾構造中では主装飾であった玉抱三叉文がその意味を失いはじめていくことがわかる。

勝坂Ⅰ式に至ると、山形口縁の直下に存在するものは皆無に等しくなり、また存在したとしても形が大きく崩れてしまったり、胴部の発達した装飾に比べてかならずしも主装飾の位置を占めているとは言い難い状況になる。ここにおいて、五領ヶ台式の脈絡における玉抱三叉文は消滅に向う。勝坂Ⅱ式の段階で他の装飾とともに復活する玉抱三叉文は、単独では五領ヶ台式の場合に近い象徴的な意味をもっていたとしても、異なった脈絡の中で新たな意味を付加されて登場したものと考えられよう。土器装飾全体のうち主要な位置を占めていたものは、口頸部文様帯の玉抱三叉文などから、胴部の複雑な個別装飾の結合の状態へ移ったのである。

(2) 連続「コ」の字文(鋸歯状文)の変化—補助装飾の場合



第4図 補助装飾としての連続「コ」の字(鋸歯)文  
(1 前田耕地、2 武蔵国分寺、3 神谷原、4 船靈社)



第5図 (4) 類型連続「コ」の字文の消滅過程  
(1 船靈社、2 伴ノ木山西、3 頭殿沢)

ここで連続「コ」の字文というのは、隆線を交互に刺突したりあるいは2本の沈線の間を交互に刺突して、ひっくりかえったコが連続するように見えるもので、鋸歯状文と呼ばれることもある。縄文時代の多くの時期に認められるひとつで、五領ヶ台式にも盛んに用いられる。この装飾も三叉文と同様、五領ヶ台式から勝坂式の時期に移るなかで大きな増減の波を見せている。すなわち、五領ヶ台式Ⅱ式の段階では一般的に使用されていたが、五領ヶ台式直後で減少し、勝坂Ⅰ式には皆無に等しくなり、再び盛んになるのは、勝坂Ⅱ式後半からⅢ式に入ってからである。

では、玉抱三叉文と同様の傾向にある連続「コ」の字文の配置とその変遷について見ていくことと

しよう。まず五領ヶ台式Ⅱ式についてあげる。

口頸部文様帯に存在する場合、以下の類型が認められる(第4図)

- (1) 山形口縁をもつ類型において、主装飾となる玉抱三叉文などを連結する。
- (2) 平縁口縁で、半楕円・三角形区画(重三角区画)内に配置された玉抱三叉文などを連結する。
- (3) 同じく平縁口縁で連弧状沈線の間配された玉抱三叉文などを連結する。
- (4) 平縁口縁で小突起の付く場合、その突起どうしを連結する。

このように五領ヶ台式Ⅱ式の口頸部文様帯における連続「コ」の字文は、主装飾を連結する補助装

飾としての役割が多く、山形口縁の三角状空間に単独で配置されるようなことは皆無といってよい。

このほか、(5) 口頸部と胴部の境界に用いてそれを強調する場合、(6) 胴部の主装飾である懸垂文を飾る場合がある。これらは、主装飾に近い位置付けとなっているが量的には少ない。

また、胴部文様帯に使用される場合も、重畳する沈線にアクセントを付ける例などが多く補助的な意味合いが濃い。

以上あげた中で、ここでは口頸部文様帯にあって、補助装飾として用いられる場合についてその変遷を追って見る。

まず、(4)の類型であるが(第5図)、量的には五領ヶ台Ⅱ式から五領ヶ台式直後の時期まで一般的に認められる。しかし、次の勝坂Ⅰ式a段階に至ると、激減してしまう。さらに口縁部に配置されていたものが、口縁部端に押しあげられ、勝坂Ⅰ式bの段階ではこれ以外の配置が稀有になり、やがて消滅する。また、(1)などの場合はさらに消滅に向かうのが速く、五領ヶ台式直後の段階にはほとんど見られなくなり、勝坂Ⅰ式a段階にかろうじて残存したものでも、くずれた形の渦巻三叉文に繋がるのではなく、口縁部端に反れていってしまう。

こうした変化は、単に位置が変わったというのではない。装飾構造の変化に伴って意味を失い、重要な配置から脱落していった主装飾と連動し、その補助装飾であった連続「コ」の字文も意味を喪失してしまった結果、一部で痕跡器官として残存するにとどまるようになるのである。

### (3) 人面装飾と人体装飾—具象文の変化

個別装飾の中で、端的に象徴的意味をもっていると予測できるのが人面および人体装飾をはじめとする具象文である。ここでは玉抱三叉文や連続「コ」の字文の分析の方法を踏襲し、そのものの意味を直接問うのではなく、配置・形状の変化と装飾構造の変化の関係から、理解することの難しい意味や価値観の変化の「写し」といえる部分を明確にしていきたい。

具象文は五領ヶ台式には存在するものの、本格的に発達を見るのは勝坂式に入ってからである。人面装飾も五領ヶ台Ⅱ式の段階ではひじょうに稀

であり、明瞭な人体が付いた例は皆無である。人面の付く位置は口頸部文様帯であり、人面は器の内側を向くのではなく、玉抱三叉文や円文などの主装飾の付されたのと同様の位置を与えられている。こうした配置は勝坂Ⅰ式b段階まで微量ながら連綿と続いている。

その一方で、この段階には、人面に近い形状を示す円形貼付文が胴部に配置されたり、あるいは人体が付くものが出現する(第6図)。ここには大きな意義を認めざるを得ない。すなわち1つには、口頸部と胴部の2分割において、常に主装飾は視線を集めやすい口頸部に存在していた。それが、胴部に移動する例の出現によって、重要な価値を担っていた記号が、上の領域から、下の領域へ降りてきたことを意味し、五領ヶ台式期の人々と勝坂式期の人々のものの捉え方が大きく変化したことを裏付けていよう。第2には、「ヒト」からモチーフを得るに当たって、顔だけを借りていたのが、身体にも注目しはじめたことにある。人面装飾はその配置からもわかるように、玉抱三叉文・渦巻文・円文などと同等のものを象徴的に表現していたと考えられる。しかし人体装飾は、配置そのものが胴部に降りてくるとともに、それに加えて身体のもつ「具体性」が加味されているのである。この問題はその後隠された価値観の転換を現わした事件として大きな意義があると考えられる。

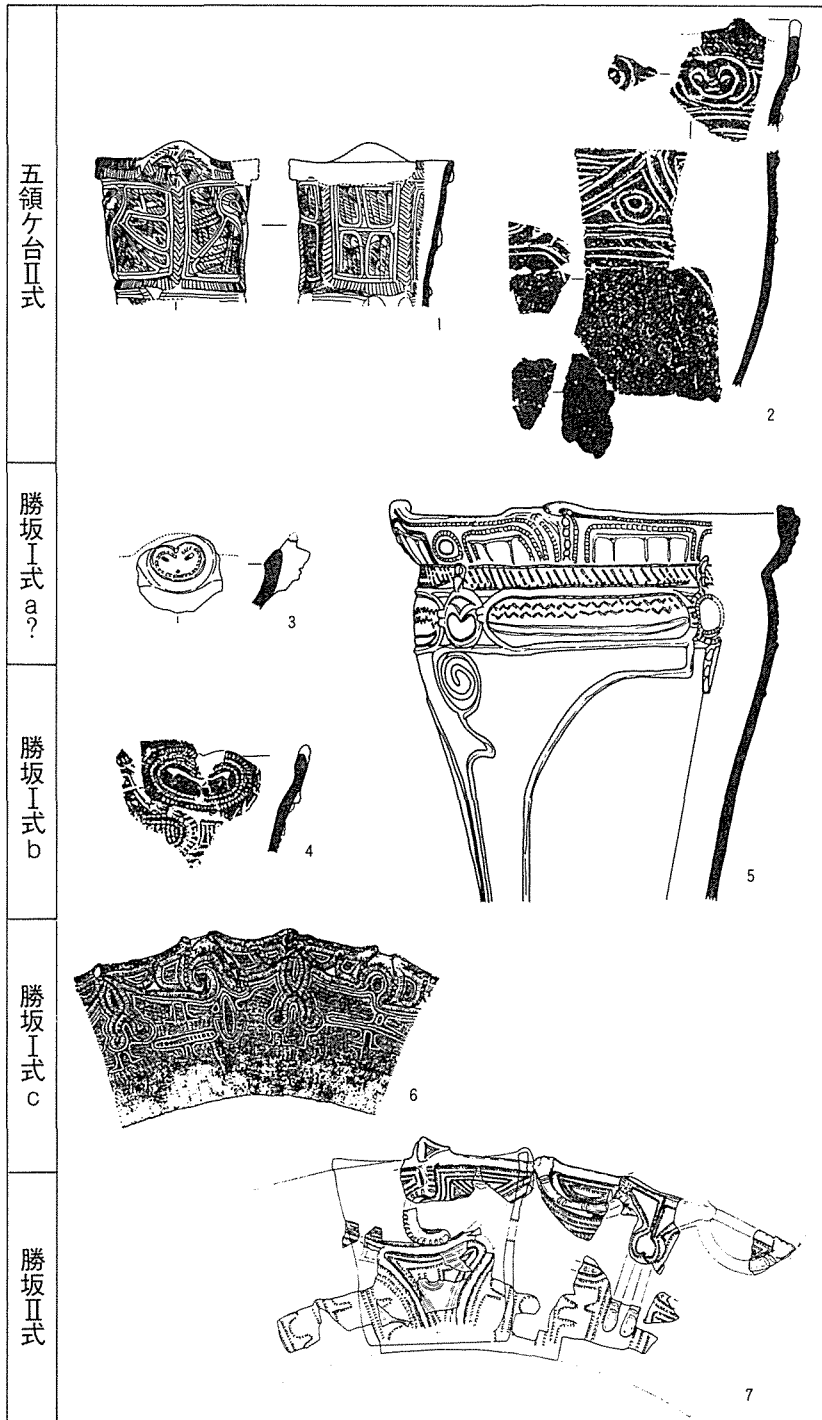
## Ⅲ まとめ

### 1 まとめ

どの民族に帰属させるか、ではじまった縄文土器の研究は、科学的な分類による枠組の設定を経て、次にはそうした固定的な体系を一旦解体し、時・空間軸中での「動き」とその要因の究明に向かった。そして、こうした土器研究の一潮流に沿って考えれば、現在、ようやく漠然としていた「まとまり」の分析に入り、「まとまり」と「動き」の両者を具体的に示す段階に達しつつある、と捉えられよう。

土器型式群に見る「まとまり」とは、その所属集団に共通の価値観などに根ざした側面が濃厚である。それは、土器のもつ属性のうち、非実用的機能である装飾に見ることができる。それは他集団、あるいは前時代とは異なっているという点で、





第6図 人面・人体装飾の変化

(1・3・4・5 大石、2 船靈社、6 千ヶ瀬、7 木曾中学校)

自集団の価値観などを把握し得ていたものと考えられる。

では実際の作業上、どのような分析方法によってそれらを知り得るかという点については、土器

装飾の統辞法を主眼にしていった。土器から精神的な側面を知るには、その土器と装飾がどのような場面で、どう使われていたか(運用部門)、あるいは直接、土器装飾の象徴的意味を解読する方法(意味部門)などがある。しかし、前者は当時の社会全体をある程度復元しておく必要があること、後者は補足資料の稀少さから推論に終始することを恐れて、今回は除外した。

ここでは、全体をどのように分割していたのか、個々の事物をどう組織化して全体を形成させているのか、どこに主題となる「筋書」を示しているのか、どの部分に視線を集中させるように工夫されているのか、多用される装飾は何か、などといった統辞法から、当時の人々の分類と論理の組み立て方を明らかにし、他の時期や地域との差異から、その精神的な側面の違いに踏み込むデータを提示することに努めた。そのため具体的な題材とし、五領ヶ台式後半から勝坂式初期の時間軸上の

変化の過程を取り上げてみた。

五領ヶ台式後半に多く見られる装飾の基本は(1)口頸部文様帯と胸部文様帯の2分割、(2)口頸部に主装飾を配置、(3)胸部装飾は口頸部の主装飾を

「支え」あるいは主装飾へ「上昇」する直線的な懸垂文に集約され、構造は比較的単純で、口頸部装飾が重要な位置を占めていることがわかる。

これが、勝坂式へ至る過程で、胴部を中心に変化がおこり、勝坂式段階では基本的分割は踏襲されるが、その初期には主体となる領域が胴部に移動し、重層性のある複雑な装飾が配置される。このことにより、直線的な口頸部主装飾へのつながりは価値を失なう。また、区画文の発達など枠組みへの親和性も重要な点である。

個々の装飾も、こうした基本構造の変化と無関係でいることはできない。全体と部分は絶えず密接なつながりをもっているからである。

個別装飾はその脈絡の中で、主装飾と補助装飾があり、それは、配置の傾向によって知ることができる。五領ヶ台式の主装飾であった玉抱三叉文は装飾構造の変化に伴って意味を失ない、使用量の減少、形の崩れ、固定的な配置からの脱落を起こす。補助装飾である連続「コ」の字文も同様の傾向を示す。これらは、その背後で起こっている価値観の変化やそれに一致した象徴的な意味の変化と無関係ではないだろう。そうした精神的な側面を探る上で、統辞部門と意味部門の橋渡しとなる装飾として人面装飾・人体装飾を取り上げておいた。具象文の配置及び形状の変化は、それ自身の象徴的意味だけでなく、それを含めた全体の象徴的意味の変化を示しており興味深い。

以上、第一・二章をまとめて見たが、対象をひじょうに限定してしまったため、論証が貧困となってしまった。今後機会があり次第補足してゆきたい。

## 2 展望

本稿では多分に土器装飾に現われた精神的な側面を明らかにするための1ステップの傾向を匂わせてきたが、ここではそうした精神的な側面と当時の社会変動との関係について、いくつかの観点を述べて展望としたい。

### (1) 社会変動と隣接型式との関係

五領ヶ台式から勝坂式への時期は、多摩・武蔵野地域において遺跡数が増大し、いわゆる定型的な集落が多く形成される時期にあたる。その状況

を端的に示す例として金程向原遺跡群をはじめいくつかの例をあげて見ていこう。

金程向原遺跡群の調査は東西方向に並列する3つの小丘陵上を対象として行われた(竹石・野中1982)。そのうち、北側の丘陵斜面に1軒、中央の丘陵の東より基部上に2軒、五領ヶ台式期の住居址が検出された。さらにもっとも南側の丘陵上の広い平坦面には勝坂式期～加曾利E式期の環状集落が形成されていた。至近距離にある各時期の住居址の存在(若干空白期があるためこの各集落、あるいは住居が同一系統の集団である確証はないが)は、五領ヶ台式期の立地と勝坂式期以降の立地の差を明瞭にあらわしているといえよう。勝坂式期以降は集落内の中央広場に広い面積を必要とするようになり、また、この地に継続的に定着している様子が見えがえる。

中部山岳地域に比べ、五領ヶ台式期から継続する集落遺跡は少ないが、その中では神谷原遺跡(中西 1979)をあげることができる。神谷原遺跡の場合の近隣の櫛田Ⅳ遺跡(中西 1978)同様、五領ヶ台式期の住居数および形成される群は少なく、勝坂Ⅰ式期以降と比較すると、一集落の規模は小さかったようである。

さらに土井氏は多摩川流域でタイプA集落しか認められない時期として中期初頭をあげている(土井 1985)。また、野川流域の調査においても、勝坂式期に入って、遺跡数が急増し大規模集落が形成されることが指摘されている(広瀬ほか 1985)。

以上、まことにわずかな例しかあげず、集落についての詳細な分析も割愛したが、この地域で、勝坂式期に入って遺跡数が増加し継続性のある集落が次々と形成されていった点だけを把握しておきたい。しかも、その集落および住居構造は中部山岳地域と類似しており、下総台地以東の地域と大きな差を見せるのである(鈴木 1984)。

こうした集落のあり方を変える社会変動の時期に土器装飾の変化の過程を合せて見ると、五領ヶ台式の段階でひじょうに類似した装飾構造をもち、施文技法・効果にも同様の傾向が認められた東・西関東両地域の土器が、その差異をより鮮明にしはじめた時期に一致している。これは、両地域で起った社会変動に即した形で価値観や分類・論理体系の変化が生じ、各々の変化に見合った形の土

器装飾が製作されていったためと考えることができよう。また、自集団周辺で起った社会変動を容認し、変動に付随して起こる秩序の乱れをおさえるためには、隣接する他集団との差異をいっそう明瞭にし集団の「まとまり」を確認する必要があったとも考えられる。勝坂式の初期に見られる、東京湾岸地域の勝坂式と阿玉台式の関係。すなわち、盛んに交流を行いながらも土器装飾の差異を強調して行く過程は、社会変動とその精神的側面を解明する上でひじょうに興味深い問題を提示している。

## (2) 集落の増大と土器装飾の変化

中部高地においては、多摩・武蔵野地域に比較して五領ヶ台式期から、勝坂式期へ連綿と継続する拠点的な集落が多く認められる(小林 1973、水野 1973)。しかし、遺跡数の増加の状況は同じ傾向にあり、勝坂式期に増大する。展望の第2点としては、勝坂式土器を主体とする地域で、この時期に起った社会変動がどのような形で土器装飾に反映されたのか、その心理的な側面、あるいは、象徴的意味について触れておくこととする。この時期の社会変動の特徴として手短かに見てきたとおり、人口の増加、一定地域への定着性の進展、領域の確保の強化、をあげることができる。こうした傾向を土器装飾と比較して見ていこう。

まず再度五領ヶ台式から勝坂式への装飾構造などの変化を追ってみよう。

その全体的な特徴は土器装飾を口頸部文様帯と胴部文様帯に2分割した点では類似するが、五領ヶ台式では口頸部文様帯に装飾の比重が傾むくのに対し、勝坂式段階に至ると、装飾の比重が胴部に移行してくる。いま、この上・下の2分割を聖・俗の2分割に沿って推測を重ねることが許されるならば、興味深い内容が浮んでくる。五領ヶ台式の時期、山形口縁を有する類型は、一場面において(中心を山形口縁の頂部とする)、上の領域＝聖界の中央に主装飾である玉抱三叉文を配し、下の領域＝俗界の中央には、上の領域を支える、あるいは上の領域への上昇する直線的な装飾が配置されている。しかも、関心は上の領域に向かっているのである。ところが、その主装飾の脱落が起り、装飾の比重が胴部へ移行することは、五領ヶ台式

後半に確立されていた宇宙観に動揺がおこり、より実生活の現実面に重点をおいた装飾構造に改変されていったと考えることができよう。

前章でも述べたごとく、胴部装飾の発達、五領ヶ台式期の懸垂文(五領ヶ台式土器装飾構造の基本の一つ)が変化したもので、装飾構造＝宇宙観が全面的に否定されてしまったのではなく、二分割と上・下領域の関係は受け継がれていると考えられる。宇宙観のうち重視する部分に変化を起こしたと見るべきであろう。

下の領域＝俗界の重視は勝坂式期の人々が、その宇宙観においても現実性を重視する方向に変わったことを意味すると推定したが、この点は具象文の発達からさらに裏づけることができよう。

具象文の表現するものは様々のカミであったり、聖と俗の仲介者であったと推定されるが、五領ヶ台式期の口頸部文様帯の玉抱三叉文、円文、渦巻文、人面装飾などの個別装飾で表現された「聖なるもの」の記号に比べ、それらと俗界との仲介的な役割を重視し、より現実性を重視する傾向が増してきたといえよう。この点が同じ「ヒト」から得たモチーフであっても、人面装飾と人体装飾の隔絶した差異が存在すると考えられる所以である。このことは具象文の配置が胴部文様帯、あるいは口頸部文様帯から胴部文様帯にまたがって配置されている点からもうかがうことができよう。

以上のような、現実面を重視する価値観への移行は、当時の社会変動の方向とまったく無縁であったとは考えられない。また、過剰なほど加飾された複雑な各装飾が一個の土器装飾として統合されている点は、仲介的な役割をはたす装飾を加えて、聖・俗の構造を複雑にしていたこととともに、勝坂式期の人口増加と定着性、領域の確保にともなった社会組織の複雑化とその制御法の難しさをほのめかしているともとれよう。

ひじょうに推測にまかせた議論となってしまったが、土器装飾の統辞法をより詳細に、また今回できなかった定量的な分析をし、他の遺構・遺物などの分析と比較することによって、より具体的に土器装飾に表現された意味や構造を把握し、社会状況との関係を明らかにしていく必要がある。

さらに、執拗なまでに器面を分割し枠組を設定していく装飾にも、勝坂式期の人々の心理的側面

を見ることができよう。特定の形に親和性を示す心理や枠組みにこだわる心理についても関連諸学の協力を得て解明すべきであろう。

### (3) 社会変動と土器装飾の変化のズレ

土器装飾の象徴するものの分析は、大いに興味ある問題である。各々の装飾が何を意味しているか、といった問題とともに、その変化がどのような状況の中で、どの時点で芽ばえてくるのか、どの部分から変化がはじまるのか、を明らかにすることも重要である。それは、モノの変化の細部に大きな社会変動の徴候を読み取ったり、逆に従属していく部分を見出す、といったモノから歴史の流れを捉える考古学の中心課題につながるからである。

前節でも大ざっぱに触れたとおり、勝坂式期に入る段階から、集落などに変化が認められはじめるが、土器装飾の変化で見ると、胴部装飾の動揺がはじまるのは、その直前の時期である。勝坂式期へ変化する地域では、前節の仮定でいう下の領域＝俗界重視、現実性の重視への移行への第一歩が集落遺跡の増大の一段階前ではじまっていることがうかがえる。これを社会変動の徴候と見なすことが可能であろうか？土器製作者の心理はいかなものであったろうか。

この点は阿玉台式土器への変化と比較すると興味深い。五領ヶ台式期には西関東と類似した装飾内容を示していた東関東の土器は阿玉台式土器への移行に際しても、口頸部文様帯重視の傾向は変わらなかった。胴部装飾の隆線による加飾化が本格的に進むのは住居内に炉が持ち込まれ、集落の拡大を見る阿玉台Ⅱ～Ⅲ式になってからである。

今後、両地域の社会変動の比較も含めて、土器装飾の変化との時間的なズレについて考えていき

たい。

### 3 おわりに

精神的な側面や、それを含めた上での漠然とした「まとまり」への関心は、近年ひじょうに高まってきている。しかし、集団の「まとまり」とは本来つかみどころがないものである。それは、そのあいまいな部分が、解決不可能な矛盾を吸収する装置として、容認されているからである。よって、我々は、客観化できる部分での特定集団の「まとまり」を明らかにするとともに、客観的・論理的に矛盾しながらも、「まとまり」の中にかかえ込まれている部分、及びその存在の仕方を明らかにして行く必要がある。さらに、時・空両軸のからみあう運動状態の中で、「まとまり」の変動を捉え、モノからその徴候などを探る作業を進めていかななくてはならないであろう。

現在もまた「まとまり」の変化の時期にさしかかっているようである。「まとまり」そのものの性質が漠然としたものであるため、個人の判断の許容範囲をはるかに越えた所で好まざる「まとまり」へと巧みに導かれたり、無意識のうちに流されてしまうこともあり得る。我々は絶えずこれらをチェックする方法を模索していかなくてはならないのである。

本稿は1984年度、日本大学に提出した修士論文『勝坂式土器の成立について』の一部分を本題名に即して構成し直し、さらに加筆・訂正を行なったものである。主査の齊藤忠先生をはじめ、西村正衛、蔵持不三也両先生、および長野県埋蔵文化財センター、下総考古学研究会、日本大学大学院有志「歴史の勉強会」の諸氏には様々な御教示を得た。ここに記して感謝の意を表す次第である。

(1986年12月26日稿了)

- 註1 三上氏は物理的機能と心性的機能に分け、基本的文様単位が、器形と強い関連を示すことを指摘している。さらに、この両機能の関わりから器形・装飾の変化を生産形態の変化との関係から考察を進めている。
- 註2 例えば、中期後半以降の宗教的な遺物が発達し、また屋内祭祀のシステムが確立していくと、それまで、象徴的な世界を過剰なまでに取り込んでいた土器装飾が簡素化し、そうした象徴的な世界の表現は屋内祭祀や集落祭祀の体系へ移っていく。
- 註3 構造という語を使用するが、ここでは土器装飾の現象面の構造だけを指して使う。しかし、その背景には各々の時期の意味や宇宙観などを含んでいたと考えられるため、将来そうした側面にも踏み込むことを想定して使用する。

- 註4 五領ヶ台式の細分は基本的なⅠ・Ⅱ式の分離については今村啓爾氏の研究によったが、より細かな細分については系統的な把握に疑問があるため、山口氏の分析を加味して、大きく前半、後半という書き方をした。また、本稿でいう五領ヶ台式は「型式群」として広義に使用している。よって、大石式や神谷原式という小型式の名称は用いず、五領ヶ台式直後とした。しかし、その内容は佐藤達夫氏とは異なっている。この点については後日、詳細に述べる機会を取りたい。また、この段階は、将来的には、「型式群」としての五領ヶ台式に包括すべきであると考えている。
- 註5 山形口縁の直下に「Y」字状隆線が入り玉抱三叉文を二分する手法は東北方面にもあり、この点も考慮して置く必要はあろう。

## 引用参考文献

- ア 安孫子 昭 二 1969 「縄文中期前半の土器」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅶ
- イ 池谷 信之ほか 1981 「泰野市山之台遺跡出土の土器と石器」『小田原考古学研究会会報』10
- 今村 啓 爾 1972 「宮の原貝塚」  
1985 「五領ヶ台式土器の編年」『考古学研究室研究紀要』4
- ウ 上野 佳也 1980 「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』44-4
- エ 江上 波夫 1963 「勝坂式系土器の動物意匠について」『国華』855
- オ 青梅市郷土博物館 1981 「千ヶ瀬遺跡と多摩の縄文」  
岡崎 完樹ほか 1985 「出土土器について」『利島村大石山遺跡範囲確認調査報告書』Ⅲ  
1985 「武蔵国分寺跡発掘調査報告書」
- 岡本 勇 1965 「縄文文化の発展と地域性一関東一」『日本の考古学』Ⅱ  
1966 「尖底土器の終焉」『物質文化』8  
1968 「縄文時代の時期区分について」『歴史研究』98  
1969 「「五領ヶ台上層式」土器についての覚え書」『貝塚』3
- 岡本 勇ほか 1970 「平塚市広川五領ヶ台貝塚調査報告」
- 岡本 勇 1975 「原始社会の生産と呪術」『岩波講座 日本歴史』1
- カ 川口 正幸ほか 1983 「町田市木曾中学校遺跡」
- コ 甲野 勇 1935 「縄文式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』7-3  
小林 達雄 1966 「縄文早期に関する諸問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ  
1973 「八ヶ岳西南麓の遺跡群とセトルメントシステム」『広域遺跡保存対策調査研究報告』3  
1977 「型式・様式・形式」『日本原始美術大系』1  
1979 「縄文土器」『日本の原始美術』1  
1981 「越後新潟火炎土器のクニ」『月刊文化財』215
- シ 下総考古学研究会 1986 「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8
- ス 鈴木 敏昭 1983 「縄文土器の施文構造に関する一考察」『信濃』35-4  
鈴木 保彦 1981 「勝坂式土器」『縄文土器大成』2  
鈴木 美治 1984 「阿玉台期における竪穴住居跡の形態についての一考察」『年報』（茨城県教育財団）3
- タ 竹石健二・野中和夫 1982 「川崎市麻生区金程向原遺跡群の調査」『第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』  
谷井 彪 1977 「勝坂式土器の文様構造について」『埼玉考古』16  
1977 「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(前)・(後)」『信濃』29-4・6  
1979 「縄文土器の単位とその意味」『古代文化』31-2・3
- ツ 塚田 光 1964 「群馬県新巻遺跡の中期縄文土器」『下総考古学』1
- テ 寺内 隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』7
- ト 土井 義夫 1985 「縄文時代集落論の原則的問題」『東京考古』3  
戸田 哲也 1971 a 「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」『文化財の保護』3  
1971 b 「勝坂式土器編年に関する試論」『小田原考古学会会報』4
- ナ 中島 庄一 1985 「縄文土器文様の研究」『東京考古』3  
中西 充 1979 「縄文時代中期初頭の諸問題」『們田遺跡群 1978年度調査概報』  
1982 「縄文時代中期の出土土器について」『神谷原』Ⅱ
- ニ 西村 正衛 1984 「石器時代における利根川下流域の研究」

- ハ 橋口定志ほか 1979 『前田耕地』Ⅱ  
 橋口尚武ほか 1981 『御伊勢前』  
 伴 信夫ほか 1976 「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その3』
- ヒ 樋口昇一ほか 1980 「船霊社遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市 その4』  
 1981 「判ノ木山遺跡」「頭殿沢遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その4・富士見町その3』
- 広瀬昭弘ほか 1985 「縄文時代集落の研究—野川流域の中期を中心として—」『東京考古』3
- フ 藤森栄一ほか 1965 『井戸尻』
- ホ 掘越正行 1971 「土器型式の事象と論理—その相対的側面—」『史館』1
- ミ 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51
- 水野正好 1973 「縄文時代集落の領域構造をめぐって—八ヶ岳西南麓遺跡の理解のために—」『広域遺跡保存対策調査研究報告』3
- ム 武藤雄六 1968 「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』4—1  
 1975.76 「中期縄文式土器の文様解読」『山麓考古』2.3.4  
 1978 「縄文時代中期農耕文化私論」『山麓考古』9
- 武藤雄六ほか 1978 『曾利』
- ヤ 八幡一郎 1938 「縄紋式文化」『日本文化史大系』  
 山口明 1980 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『静岡県考古学会シンポジウム』4  
 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1—1  
 1940 「勝坂式」『日本先史土器図譜』

## 埋甕と境界性について

百瀬 忠幸

- 
- I はじめに
  - II 最近の研究動向
  - III 中・南信地方における埋甕について
    - 1 資料の範囲と分析方法
    - 2 各地の様相
      - (1)松本平西麓 (2)松本平東麓 (3)上伊那
      - (4)下伊那 (5)諏訪盆地 (6)八ヶ岳西～南麓
      - (7)木曾谷 (8)八ヶ岳北麓 (9)山梨県域
  - IV 埋甕の用途・機能について
    - 出入口部埋設 ○一住居一埋甕 ○埋甕内は空洞 ○「跨ぐ」性格はない ○石棒・立石・集石は埋甕機能の強化 ○一家屋に埋甕ないしそれに準ずる施設 ○縄文中期後半期に限定
  - V 埋甕と婚姻—その境界性をめぐって
  - VI 結論
- 

### I はじめに

“埋甕” それは過去において、また、現在において、一体如何なる意味をもちうるものであろうか。“埋甕”なるものが知見されてより半世紀以上経たいま、なお考古学上のテーマとなりえている事実は、“埋甕”がこうした疑問からいまだ解放されていないことを如実に物語っている。裏返して言うならば、“埋甕”がそうした欲求を満たすべき何ものかを歴史の実体として、その内に刻んでいるのである。

埋甕。“うめがめ”、“まいよう”と呼称もまちまちであり、その指し示す範囲も屋外埋設土器から屋内埋設土器、さらには炉体土器までと一定していない。このことが“埋甕”に対する研究を複雑にし、ややもすれば表面的な理解にとどめ、その深遠なる部分については闇中に消し去ってきた一因ともなっている事実は否めない。一般に、また学史的にも、単に「埋甕」と呼称する場合、炉体土器等を除いた、いわゆる「屋内埋甕」あるいは、より限定的に「出入口部埋甕」を指していることが多いようであり、他は、「屋外埋甕」または、「埋甕墓」などと区別して呼ばれている。このことから、まず単に「埋甕」という用語が使われる場合、埋甕炉や炉体土器としての埋設土器や土壙(墓)や小堅穴などに伴う土器を除いた埋設土器の総称と理解されるが、大きく「屋内埋甕」と

「屋外埋甕」とに分けて考えるのが妥当であろう。さらにこの両者はそれぞれ、そのあり方・様態から細分され、後述するように、本稿の主題となる前者の「屋内埋甕」をとってみても、出入口部埋甕・炉辺部埋甕・側壁部埋甕・奥壁部埋甕などとその内容は多様性に富んだあり方を示している。このような多様性をもつ「埋甕」を一つの機能論・用途論に限定することはもちろん不可能なことであり、すると当然、「埋甕」という用語を用いる際に問題となるのは、いかなる範囲や種類の埋甕を対象としているのかを明確にすべき点にあるといえる。先の「屋内埋甕」に限っても、出入口部か奥壁部近くに埋設されるかでは、論外、異なる意図・目的のもとになされたであろうし、逆に、総称としての「埋甕」もまた、土器を屋内あるいは屋外に埋設するという共通の行為として存在する以上、そこには意識的であろうと無意識的であろうと、より根源的な意味が隠されているはずである。ここに、広義の総称としての「埋甕」、狭義の個別的な「埋甕」をより体系的に把える必要性が存在する理由がある。蛇足ながら一言つけ加えておくならば、昨今、「埋甕」という名称を「埋設土器」などに変更すべきという見解があるが、確かにその形態論的用語の不適切さは否めないものの、学史的・現代的共有性ととともに、埋甕という“形態”そのものに、ある一定の歴史的・

社会的意味づけを付与しうる点からも、あえて変更するのはいたずらに問題点を形式化してしまうことになりはしないだろうか。用語上の概念規定さえ明確に示して論ずるならば、歴史的存在として、「埋甕」が本来もっているであろう根限的な意味・性格を解き明かす道のみずから閉ぐことにはならないであろう。

本稿ではこのような基本的立場に立ち、「埋甕」のなかでも最も一般的に知られている「屋内出入口部埋甕」に限定してその意味や性格、すなわち、縄文時代の人々が“埋甕”に担わせたであろう役割を考え、さらに、歴史における現在の視点からの考察を試みたい。

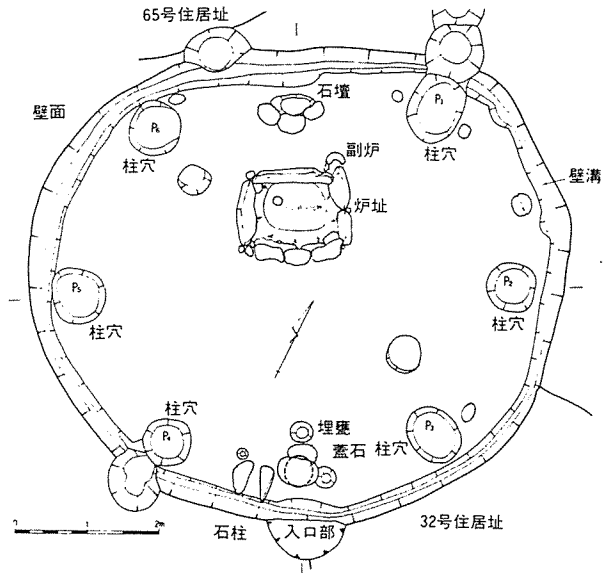
本論に立ち入る前に、以下資料として用いる「屋内出入口部埋甕」を“住居址の出入口部と推定される位置の壁下、もしくはそれに準ずる部位に埋設された土器ならびにその状態”と規定し、以下埋甕と略す。

## II 最近の研究動向

埋甕研究史はすでに多くの論考のなかで詳細に触れられているので、ここでは、近年従来からの埋甕理解とは趣きを異にする見解がいくつか提出されてきていることから、それらを中心に私見を交えながら簡単に整理しておきたい。埋甕に対する現在までの諸説を列挙すると、まず、貯蔵具説・乳幼児埋葬説・胎盤収納説・建築儀礼説などがあげられる。このなかで、今日、最も妥当な説として一般的なのは乳幼児埋葬説であり、本説にもとづく埋甕分析も数多い。しかしながら、乳幼児埋葬説のみならず、他の諸説でも明確な論拠が示されているとはいいがたく、埋甕をめぐる諸問題は、通説から定説へと傾斜しつつある現況の中に埋没しつつあるといっても過言ではない。このようななかであって、以下に示す諸氏の論説は、それぞれ個々に不明な点を多々残すとはいえ、上述のような傾向に鋭くメスを入れたものであり、埋甕研究の転機を示す考察ともいえる。

以下、本稿の位置づけを明らかにする意味を含めて、年代を追って紹介する。

丹羽佑一(1980) 長野県天竜川水系における諸遺跡(増野新切・尾越・荒神山)の埋甕構成要素の観



埋甕をもつ住居址

(『原始・古代の豊丘』(豊丘考古学研究室)より転載)

察と分析を行い、「埋甕集団」及びその「構成の復原」を試みる。まず、埋甕を底部の有無により $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ に分類し、それぞれに対応する目的集団=埋甕集団、つまり、 $\alpha-\beta$ 集団と $\gamma$ 集団という系列を異にする二つの埋甕集団(婚入者=女性を中核的構成員とする)を想定する。さらに、一住居址に複数の埋甕が存在する事例を分析することにより、「天竜川水系諸遺跡における一つの埋甕集団像を復原できる」として、先の $\alpha-\beta$ 集団と $\gamma$ 集団という二つの埋甕集団間における“父系父方交叉イトコ婚”の存在を結論づけている。ここで扱っている資料は、本稿で取り上げる地域の中に含まれており、問題点については後述するが(註4)、基本的な点についてのみ私見を記しておきたい。丹羽氏が「適切な視点」に基づく「埋甕集団及びその構成の復原」を目的としているにもかかわらず、最も根本的な問題である概念規定が曖昧であり、先の目的を達成するのに必要不可欠な埋甕あるいは埋甕祭祀のもつ本来的な意味・性格を体系的に明らかにする作業を欠いている論述が看過しえない問題点といえよう。

佐々木藤雄(1981・1982・1983) 埋甕=幼児埋葬施設説に基づき、異系統土器使用埋甕等の分析を通して、埋甕儀礼を幼児と母親との結びつきの強さという女性原理に起因する“女性祭式そのもの”と捉え、その上で縄文時代社会における広範な通



婚圏ならびに親族構造の分析を行った。

田中信(1982) 中部・関東地方を四地域に分けて、それぞれに「埋甕」(出入口部埋甕のみではなく屋内埋甕すべてをまとめている)の形態の変遷を追っている(本稿で扱う対象とした地域は、八ヶ岳山麓が氏の第Ⅲ地域に、松本平・諏訪盆地・伊那谷は第Ⅳ地域に相当する)。この分析から個々の住居において「埋甕形態の選択には、ある種の規制が存在し」、「集団レベルでの共通した選択基準」も存在したと考え、「跨ぐ人の種類」にその形態の選択があったと仮定している。また、埋甕形態と炉のあり方、さらに炉辺埋甕から出入口部埋甕への変化という把握方に立って、火を不浄にする「a形人間(仮称)」を想定する。「埋甕」形態の空間的分布と時間的変遷に焦点をあてたこの論考は、前記したように本稿で扱う地域と重なる部分も多く注意されるが、埋甕の形態評価面で本稿とは立場を大きく異にしている。すなわち、埋甕形態の相違を中部・関東地方、あるいは第Ⅰ～第Ⅳ地域という枠の中でのみ把握、遺跡および遺跡群といった単位における個性や独自性に対する評価、より端的に言えば、「埋甕」という行為を行った縄文社会の人々の集団的・個別的な姿に対する視点を欠いているという点であり、それゆえに「跨ぐ人の種類」や「a形人間」といった表現の意味が不明確なままにとどまっている。

桐原健(1983) 埋甕の概念・用語規定とともに、埋甕を「縄文時代竪穴住居の出入口部に設けられた思维的な性格をもつ施設とのみ規定」し、「埋甕を女性祭式に係るものとみて、社会構成にまで論を及ぼしていくこと」への危険性を指摘している。

金子義樹(1984) まず、「推定の域を脱し得ないままの用途論に立脚した縄文中期文化論が展開されているのが現状である」と従来の埋甕研究の方向性を批判する。埋甕の系譜を勝坂期における誕生土器や埋設炉から住居出入口部への“埋設土器”への変遷・変質として把握、「埋甕は必ずしも中に物が入られなくても、出入口部に土器を埋設する行為自体に意味があったのであり、それは魂を迎え入れること、更には生産に結びついた思维的行為であった」と結論づけている。

岡本孝之(1984) 最大の特徴は強い縄文間引論

批判に立脚している点にある。縄文人の死亡率や屋外埋甕葬例を詳細に検討したうえで、「屋内出入口部の埋甕は埋甕と規定されるのであり、胎児から生後一年以内の乳児を対象としたものと考えられる」とした。この見解は「母親が住居に出入りするたびに跨がれ、彼女の股の間から再び母親の体内に戻り、また生まれて来いと考えられたのである」という再生観念の存在に基づくものといえる。

川名広文(1985) 縄文時代中期末から後期初頭における柄鏡形住居址に伴う埋甕について、「考古学的な諸属性を検証し」、民族誌や人類学の概念の応用によってこの埋甕のシンボリズムの復原を試みている。この中で、中期末から後期初頭の埋甕と中期後半期のそれとの関係が曖昧であり、両者を同列に扱っている点に問題の余地を残しているものの、埋甕が埋設される柄部＝出入口部に境界状況を認め、埋甕に「境界標」としてのシンボリズムを与えている点は、私見と重複する部分も多く注目したい。しかしながら、繰り返し述べてきたように埋甕論を展開するに際しての基礎的な把握、すなわち、埋甕は当時の人々にとって如何なる意味・目的を付与されていたのか、氏の視点に従うならば、なぜ「境界標」としての埋甕がこの時期に必要なのかについては、全く触れられていない点に大きな課題を残したといえよう。

以上のような、埋甕をめぐる研究動向をふまえたうえで本論に入りたい。

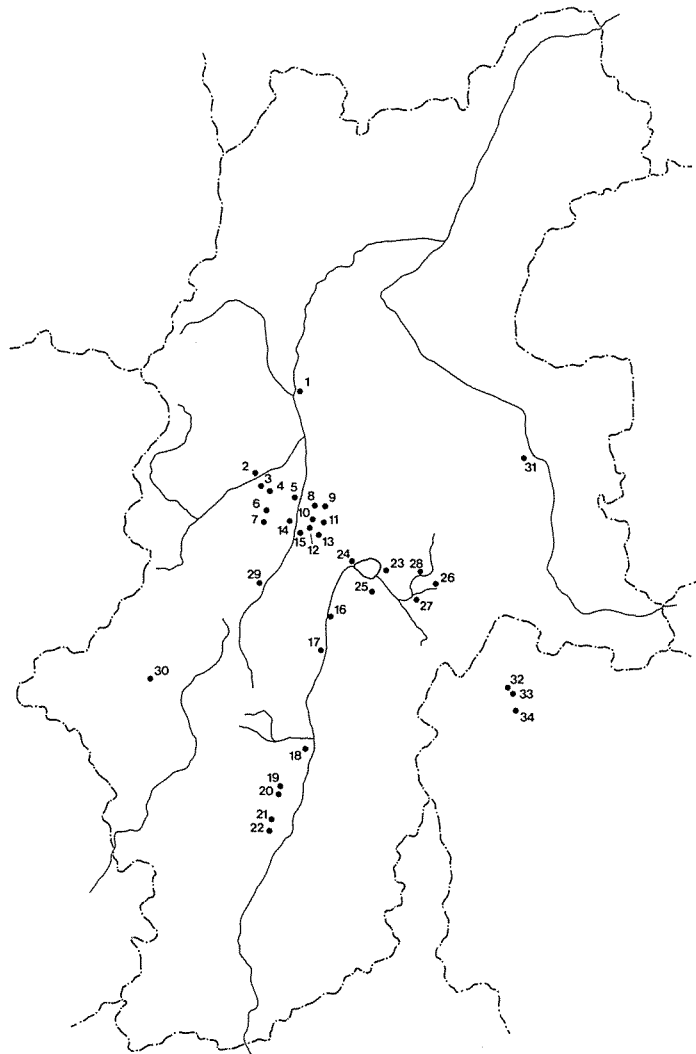
### Ⅲ 中・南信地方における埋甕について

#### 1 資料の範囲と分析方法

本稿では長野県中・南信地方の埋甕を対象としている。埋甕は縄文中期中葉末から中期後半期にかけて出現・隆盛し、続く中期末から後期にむけて衰退・形骸化をたどるという、きわめて特徴的なあり方を示している。今回の分析対象地域でもその傾向には大きな変化は認められないものの、出現期と消滅期については資料的な制約もあって不明な部分を多く残している。そのため、本稿で資料とする埋甕例も、その時間的な幅は後に各地域毎に詳述するように限定的にならざるをえない。そこで、時間的な特性は一旦棄却し、主に埋甕のもつ空間的なそれに焦点をあてて論を進めてみたい。具体的には、まず本地方の34遺跡、268個体

の埋甕事例を資料として提出する。(第1図)

次に、分析の方法は、まず、中・南信地方を松本平西麓・同東麓・上伊那・下伊那・諏訪湖盆・八ヶ岳西～南麓の六地域に区分する。この6地域は、土器型式の分布圏の一部ないしそれを細分するものであり、各地域には独自の地域性、さらに一歩進んで地域圏あるいは社会圏とも呼ぶうる集団的なまとまりが存在し(百瀬 1984)、ひとつの有意性を認めることができる。続いて、埋甕自体の分析は、形態上の特徴から次のような分類を試みた。埋甕が儀礼乃至祭祀行為の所産である点は、すでに疑義はないが、この非日常的な行為に伴う土器のあり方として特徴的なのは、意識的な破壊であり、その点に着目して分類した。すなわち、土器底部を中心とした破壊行為一儀器化行為一とそれが及ぶ部位や程度を第一の分類基準として設定し、さらに、正位ないし逆位といった埋設方法により細分した。(第2図)



第1図 遺跡分布図

a 形態……底部に破壊行為がないもの。二者に細分される。

a-1 ……完形または口縁部を一部欠損するのみのもの。

a-2 ……口縁部から胴上半部を欠き、胴下半部のみのもの。

b 形態……底部および胴下半部を人為的に打ち欠いているもの。破損の程度により三者に細分した。

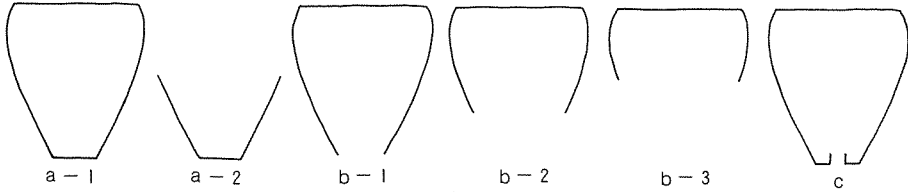
b-1 ……底部ないし底部付近のみ打ち欠いているもの。

b-2 ……人為的欠損が胴中位まで及ぶ例であり、口径と欠損部胴径とが近似するもの。

- |         |         |           |          |          |       |
|---------|---------|-----------|----------|----------|-------|
| 1、こや城   | 2、荒海渡   | 3、麻神      | 4、殿村     | 5、牛の川    | 6、洞   |
| 7、熊久保   | 8、前田木下  | 9、雨堀      | 10、上木戸   | 11、狙原    | 12、中島 |
| 13、柿沢東  | 14、小段   | 15、平出     | 16、樋口内城館 | 17、上の林   |       |
| 18、原垣外  | 19、尾越   | 20、鴨尾天伯   | 21、庚申原Ⅱ  | 22、増野新切  |       |
| 23、穴場Ⅰ  | 24、海戸   | 25、荒神山    | 26、尖石    | 27、茅野和田東 |       |
| 28、よせの台 | 29、本陣屋敷 | 30、御嶽神社里宮 | 31、中村    | 32、柳坪A   |       |
| 33、柳坪B  | 34、頭無   |           |          |          |       |

b-3 ……b-2の程度を越えて破損行為が加えられた例で、ほとんど口縁部のみのもの。

c 形態……いわゆる底部穿孔例。b-1形態の一部と識別のむずかしい個体も存在するが、穿孔の基準としては底径の三分の一程度以下を目安とし、穴をあけるといふ意図が明確なもののみ限定した。



第2図 埋壺の形態分類

以下、この分類基準で、個々の土器型式（系統）（第3図）との関係を比較しながら、検討してみたい。

## 2 各地域の様相

ここでは主に埋壺にみられる各地域を単位とした多様性を探ってみたい。なお、各地域における中期後半期の詳細や地域間の諸関係については、前出の拙稿(百瀬 1984)を参照されたい。

### (1) 松本平西麓（第4図1、第1・2表）

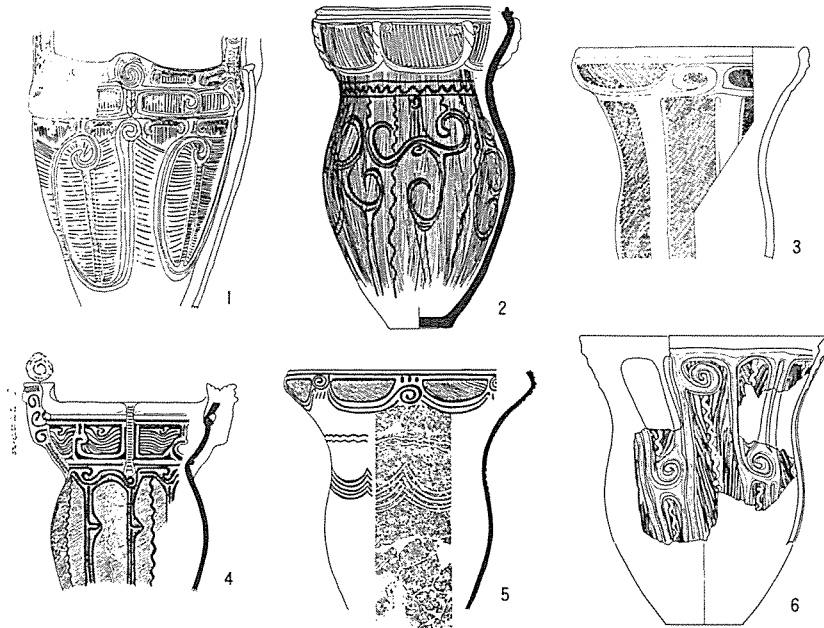
松本平を一望にのぞむ山麓線から東へのびる扇状地や河岸段丘に縄文期の遺跡が数多くみられ、山形村三夜塚・朝日村熊久保など大遺跡の存在する地域である。縄文中期後半期の土器型式は、いわゆる唐草文系土器の分布圏に属し、大形胴張の甕形を特徴とする土器群が主体的に分布している。こうしたなかであって、関東地方に主な分布域を

もつ加曾利E式土器が、客体的ではあるものの共伴し、かつその影響が唐草文系土器の特徴を合わせもった折衷的な土器群を生み出すなど、かなり安定的に存在する事実は見逃しえないし、また、次の(2)松本平東部地域では比較的多い八ヶ岳山麓の曾利式土器が、きわめて稀であることも注目される。

続いて、各遺跡の埋壺を概観する。(以下、遺跡概観では「b-1形態」などの「形態」と「加曾利E式土器」などの「土器」は煩雑となるので時によって省略する。)

● **こや城遺跡**(東筑摩郡明科町) 2軒の敷石住居址より3個体出土。形態はb-1・b-2・逆b-3が各一個体である。このうち、3号住居址のb-2には下伊那的特徴を備えた土器が使用されている点に注意される。

● **荒海渡遺跡**(南安曇郡梓川村) 総数6個体のうち2個体は形態的に不明瞭である。前者の4個体は、



第3図 土器の系統分類

1、唐草文系(松本平) 2、唐草文系(上伊那) 3、加曾利E 4、下伊那系 5、東海系 6、曾利

a-1 が1例・b-2 が2例・逆b-3 が1例であり、後者の2個体は、逆b-2 ないし逆b-3 と考えられる。9号住居址の1例(a-1・加曾利E式)を除き、他はすべて唐草文系である。5号住居址の新埋甕は石蓋があり、内部は空洞状態であった。

●麻神遺跡(東筑摩郡波田町) 4軒の住居址より各1個体ずつ出土。a-1 b-2 が各1、逆b-2 が2。このうち、5号住居址のa-1 は、荒海渡9号住居址同様加曾利E式を使用し、他の3個体は唐草文系であった。

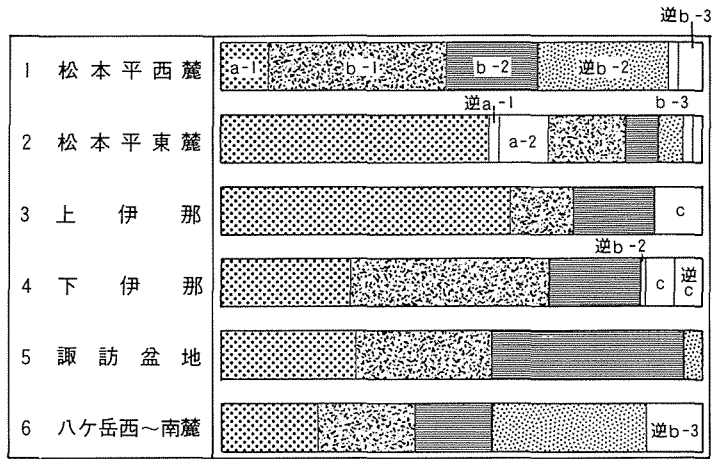
●殿村遺跡(東筑摩郡山形村上竹田) 8軒の住居址より14個体出土。6例が逆b-2、残る8例は、a-1 が1、b-1 が全体の50%を占める7個体と多い。逆b-2・b-1 各1例が唐草文系との折衷様相の加曾利E式であるほかは、唐草文系で占められていた。複数の埋甕を有する住居址に限り住居の建て替え・改築が認められ、さらにまた、旧埋甕にはロームによる埋め戻し・貼り床がなされていた。

●牛の川遺跡(松本市神林) 4個体出土。前出の2遺跡に共通する逆b-2・b-1 (共に唐草文系土器使用)のほか、本地域で唯一の曾利系のa-1 などがある。

●洞遺跡(東筑摩郡山形村上大池) 6個体出土。不明瞭な2例を除けば、他はすべてb-2 (加曾利E式)に限定される。

●熊久保遺跡(東筑摩郡朝日村) 6例出土。すべてb-1 で、唐草文系を用いている。

以上、松本平西麓地域における埋甕のあり方を概観してきたが、その特質をあげるならば、まず形態では、b-1 およびb-2・逆b-2 の三者が主体をなしている点であり、それぞれ全体の37%、19%、27%、計83%を占めている。また、これら各形態と土器型式(系統)との関係を見ると、b-1 は15個体中13例までが唐草文系であり、それと同様、逆b-2 も11例中10例が唐草文系を使用している。これに対して、b-2 は、8個体中



第4図 各地域の形態比率

4例が唐草文系、3例が加曾利E式、残る1例が下伊那系という、他の形態とは趣きを異にする内容を示す点が指摘される。この結果から、本地域の埋甕は、唐草文系を使用するb-1・b-2・逆b-2の3者と、加曾利E式のb-2という4つのカテゴリーに分類が可能であり、さらに、それらの各遺跡における出現率から、北部より南部へ、唐草文系のb-2→逆b-2→b-1→加曾利E式のb-2→唐草文系のb-1という相対的な分布傾向を伺い知ることができる。

一方、本地域では客体的存在のa-1は、4個体と少ないものの、唯一の曾利系を使用した埋甕を含んでおり注目される。この曾利式ないし曾利系を使用し、かつ、a-1をとる埋甕は、a-1が主体的に分布する松本平東麓に数多く認められることから、唐草文系や加曾利E式を使用している他の3例とともに、同地域との何らかの関連の中で把握できると考えられる。そのとき、これらa-1出土の遺跡が、荒海渡から牛の川までと分布的に偏在していることは興味深い。

なお、もう一つの少数派であるb-3および逆b-3は、現在のところ、各遺跡におけるあり方・分布などから、それぞれb-2および逆b-2に対応させて同列に扱うものとしておきたい。

(2) 松本平東麓(第4図2、第3・4表)

上述の松本平西麓地域とは、中央の沖積平地を挟んで東西に対峙する。縄文時代の遺跡の多くは、各河川により堆積した扇状地が連続する緩傾斜地に立地し、とりわけ、中期後半期には、河川に沿

った盆地底部への拡がりをもみせている。本地域には松本平東麓地域にも主体的な分布を示す唐草文系が濃密に存在するほか、加曾利E式(系統)が遺跡によってはそれと拮抗するように分布し、さらに、八ヶ岳山麓中心の曾利式(系統)も少なからず存在するという複雑な様相を呈している。

●前田木下遺跡(松本市寿赤木) 2軒の住居址より3個体出土。a-1(唐草文系)・a-2(加曾利E式)・逆b-3(唐草文系)という内容である。

●雨堀遺跡(松本市内田) 本地域の中でも大規模な遺跡の一つで、10個体出土。底部を残すaと底部を欠損するbとに大別することができる。aはa-1が2、a-2が2の4例であり、加曾利E式(1例)と曾利式(系)(3例)に限られる。後者のbには、b-1(4例)・b-2およびb-3(各1例)があるものの、使用されている土器はすべて唐草文系で、加曾利E式ならびに曾利式に限られて唐草文系が使われていないaとは、きわめて明瞭なコントラストを描き出している。

●上木戸遺跡(塩尻市片丘南熊井) 14個体が出土。14例中11例までがaであり、残る3例はb-1・b-2・逆b-2の三形態がそれぞれ各1例ずつ認められたにすぎない。aのうち土器系統が不明なa-2の1例を除き、他はすべてa-1でありこれは本地域における一般的な傾向と一致している。aの土器系統には、唐草文系(7例)・加曾利E式(3例)が確認されている。a以外では、b-1(唐草文系)・逆b-2(唐草文系)・b-2(土器系統不明)となっており、埋

第1表 松本平西麓地域の埋蔵一覧表

No.	遺跡名	住居址No.	形態	土器系統	備考	
1	こや城	1	b-1	加E	敷石住居	
2		3	b-2	下伊・加E系	敷石住居	
3			逆b-3	唐草系	敷石住居	
4	荒海渡	1	逆b-?	唐草系	旧 新、石蓋、内部空洞	
5		5	逆b-?			
6			b-2	唐草系		
7		9	a-1	加E		
8		16	逆b-3	唐草系		
9		18	b-2	唐草系		18住覆土中
10	麻神	1	逆b-2	唐草系		
11		2	b-2	唐草系		
12		3	逆b-2	唐草系		
13		5	a-1	加E		
14	殿村	2	b-1	唐草系	旧、建替 新、立石? 打製石斧、胴部穿孔 旧、建替 新、チャ・黒耀 旧、建替 新 旧、建替、貼床 中、建替、貼床 新 石蓋、ミニ・粘土	
15		5	逆b-2	唐草系		
16			b-1	唐草系		
17		3	逆b-2	加E系		
18		10	逆b-2	唐草系		
19		17	b-1	唐草系		
20			a-1	唐草系		
21		19	逆b-2	唐草系		
22			b-1	加E系		
23		22	逆b-2?	唐草系		
24			逆b-2	唐草系		
25			b-1	唐草系		
26		25	b-1	唐草系		
27	27	b-1	唐草系			
28	牛の川	B 2	a-1	曾利系?	石蓋、内部空洞 石蓋	
29		B 5	逆b-2	唐草系		
30		B 10	b-3	唐草系		
31			b-1	唐草系		
32	洞	J 2	b-2	加E	石蓋、石棒	
33		J 6	b-2			
34		J 6	b-2			
35		J 13	b-2			
36		J 4	逆? b-2			唐草系
37		J 14	逆? b-2			唐草系
38		熊久保	1			b-1
39	2		b-1	唐草系		
40	2		b-1	唐草系		
41	60年度 発掘調査より		b-1	唐草系		
42			b-1	唐草系		
43			b-1	加E・唐草系		

註 「土器系統」及び「備考」欄は下記のように省略してある。加曾利E→加E、下伊那系→下伊系、唐草文系→唐草系、建て替へ→建替、ローム貼り床→貼床、チャート→チャ、黒耀石→黒耀、ミニチュア土器→ミニ、横刃形石器→横刃

第2表 松本平西麓地域の土器系統別形態数量

形態 土器系統	a-1	逆a-1	a-2	b-1	逆b-1	b-2	逆b-2	b-3	逆b-3	c	逆c	総計 ( )内%
唐草文系	1			13		4	10	1	2			31 (76)
加曾利E系(系)	2			2		3	1					8 (20)
下伊那系						1						1 (2)
曾利(系)	1											1 (2)

設形態とその土器系統との関係が示すこのようなあり方は、先に検討した松本平西麓地域のなかに見出すことができる。

●**俎原遺跡**(塩尻市片丘北熊井)(註1) 2例のみと少ない。b-1(加曾利E系)・a-1(加曾利E式)各1例である。

●**中島遺跡**(塩尻市塩尻棧敷) 6軒の住居址より7個体出土。うち4例までをa-1が占め、他はb-1・b-2・逆b-2が1例ずつである。aとbとは使用される土器系統に相異が認められ、a(すべてa-1)には、上伊那地域的な要素をもつ唐草文系が1例あるほかは、4例中3例が曾利式なのに対し、bはすべて在地的な唐草文系である。本遺跡出土の埋甕に関していま一点注意されるのは、本遺跡・本地域で極めて少数派(43例中2例・5%)といえる逆b-2である13号住居址出土例の内部に石鏃2点が遺存していた点である。このように客体的な埋甕内部より石器類が検出される例は、少なからず見出すことができる。

●**柿沢東遺跡**(塩尻市塩尻上西条) a-1のみ5個体出土。唐草文系3・加曾利E式2例であるが、両者はそれぞれに埋設方位を異にしていることが報告されており、同一形態内における土器系統による差異を示す好例として興味深い(第5図)。

●**小段遺跡**(塩尻市洗馬芦ノ田) a-1が1例出土。

●**平出遺跡**(塩尻市宗賀平出) 逆a-1 1例。

以上、松本平東麓地域埋甕の特徴としての第一点は総数43例中24例(56%)にも達するa-1の卓越的存在であり、また、同形態を含めたa形態に加曾利E式(系)や曾利式(系)が用いられる頻度が著しく高いことである。つまり、本地域埋甕土器の60%以上を占める唐草文系が、aおよびb両形態をそれぞれほぼ等しく選択しているのに対して、加曾利E式(系)は10例中9例、曾利式(系)は6例すべてがa形態の採用という対照的なあり方である。これはまた逆に、b形態に占める唐草文系の割合がきわめて高いことをも示しており、実

に13例中12例(92%)を数えることができる。しかも、例外的な1例である俎原遺跡V号住居址出土例が、本地域では唯一検出されている在地・折衷的要素を色濃くもった“加曾利E系”であることから、b形態にみられる唐草文系との強い結びつきは、在地的という観点からすれば例外なく認められるといえよう。さらに、b形態のなかでb-1とb-2の比率が3対1を示し、これが松本平西麓地域の同比率とほぼ一致している点を指摘しうることから、同地域との強い関連を注目してよいであろう。このようなa形態とb形態、唐草文系土器と加曾利E式・曾利式土器との間にみられる絶対的な対照性を如実に物語る事例として、先述した上木戸や柿沢東両遺跡において認められた、唐草文系と加曾利E式との埋設方位の差異を指摘しうる(第5図)。

さて、本地域埋甕のカテゴリーをみると、唐草文系のaおよびb-1・b-2・逆b-2、さらに、加曾利E式や曾利式a形態が認められ、これらがモザイク状に分布していることが理解される。

### (3) 上伊那(第4図3、第5・6表)

伊那谷は南アルプスと中央アルプスとはさまれた南北に細長く続く谷状盆地であり、そのほぼ中央を諏訪湖より源を発する天竜川が山地から流れ出す多くの支流を集めて南流している。この兩岸とりわけ西岸には、複合扇状地や河岸段丘が数多く形成され、縄文時代に限らず多時期にわたる遺跡の立地が確認されている。そのうち、ここで取り上げる上伊那地域は、駒ヶ根市太田切川以北(註2)であり、中期後半期における土器系統のうえで、この地域独特な要素をもった唐草文系土器の分布域となっている。

●**樋口内城館遺跡**(上伊那郡辰野町樋口) 18軒の住居址より22個体出土。うち3例のみが加曾利E式ないし加曾利E系であり、他はすべて唐草文系土器によって占められている。形態的には、a-1が12例(54%)、b-1が3例(14%)、b-2が4

第3表 松本平東麓地域の埋甕一覧表

例(18%)、cが3例(14%)となる。各形態と特定土器系統との密接な関連は認め難いものの、形態相互の差異として、4例確認されている石蓋のある埋甕がすべてa-1に限定される点は示唆的である。

●上の林遺跡(上伊那郡箕輪町) 4軒の住居址より10個体出土。なかでも、J8号・J10号両住居址からはそれぞれ4個体も出土している。形態・土器系統いずれも不明な2例を除くと、8例中6例がa-1、残る2例がb-1とb-2各1例となっている。なお、土器系統はすべて唐草文系である。

以上、2遺跡のみにとどまったが、総計32個体の埋甕について概観した。その結果はまず、全体の60%を占めるa-1の卓越的地位が注意でき、先述した松本平東麓地域の様相と一致する。ここで、同地域と対比すると、a-1の類似性に反してb形態における差異が目立つ。すなわち、b-1とb-2の比率が松本平東麓地域ではほぼ2対1であるのに対して、本地域ではほぼ1対1となり、b-1の占める割合が半減、逆にいえば、b-2が倍加している点が抽出される。この点について、本地域での各形態の分布状態と他地域でのそれとの関係からみると、b-1については下伊那地域との、b-2については諏訪盆地との関連を想定できる。さらに、もう一点、逆位形態をとる埋甕が本地域では皆無である点を挙げておきたい。この事象は次に述べる下伊那地域や諏訪盆地にもほぼ共通する現象であるといえる。

## (4) 下伊那(第4図4、第7・8表)

先に示したように太田切川以南としたこの地域は、天竜川の開析

No.	遺跡名	住居址No.	形態	土器系統	備考	
44	前田木下	8	a-1	唐草系	旧、建替 新	
45			a-2	加E		
46			逆b-3	唐草系		
47	雨堀	A2	b-3	唐草系	旧、建替 新	
48			a-1	加E		
49		A3	b-1	唐草系	旧 新、入口方向変更	
50			b-1	唐草系		
51		A5	a-2	曾利	石蓋	
52		A9	a-2	曾利		
53		A10	a-1	曾利系?		
54		A12	b-1	唐草系		
55	A15	b-2	唐草系	旧		
56		b-1	唐草系	新		
57	上木戸	8	a-1	加E	旧 新、石蓋      上伊～諏訪的  上部削平	
58			a-1	唐草系		
59			17	a-1		加E
61			18	a-1		唐草系
62			20	a-1		唐草系
63			34	a-1		唐草系
64			a-1	唐草系		
65			101	b-1		唐草系
66			105	a-2		
67			106	逆b-2		唐草系
68			107	a-1		加E
69	108	b-2				
70	113	a-1	唐草系	唐草系		
71		a-1	唐草系			
72	組原	V	b-1	加E系		
73			Ⅶ	a-1		加E
74	中島	3	a-1	曾利	石蓋 石蓋、脇に石 上伊的、脇に石 旧、貼床 新 石鏝2	
75			5	a-1		曾利
76			6	a-1		唐草系
77			9	b-2		唐草系
78				b-1		唐草系
79			13	逆b-2		唐草系
80			15	a-1		曾利
81	柿沢東	1	a-1	唐草系	旧 新  上伊的	
82			3	a-1		加E
83			a-1	加E		
84			4	a-1		唐草系
85			5	a-1		唐草系
86	小段	5	a-1	加E	石棒	
87	平出	口号	逆a-1	唐草系		

第4表 松本平東麓地域の土器系統別形態数量

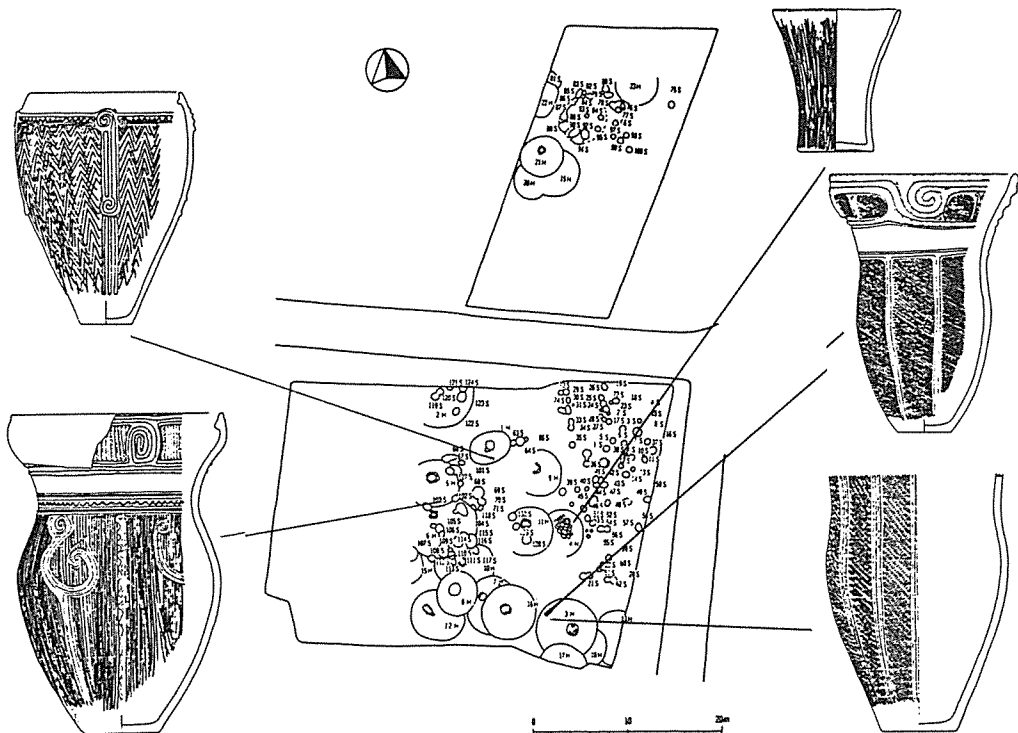
形態 土器系統	a-1	逆a-1	a-2	b-1	逆b-1	b-2	逆b-2	b-3	逆b-3	c	逆c	総計 ( )内%
唐草文系	12	1		6		2	2	1	1			25 (61)
加曾利E(系)	8		1	1								10 (24)
下伊那系	0											0 (0)
曾利(系)	4		2									6 (15)

によって兩岸対称的な数段の河岸段丘が連なり、場所によっては田切地形という伊那盆地特有の美しい地形をみせている。この地域はその地勢的な要因から一種独特な風土を生み出しており、縄文時代においても例外とはいえない。縄文時代中期後半期の土器様相に限ってみても、下伊那系土器と仮称しうような特徴的な土器群を生み出すとともに、唐草文系土器や加曾利E系土器、さらには東海系の土器群をも取り込んだ、きわめて在地的要素の強い土器文化を生成している地域とみなされる。

●原垣外遺跡(駒ヶ根市赤穂) 上述の上伊那地域とは境を接するように位置している。7個体が出土。a-1の1例以外はすべてb-1であり、本地域のなかでも特徴的なあり方を示している。唐草文

系5例、下伊那系2例であり、前者の割合が高いことは、唐草文系の主な分布域である上伊那地域との接触地域に位置する本遺跡の特徴を端的に示しており、同地域との積極的なつながりを考えることが可能である。さらに唯一検出されたa-1に、本遺跡ではきわめて客体的な下伊那系が使用されている点、また、b-1と唐草文系とが強い結びつきを示している点を指摘しておきたい。

●尾越遺跡(上伊那郡飯島町) 12個体出土。a-1が2例、b-1が5例、b-2が2例、cが1例、逆cが2例である。土器系統は、12号住居址のb-1に唐草文系が1例ある以外、他はすべて下伊那系である。このなかで、唐草文系を用いたb-1は前出した原垣外遺跡と、下伊那系を用いたcおよび逆c形態は後述する鳴尾天伯遺跡との



第5図 柿沢東遺跡の埋壘配置図





第7表 下伊那地域の埋蔵一覧表 (次頁へつづく)

であり、また後者では本地域の75%(12例中9例)が本遺跡に集中するとともに、使用土器すべてが当地域に主体的分布域をもつ下伊那系である点である。

以上のような各遺跡がもつ個別的なあり方を総合すると、本地域においては、a-1・b-1・b-2・逆cの4形態の大きなカラゴリーと、それらをさらに分節するカテゴリー、すなわち、上伊那地域など他地域との関連を示す唐草文系や加曾利E系土器を用いるa形態、在地的要素をもつ下伊那系あるいは東海系のa形態、上伊那地域との接触地域に分布する唐草文系土器のb-1形態、下伊那系を使用するb-1とb-2、逆cの各形態とに細別することができる。

(5) 諏訪盆地(第4図5、第9・10表)

諏訪盆地は北東に霧ヶ峯・八ヶ岳火山帯を、西南に守屋・入笠山地をそれぞれ背にした南東一北西方向に長い紡錘形をした盆地であり、その西北部低地に諏訪湖がある。盆地縁辺部には、諏訪湖に流入するコンセプトリバーによって多数の小扇状地が形成されており、縄文時代遺跡もこの盆地縁辺部の扇状地帯に集中分布している。縄文中期後半期には、上伊那や松本平とともに唐草文系土器群の分布圏に含まれる一方、隣接する八ヶ岳西～南麓地域からの曾利系土器群の侵透を受けて、接触地域独特の地域圏を生成している。

- 穴場Ⅰ遺跡(諏訪市双葉ヶ丘) 唐草文系土器のa-1形態が1例ある。
- 海戸遺跡(岡谷市天竜町) 唐草文系4個体出土。うち3例がb-2、1例がb-1である。
- 荒神山遺跡(諏訪市湖南) 総数

No.	遺跡名	住居址No.	形態	土器系統	備考
120	原垣外	22	b-1	唐草系	火災、集石
121		25	b-1	唐草系	旧
122			a-1	下伊系	新、石蓋
123		8	b-1	東海・下伊系	旧
124			b-1	唐草系	新
125		9	b-1	唐草系	旧
126			b-1	唐草系	新
127	尾越	6	a-1	下伊系	黒耀
128		7	b-2	下伊系	
129		12	a-1		新
130			b-1	唐草系	
131			b-1	下伊系	
132		13	b-2	下伊系	
133		19	C		
134		22	b-1	下伊系	
135			b-1	下伊系	
136		24	b-1	下伊系	
137		26	逆C	下伊系	
138		逆C	下伊系		
139	鳴尾天伯	5	逆C	下伊系	
140		6	逆b-2	下伊系	
141		10	逆C	下伊系	
142			C	加E系	
143	庚申原Ⅱ	6	b-1	下伊系	石蓋 旧、ローム充填 新
144		7	b-2	加E系	
145		8	b-1	下伊系	
146		10	b-1	下伊系	
147		12	C		
148		13	a-1	唐草・加E系	
149		16	b-1	下伊系	
150		17	b-1	下伊系	
151		a-1	唐草系?		
152	増野新切	B3	a-1	加E系	上部、脇に石 上部に石
153		B4	逆b-2	下伊系	
154		B7	b-1	下伊系	
155		B9	b-1	下伊系	
156		B10	b-2	下伊系	
157		B11	a-1	東海系?	
158			b-1	東海系?	新、エンド・スクレイパー

(前頁からつづく) 20個体と本地域のなかでは多い。

No.	遺跡名	住居址No.	形態	土器系統	備考	
159	増野新切	B13	a-1	東海系		
160		B20	b-1			
161				a-1	下伊系	
162		B22	a-1	東海系	入子	
163		B23	b-1	下伊系	土器片、上部に石	
164		B25	a-1	東海系		
165				b-1	東海系	上部に石
166		B27	b-2	下伊系		
167		D1	b-2	下伊系	旧	
168				b-1	唐草系	新、下部に土器底部をおく
169		D2	不明			他遺構に切られる
170				b-1	唐草系	新
171		D4	不明			旧
172				a-1	加E系	新、上部に石皿
173		D8	不明			建替
174				b-2	下伊系	
175		D12	b-1	下伊系		
176		D13	a-1	下伊系?	旧、建替、貼床	
177				b-2	下伊系	中、建替
178				b-1	唐草系	内部に台付土器、上部に石
179	D14	b-2	下伊系	旧		
180			a-1	唐草系	新	
181	D24	a-1	下伊系	横刃		
182	D26	a-1	下伊系			
183	D29	b-1	東海系			
184	D30	b-2	下伊系	磨石・横刃・黒耀		
185	D32	b-2	下伊系	旧、建替		
186			C	東海系	新	
187	D36	b-1	下伊系			
188	D37	a-1			旧、貼床	
189			b-2	下伊系	新、横刃	
190	D47	a-1		加E系?		

a-1・b-1が各6例、b-2が7例、逆b-2が1例。a-1は唐草文系、曾利系ともに3例と同数を示し、b-1は加曾利E式1例、唐草文系2例、他は不明であり、また、b-2はすべて唐草文系である。一例のみの逆b-2は、唯一大木系土器を使用している。

諏訪盆地の埋蔵のあり方を総合すると、まず、本地域に深く関り合う形態として、唐草文系土器を用いたb-2形態を抽出することができる。これは、同形態が当地域出土埋蔵の40%(25例中10例)を占めていることから帰納される。さらに、本地域に存在する埋蔵のカテゴリーとしては、唐草文系のa-1およびb-1、曾利式ないし曾利系のa-1が考えられ、前者は松本平東麓地域および上伊那地域との、後者は八ヶ岳西～南麓地域との関連が想定される。一例のみの逆b-2に大木系が用いられている点、土器系統の面からも不明な点を残すものの、形態に限ってみれば、八ヶ岳西～南麓地域とのつながりのなかで把えうるものとしておきたい。

(6) 八ヶ岳西～南麓(第4図6、第11・12表)

長野・山梨両県境に位置する八ヶ岳の裾野に広がる広大な緩斜面のうち、長野県側に含まれる地域である。河川による開析・浸蝕

第8表 下伊那地域の土器系統別形態数量

形態 土器系統	a-1	逆a-1	a-2	b-1	逆b-1	b-2	逆b-2	b-3	逆b-3	c	逆c	総計 ( )内%
唐草文系	2			9								11 (18)
加曾利E系	4					1				1		6 (10)
下伊那系	6			14		11	1				4	36 (59)
曾利系												0 (0)
東海系	4			3						1		8 (13)



そのなかで、各地域・各遺跡において、特定の埋蔵形態とそれに用いられる土器系統との間にきわめて強い相関関係が認められることを明らかにしえたが、それらを補足しより明確化するために、周辺地域のあり方にも次に簡単に触れておきたい(第13表)。

(7) 木曾谷

わずかではあるが埋蔵の存在が報告されている。資料的な制約から多くを述べることはできないものの、そこに見られる形態的な特徴から、松本平西麓地域や上伊那地域とのつながりのなかで把握できるものと思われる。

(8) 八ヶ岳北麓

先の八ヶ岳西～南麓とは地理的な後背地を同じくする地域であり、埋蔵にも同地域と類似する特徴を見い出せる。しかし、例示した中村遺跡(佐久市根岸)の6号および14号住居址出土埋蔵のごとく、a-1形態と加曾利E系土器との組み合わせという、松本平で看取されたあり方をも同時に示している点を見逃すことはできない。

(9) 山梨県域

今回は、長野県との県境に近い地域の資料に限定せざるをえなかったが、その様相は西に接する八ヶ岳西～南麓地域のそれとの間に大きな相違を示す。つまり、八ヶ岳西～南麓地域で40%以上の高率を占める逆位形態をとる埋蔵が、本地域では1例のみという対照を示している。また、その逆位形態に代わるb-2形態の優位性と八ヶ岳西～南麓地域にも認められたa-1ならびにb-1形態の存在などが注意される。

第11表 八ヶ岳西～南麓地域の埋蔵一覧表

No.	遺跡名	住居址No.	形態	土器系統	備考						
216	尖石	14	逆b-3	曾利							
217			a-1								
218			逆b-2								
219		16	逆b-2	曾利							
220			19			逆b-2					
221			20			b-2					
222	茅野和田東	2	a-1	曾利	旧、入子						
223			b-1			曾利					
224			b-1				曾利				
225			15					逆b-3	曾利		
226								16		逆b-2	曾利
227								23		b-2	
228		26	b-1								
229		30	b-2	下伊系							
230		37	逆b-2		加E・曾利系						
231		38	a-1			曾利	石蓋				
232			逆b-3	曾利?							
233		44	b-1		唐草系	石蓋					
234	逆b-2		曾利								
235	よせの台	1	b-2	唐草系	旧、埋戻し、貼床 新						
236		9	逆b-2	曾利							
237			逆b-2	曾利							
238		2	a-1	曾利							
239		4	a-1	曾利							
240		6	b-1	曾利系							

以上が中・南信地方ならびにその周辺地域における埋蔵の概要であるが、そこで明らかにしえたのは、埋蔵の埋設形態が各地域・各遺跡のなかで一定の分布範囲あるいは偏在性を示す点であり、また、使用される土器系統との間に強い相関が認められるという事実であった。つまり、埋蔵はある特定の形態と土器系統との組み合わせに分解されるのであり、その分解単位が各地域を、そして各地域間をモザイク状に分節しているといえることができるのである。

第12表 八ヶ岳西～南麓土器系統別形態数量

形態 土器系統	a-1	逆a-1	a-2	b-1	逆b-1	b-2	逆b-2	b-3	逆b-3	c	逆c	総計 ( )内%
唐草文系				1		2						3 (14)
加曾利E系												0 (0)
下伊那系						1						1 (4)
曾利系	4			3		1	7		3			18 (82)

では、これらの事象は如何なる意図・目的を、さらには、社会的背景を反映しているのか。以下、本稿の主題に係る問題として、埋甕の埋設形態とそれに用いられる土器系統との間に顕われた諸関係について考えてみたい。

#### IV 埋甕の用途・機能について

本論に入る前に、冒頭にみづから掲げた提言に従い、埋甕が本来果たしていたであろう用途・機能についての私見を提出しておきたい(註3)。

埋甕の意味・性格を考える場合、従来より展開されてきたような「推定の域を脱し得ないままの用途論」をいたずらに継承すること一たとえそれが批判的な継承であっても一は、埋甕のもつ歴史的な、また、それゆえにすぐれて現在の意味を永久に葬り去る結果をもたらすであろうことは、前述した最近の埋甕をめぐる研究の方向性をみるならば、すでに明らかであろう。そこで本稿では、埋甕を住居址に伴う付帯施設、住居構造の一部として把えるという基本的な視点に立ち、埋甕のもつさまざまな属性のなかで、以下に展開する七項目を抽出し検討したい。

##### ◎出入口部に埋設されている。

これは埋甕の概念規定に深く関わる属性の一つである。つまり、屋内・屋外埋甕、あるいは炉辺・出入口部埋甕といった諸類型を示す広義の埋設土器としての“埋甕”から、ここで問題としている出入口部埋甕を分離するための重要な要素である。出入口部、すなわち現在の居住空間からすれば敷居に相当するこの特定の部位に、土器を埋設するという行為がなされたこと背景には、土器を埋設するという行為全体の背後に共通する根源的な意識や思念とは位相を異にする、何らかの意図が働いていたと考える証左ともなっている。

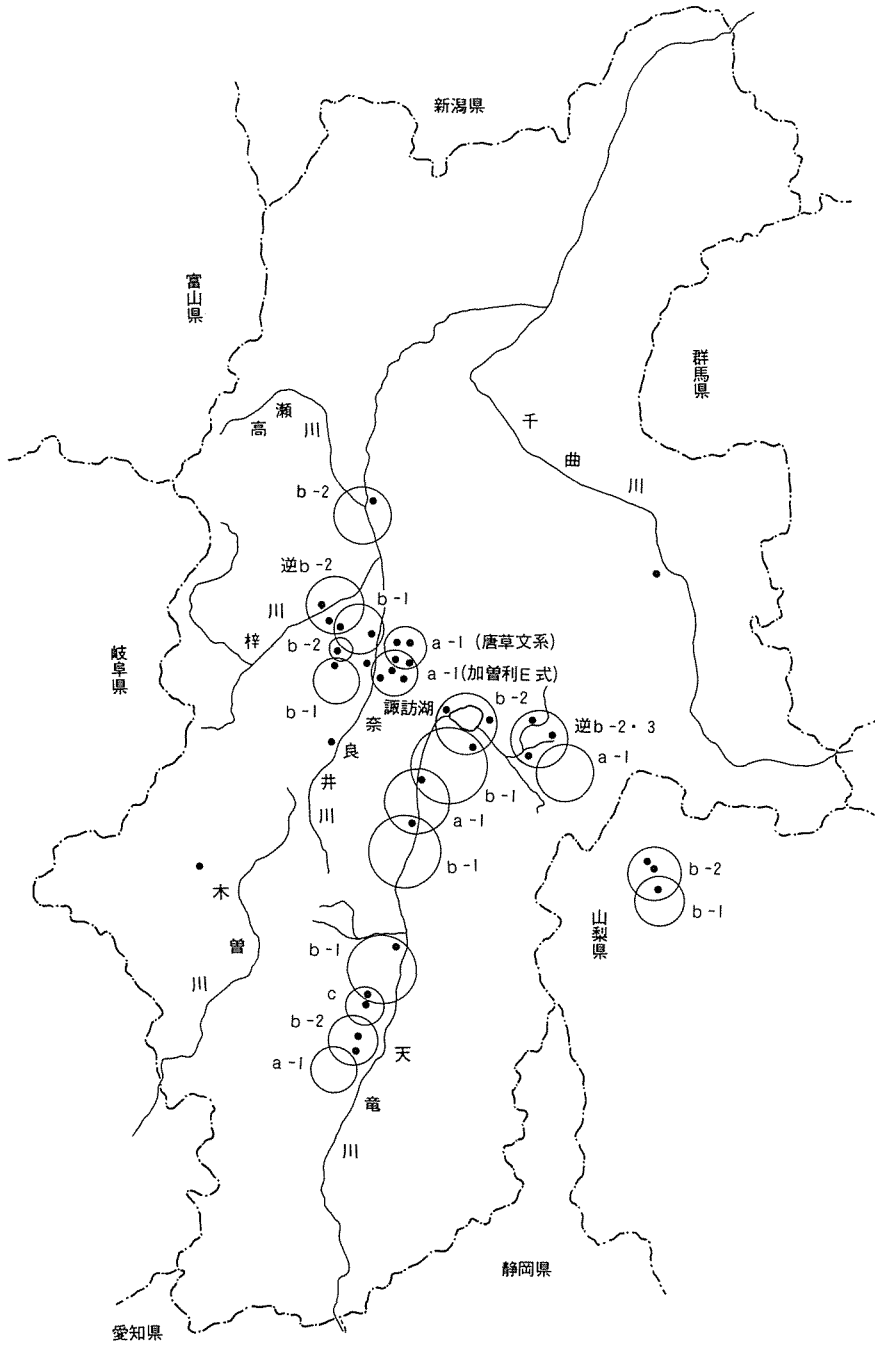
##### ◎住居の新築ないし増改築の時点で埋設して

第13表 周辺地域の埋甕一覧表

No.	遺跡名	住居址No.	形態	土器系統	備考
241	本陣屋敷	2	b-1	唐草系	胴部穿孔
242	御嶽神社里宮	1	b-3	唐草系	旧、建替 新
243			a-1	唐草系	
244	中村	3	逆b-3	曾利系	石蓋 敷石住居
245		6	a-1	加E系	
246		11	逆b-3	曾利系	
247		14	a-1	加E系	
248	柳坪A	1	b-2	曾利	
249		2	b-2	曾利	
250		10	b-2	曾利	
251	柳坪B	3	b-2	曾利	
252		7	逆b-2	曾利	
253		10	b-2	曾利	
254		12	b-1	曾利	
255		14	b-2	曾利	
256		15	b-2	曾利系?	
257		16	a-1	曾利	
258		23	b-1	曾利	
259			b-1	曾利	
260	頭無	2	a-1	曾利	旧 新
261		3	a-1	曾利	
262		4	b-1	曾利	
263		5	a-1	曾利	
264		6	b-1	曾利	
265		7	b-3	曾利	
266			b-2	曾利	
267		10	b-2	曾利	
268	12	b-2	曾利		

いる。

この点はすでに神村透氏(1973・1974・1980)や水野正好氏(1978)により明らかにされている。両氏は埋甕を住居構造の一部として把えたうえで、埋甕と他の住居構造施設との位置関係などから住居設計上の計画性を導き出しており、そのなかで、埋甕の埋設時期をも限定している。神村氏は長野県中・南信地方の埋甕あるいは住居址の構造を検討するなかで、「埋甕は住居を建造の時、埋めること(掘り込み)を意識し、その時に日常生活の中から選んだ土器を埋めている。このことは、埋甕と周溝や壁の状態、建直しの都度埋められていることから推察される」(1974)、「周溝の埋甕を意識したあり方から見て、埋甕は住居建造時に意識して埋められた施設である。この点から埋甕の目的



第6図 形態分布模式図

は、将来この住居に住む女性が妊娠することを予測して埋めたのではなく、住居建造時に住居に対しての供儀を目的につくられた施設と考えた方が妥当である」と指摘しており、また、水野氏は神奈川県潮見台遺跡8号住居址の例をひいて、「住居の建設に当り、炉の位置や構造、柱の位置や構造を決定するのと同様、同時に埋甕とそのための張り出し部が定められていたことを如実に示しているのである。従って、住居の建設と共に埋甕はあるという結論を導きうる」とし、さらに同遺跡9・10号両住居址の所見ともあわせて、建替えのある住居址について、「建替えをめぐる計画的な空間構成の設計の中に埋甕は一つの間を獲得しているものであり、建替え時の重要な計画として埋甕があったのである」と結論づけている。

また、本稿中で資料としている埋甕のなかにも、その埋設時期を新築ないし改築時に限定しうる例をいくつか見出すことができる。松本平西麓地域の山形村殿村遺跡5号および同27号住居址例はともに埋甕埋設に伴う掘り方が、埋甕と出入口部壁との中間にあるいわゆる出入口部ピットや周溝に切られていることから、新築・増改築による生活開始時にはすでに埋甕が埋設されていたというのである。このように埋甕が住居使用時のある時点ではなく、従来の通説とは相い反する住居新築時および住居増改築時の何れかに埋設されたと考えることの妥当性を裏づけることができよう。

#### ◎一住居一埋甕を基本とする。

一軒の住居址に複数の埋甕が存在する例が多々みられるが、それらは一時期に複数をもっていたのか。その時間的同時性ないし先後関係を明らかにすることは、埋甕の用途・機能を探るうえで重要な鍵となろう。

まず、複数埋甕をもつ住居の建て替え事例をみると、その痕跡をとどめるものが一般的であり、逆に、一箇体の埋甕の場合はそうした事例はきわめて少ない。この点については、神村透氏(1974)や田中信氏(1981・1982)などがすでに指摘しているが、本稿で問題としている中・南信地方に類例を求めると、先の殿村遺跡5・7・22号各住居址例はじめ、前田木下8号、雨掘A2号、増野新切D8・D13・D32号、御嶽神社里宮1号など多くを抽出できる。

以上から、複数埋甕は住居の建て替え行為によるものであり、埋甕は一時期に一箇体、すなわち一住居一埋甕の原則と理解できる。なお、この点を明示する例証として、複数埋甕をもつ住居址の中で、古い埋甕と新しいそれとが分離されるとき、前者が壊されるか埋め戻されて上部を貼り床される事例を次にあげておきたい。

例えば殿村遺跡の5・17・19・22号住居址例がある。この中の住居址奥寄りの旧埋甕は、総じて埋甕下部に堆積した自然流入土層を覆うようにローム質土による埋め戻し・貼り床がなされている。

また、中島遺跡の9号例では旧埋甕に埋め戻しを確認されている。「埋甕に使用された土器は、〈中略〉、正位に埋められ、内にはローム土がつめ込まれていた」といわれている。これ以外にも庚申原Ⅱ16号、増野新切B11・D13・D37号、荒神山10・31号、よせの台9号、御嶽神社里宮1号の各住居址などを提示できる。

#### ◎住居使用時には埋甕内は基本的に空洞状態であった。

これは通説化している乳幼児埋葬説や胎盤収納説に批判を投げかける属性の一つである。というのは、埋葬・埋納が明らかな屋外例は常に埋め戻しを前提としており、開口状態に置かれる性格ではないからであり、それは屋内でも変わることはないであろう。

埋甕が住居使用時において、人為的な埋め戻しをすることなく、自然流入土の存在を度外視すれば、基本的に空洞状態であったことを示す事例がいくつかある。荒海渡5号、洞J2号、牛の川B2号各住居址例は、ともに開口部を石蓋によって閉塞されていた埋甕である。このほか、埋甕内部の上半分が空洞であった中島9号(新埋甕)や荒神山42号例、また、内部が完全に埋まった例のなかにも、住居使用時ないし廃棄時には空洞であったことを示す埋甕もある。例えば焼失家屋の埋甕内部には、住居焼失時の焼土や炭化材が下部にまで及んでいるのが一般的である。類例は殿村22・27号、柿沢東5号例などが列挙される。もう一点、埋甕内覆土の形成に関しての興味深い観察がある。上伊那郡宮田村高河原遺跡の埋甕の覆土に対する高林重水氏の所見(高林 1971)によれば、「埋甕内の



覆土は埋葬埋設時に、ある意図のもとに入れられたものではなく、時間の経過にしたがって自然に流入したものであることが考えられたのであり、同時にその流入を許すだけの空間が埋葬内にあったことを意味している」と結論づけている。さらに、埋葬内覆土の住居址覆土とが同質であったという原垣外22号住居址例やよせの台遺跡における分析を付け加えておきたい。

◎従来一般にいわれているような必ず跨がなければならぬという性格のものとはいえない。

この属性は乳幼児埋葬説や胎盤収納説の原理的側面といえる再生観念や感染呪術に対する疑問を提出している。よせの台遺跡の報文から引用してみたい。「埋葬は住居の出入口部に埋設されるものの、しかし、出入口部の施設であっても人間が直接埋葬の上を通過する位置であるという説明には、残念ながら……否定的である」、「跨ぐ」という行為が必要条件でない例証であろう。

◎住居の出入口部およびその付近に存在する石棒や立石、あるいは、自然石の集石は、埋葬の機能を強化するものであり、それらが単独で存在する場合は埋葬と同等の機能を付与されていたと考えられる。

この点については想定域を脱しえないが、石棒や立石、自然石による人頭大～拳大の礫の集石が、出入口部において埋葬に付随するように、また、時には単独で存在する例が多々見られることからすれば、少なくとも、それらと埋葬ないし出入口部との深い結びつきだけは指摘されてよいであろう。出入口部の石棒や立石例は、洞J2号、増野新切D8・D14号などがあり、また、自然石や集石例として、中島5～7号、荒神山3号、増野新切B3・B4・B11・D26号などがある。

◎日常的(個別的)な家屋は、原則としてすべて埋葬ないしそれに準ずる施設を有する。

埋葬をもつ住居址については、それが特定の住居に限られるという意見(神村 1974)もあるが、本稿では、一般的な住居にこそ埋葬が存在するものとして把え、逆に埋葬などの施設をもたない住居址にそうした特殊性を想定した。それはまた、埋葬が出産というきわめて偶発的な事柄に関する

所産ではないことを提示するものでもある。

まとまった数の埋葬が出土した樋口内城館と増野新切両遺跡について、埋葬の割合をみると、まず前者では、縄文時代住居址50軒中埋葬のある住居址19軒(38%)、ないもの31軒(62%)となるが、埋葬をもたない住居址を詳細に検討すると、31軒中25軒は当地域では埋葬習俗をもたない中期中葉の勝坂期(22軒)および中期終末期(3軒)であり、さらに残る6軒も、うち5軒は出入口部を他の遺構によって切られ、1軒は埋葬はないものの、出入口部にいわゆる埋葬ピットがある。よって、樋口内城館遺跡では、20軒中19軒(95%)に埋葬が存在することになり、それをもたない1軒についても、埋葬と同様な施設と考えられる埋葬ピットがあることから、埋葬をめぐる機能という点からすれば、すべての住居址に対して先の属性を与えることが可能である。

増野新切遺跡も同様で、縄文時代住居址78軒中、埋葬の存在しない時期12軒、用地外で出入口部未完掘や他の遺構によって切られているもの合わせて25軒、不明3軒、埋葬あるもの29軒、埋葬ピット8軒となる。确实な38軒中29軒(76%)に埋葬、8軒(21%)に埋葬ピットがあり、出入口部施設という先の観点からすれば、実に1例を除いた38軒中37軒(97%)にその存在を認めることができるのである。

◎縄文時代中期後半期という限られた時間の中で生起・展開をみせている。

埋葬が縄文時代中期後半期を頂点として急激な消長をみせていることは、すでに大方の知るところである。本稿の対象地域でもそれは例外とはいえず、むしろ、より際立ったあり方を呈している。この点に注目するならば、悠久な歴史をもつ縄文時代の中でも中期後半期というきわめて限定された時間のなかに顕われた時代性が、埋葬に対してもつ意味の重要性は明らかであろう。かつて拙稿(百瀬 1984)においてこの中期後半期の時代性を論じたが、本稿でも基本的な部分では何ら変更を加える必要を認めないばかりか、むしろ本稿の根幹に関わる内容を含んでいるので、長くなるがその一部を引用してみたい。

「……曾利Ⅱ式期において、先の社会的・経済的な緊密化を背景とした超地域的・汎東日本

的な社会運動の中で、地域的集団関係を強めつつ大きな転換をなし、集落数の激増・集落構造の変革・大甕に特筆される土器の新形態の出現、さらには、埋甕風習や石柱・石棒祭祀の確立など様々な変化を現象化させている。……このような文化的特殊化ともいえる社会的適応を示した中期後半の社会もまた、曾利Ⅲ式期を境として再び集落数・集落規模を縮少し始め、その末期には急激な落ち込みをみせている。すなわち、該期における生産・消費体系の改変も一定の限界性を内包し、故に社会的矛盾を解消し去ることはできなかったのであり、対内的には人口増加と生産力との矛盾により、対外的には自然環境の変化—「気候の冷涼化」—により、中期社会は崩壊していったと考えられる。それは、社会的矛盾を内に潜在させつつも拡大し続けた中期社会の必然的帰結であり、その崩壊は既に中期前半の中に準備されていたと言える。つまり、中期前葉～中葉における社会的安定の中で形成された「個別化の方向性」は、中期後半に至り普遍的となり、屋内埋甕や石組石壇の盛行として顕在化したのであったが、それらは住居を単位とした「家族的・個別的な儀礼」の具現化を示しながらも、その基底においては、集落を構成する単位的集団全体にかかわる儀礼・祭祀の一部として、土偶祭祀や石棒祭祀と密接に結びついていたと考えられるのである。……このように、中期後半期は一方で主軸方向に代表される住居址構造をも規定するような共同体規制の強化としてあり、他方で祭祀や生産・分配の個別化という方向性も内在させているという二律背反的な内部矛盾を抱え、きわめて緊張した社会であったと言えるであろう」

以上、埋甕の現象的な側面からえられた諸属性の検討を行ってきたが、そこで明らかとなったのは、従来の埋甕に対する理解への疑問であり、端的にいえば、その否定であった。従来より半ば定説化しつつあった埋甕理解が、きわめて不自然かつ不都合であることがわかったいま、当然新たな見解を示す必要があろう。そこで、論述してきた現象的な諸属性をふまえたうえで、象徴的な側面、つまり、儀礼行為の一形態としての埋甕に焦点を

当てて、その用途・機能に迫ってみたい。

埋甕が何らかの儀礼行為の所産であることは、従来の各説において結論は違っても、共通認識としては承認されてきた点であり、疑問を提示する余地はない。しかし、今日ではその儀礼行為の内容・性格、すなわち、その起因する社会的要求や社会的機能の分担を明示することこそが強く求められるべきであり、それに基づく歴史的な意義を追求し解明されねばならない時点となっている。

ここで、人類学的理論を援用するならば、儀礼とは、「生命—生活を安定させるための実用的な活動」であり、「その第一義的な意味において人間の生活を自然や悪の力から守り、安全と繁栄を得るために行なわれる実用のための装置である」といえ、それはまた、儀礼に参加する人々の安全と繁栄に影響を与えるという点で、彼らの属する集団にとっては、彼ら自身がもっている道徳的価値—理想のよみがえり・再確認の表現であるといえることもできる。そして、こうした儀礼の背景には、儀礼行為を取り行うことによって超自然的な存在・力を発現・発動させ、人間の力ではかなわぬ「この世界—外的状態の変更」を行わしめるという論理が存在しているのであり、実効としては、「物質的な利害に起因する葛藤とか、秩序正しい社会関係の矛盾が原因となった社会的な葛藤との摩擦を和らげ、軽減」する方向に、あるいは、「社会的文化的なシステム内部に深く存在する矛盾を表現し、顕在化させると同時に、そうしたシステム内部の矛盾を隠蔽する」方向に作用するものと解釈される。

また、「儀礼」にみられる以上のような象徴的な機能とは別に、もう一点、本稿で取り上げている埋甕“そのもの”にも関わる特徴として、儀礼には「見えないものとしてある理念・観念といったものを一時的にせよ、見えるものとして示す“象徴”“メッセージ”がある」(S・ムーア、B・マイヤー・ホフ)という点を挙げるができる。象徴、すなわち、ここでは見えざる社会的な目的や意図を体現し、かつ、共有するための象標—シンボルの意味が重要なものとして把握されるが、先の儀礼上の象徴的機能という面からすれば、それは、危機的状況—構造と構造との狭間に行きあたってはじめて象徴的意味が具現化されるという点にお

いて、異なる「社会的構造の反映ないし表現」ではなく、より創造的な性格をもつものであるといえる。

ここでは、まさに本稿における象徴ともいえる埋甕に立ち返ってみるならば、埋甕が何らかの儀礼行為の所産と考えられるとき、埋甕は儀礼に伴う目的と意図をもったシンボルと考えることができる。そして、埋甕にそうした儀礼過程における象標＝シンボルとしての性格を与えるならば、埋甕の概念規定やその属性把握において重要な位置を占めていた、出入口部という特定の場＝空間もまた、象徴的次元に属するといえる。つまり、「出入口」という具体的な「場」も、縄文時代、少なくとも埋甕をめぐる儀礼を展開した中期後半期には、人々によって何らかの“抽象的文化領域”として、たとえそれが無意図的なものであったにしても、深く意識されていたと考えられるのである。

この「場」、とりわけ、「出入口部」をめぐる儀礼に関して、ファン・ヘネップによる「過渡の儀礼」の概念はきわめて示唆に富んでいる。「過渡の儀礼」は、門を入ったり、敷居をまたいだり、あるいは、村境を越えるといった「具体的通過」における、場所と空間の移動にまつわる“通過”の儀礼として扱えられるが、ここで注意されるのは、こうした具体的通過の場合に、“家の内と外”、“集落と集落”、“国と国”などの「あいだ」が中立地帯やどちらにも属さない領域として意識されるとともに、そうした領域が石や梁、敷居などによって象徴的に表わされるようになるという点である。ここにおいて、出入口部という家の内と外とを結ぶ空間で行われた埋甕儀礼は、そうした「どちらにも属さない領域」、すなわち、「境界的領域」に関する儀礼の中にその姿を端的に見ることができよう。換言すれば、埋甕をめぐる儀礼は出入口部という「境界的領域」に対して行なわれた儀礼であり、その儀礼行為の現象化した姿として今日扱えられる埋甕そのものは、そうした“出入口部儀礼”における象標＝シンボルの一形態であったと結論づけられるのである。そして、その時埋甕は、先に示した儀礼のもつ本来的な機能という側面からすれば、儀礼行為の統合する「場」である家の内、すなわち、「イエ」そのものを守護し、安全と繁栄を約束するという目的と役割を

その本質的な部分において与えられていたと考えられる。これは、先述した中期後半期という時代性と一致するところであり、また、そうした危機の時代＝境界性の時代においてこそ、儀礼行為および儀礼の目的的存在は、より現実性を帯びてくるのである。

以上が、今回到達しえた埋甕に対する理解の概要である。論理の飛躍は覆いようのない事実であるが、少なくとも、ここに示した理解が前記した埋甕のもつ諸属性に矛盾しないという点、また、それら諸属性を積極的に評価しようという点において、従来の諸説や昨今提出されつつある新しい方向性をもった埋甕論に対しても、より高い蓋然性を発揮し得るものと判断することは許されよう。

## V 埋甕と婚姻—その境界性を巡って—

埋甕が、不十分ながらも、「イエ」を単位とした個別象標であることを明らかにしてきたが、そうした埋甕が本来第一義的に担ってきた目的・役割という側面とは次元を異にする、先に提示した埋甕の埋設形態と使用される土器系統との相関関係についてみられたような集団的なあり方に焦点をあててみたい。

すでに、中・南信地方各地域で認められたように、埋設形態と土器系統とから総合される集会的なカテゴリーは、一定の核をもっており、実際の分布限を度外視すれば、模式的な分布状態を描き出すことができる(第6図)。これはあくまでも分布の単位をなす各集落の存在を一旦棄却した姿であり、この分布範囲がある特定集団の範囲を直接表現したとはいえないものの、その形態分布の偏在性は、背後に何らかの社会的範疇の介在を予測させるに難くない。そこで問題となるのは、その社会的範疇の性格・内容であるが、それが如何なる意味を示すのかという問いに対する解答は、俄には決し難いものがある。しかし、先に検討した埋甕の様相は、それに一つの解答を与えてくれる一面、すなわち埋甕の埋設形態が特定の土器系統と密接に結びついているという点においてであり、土器の系統が人間・人間集団に深く関わることを正当に評価するならば、個別的な境界象標の一形態として扱えられた埋甕はまた、社会的レベルの集団表象としても機能していたことを強く指示し

ている。すなわち、各地域をひとつの単位として認められたいくつかの埋設形態および土器系統をも含めたカテゴリーは、それぞれにある一定レベルの集団によって選択されたシンボルであったと考えられる。この点をふまえ、先の問いに立ち返るならば、埋甕の形態・カテゴリーに対応する集団レベルとして問題とされる範疇について、先づ第一にそれが集落あるいは集落群を単位とするような居住集団レベルのものでないことは、継続的か断続的かは別にして同一家族ないし同一子孫によって営まれたであろう建て替え行為にもとづく複数埋甕事例において、異なる埋設形態・土器系統を併存させている例が少なからず認められることをみれば明らかである。続けて結論的に述べるならば、ここで求められるべき集団のレベルは、彼ら自身とは集団表象を異にする部外者のまとまり—出自原理に基づく婚姻集団であったと想定できよう(註4)。つまり、埋設形態の相違は、婚姻の単位をなす出自系統の相違であり、逆に、婚姻というみずからの出自系統とは異なる部外者の加入を想定してこそ、埋甕のもつ諸属性や出入口部儀礼を含む儀礼が本来もっていた機能、すなわち、儀礼行為に関係する人々に安全と繁栄を約束するという役割に光明を投げかけることができるようになる」と解釈したい。

埋甕は、象徴的には中期後半期という社会の内部構造的な矛盾を抱え、構造と構造の狭間で不安と緊張に揺れ動いていた時代、いわば、安定した局面と局面との境界に出現した危機の時代にあつて、そうした根源的な構造変化・構造上の移行期のもとで自発的に発生したであろう“境界性”を潜在化に導くこと、より具体的にいえば、危機的状況が拡大することを阻み、さまざまな葛藤を解消することを意図したと捉えられるのであり、また、現象的には、そうした状況下でみずからとは異なる存在—異邦人としての部外者性をもった危険な存在—としての婚入者を象徴する土器(埋設形態・土器系統)を出入口部という境界状態の中に封じ、婚入者に儀礼的な死を与えて出自規制を断ち切り、みずからの家族・集団へ帰属せしめること—みずからにとって安全な存在としての再生を意図したと捉えられよう。そして、それはまた、一方で共同体規制の強化が進行する状況下で、す

で社会の奥深くまで浸透しつつあった個別化の方向性を保障するもの、より端的に示すならば、共通出自集団の単系的性格を保持するために必要とされた出自集団外婚規制のなかにおいて、「身内と婚入者との対立の克服—出自観念の一定の弱体化」なしには実現しなかったであろう“イエ”“世帯”の相対的自立(春成 1981)を保障するというすぐれて現実的な装置であったと解釈されるのである。そうした意味において、埋甕をめぐる諸相は、個別化の方向性と出自観念をも含めた共同体規制強化の方向性という、二律背反的な要素を合わせもった中期後半期という時代性—ジレンマという背景の中に、婚姻(出自規制が最も強く意識され、かつまた、他の出自集団に対してみずからの出自系統の独自性や対立、あるいは協同性がきわめて効果的に発揮される性格をもつ)に起因する諸々の葛藤を介在させてこそ理解できる現象であったといえよう。

## VI 結論

以上述べたように、埋甕はみずからに与えられた力によってはどうにも克服できない危機に直面し、そうした事態に対する超時空的な秩序づけを必要とした社会における必然的な帰結であり、なおかつ、ひとつの構造が崩壊に向かい新たな構造を模索した過渡期に、その危険に満ちた緊張の高まりのなかで生きぬいた人々の証しでもあったと結論づけられる。そしてそれは、いみじくも内部閉鎖性と外部開放性との相剋する矛盾原理を社会の深層に内在させていた縄文時代中期社会の末路をも象徴していたのであった。

縄文時代中期後半期において、埋甕は境界性を止揚するひとつの手段として展開したが、人々にそうした境界性をもたらした「自然」そのもののみずからをも包み込む大きな力であったが故に、根源的な解決を生み出すことはできなかった。現在、我々は自然を克服し、剰え不必要な破壊を繰り返している。地域に根ざした伝統的な社会・文化を喪失し、行先を見失った不透明で危機的な過渡性—境界性を帯びた社会に埋没するなかで、我々は、みずからにこの境界性をもたらしているものが他ならぬ我々自身であることを確認し、今こそ未来に通ずる境界性の淵に身を投げ、自己変革と回心にもとづく新たな構造原理を希求しなけれ

ばならない。いま将に、未来を映すべき歴史学としての可能性をもった考古学を、そして何よりもみずからを、思惟的なレベルにまで高める必要性に迫られているのである。

本稿は、第34回平出考古学セミナー(1985年5月11日)において、「屋内埋設論」と題して発表した内容をもとに、新たに稿を起こしたものである。その作業を進めるにあたり、「危機的状況に「立ち会う時に、我々は、如何なる共同体の象徴が喚起されるかということを知ることによって、共同体の世界像を再構成する手がかりを得ることができる」という山

口昌男氏による提言”(山口 1975)には大いに啓発される場所があった。記して敬意を表す次第です。

最後に、上述のセミナーでの発表に際し、貴重な御意見をいただいた桐原健・神村透両氏をはじめとする多くの方々、未発表資料の使用を心よく承諾して下さった山形村教育委員会ならびに殿村遺跡発掘調査団団長青沼博之、(財)長野県埋蔵文化財センター調査第一部長樋口昇一、同センター調査研究員で上木戸遺跡の発掘を担当された唐木孝雄、さらに、温かい御助言をいただいた市沢英利・佐々木藤雄の各氏に末筆ながら感謝とお礼の念を表し本稿の結びとします。(1985年12月25日)

- 註1 組原遺跡は昭和60年度塩尻市教育委員会により全面発掘調査が行われ、多数の埋甕が検出されているとのことである。報告書の刊行が期待される。
- 註2 太田切川を境とした地域区分については神村透氏の業績によるところが大きい(神村 1980)。
- 註3 私は旧稿(百瀬 1984)において、埋甕成立の背景として「幼児と母親との強い結びつき」・「幼児と集団との関係の相対的稀薄さ」を積極的に評価したことがあるが、本稿ではそれを一旦棄却し改めて私見を提出したい。
- 註4 埋甕の埋設形態と婚姻集団との関係については、丹羽佑一氏の論考(丹羽 1980)が提示されている。先にも簡単に触れたように、氏は天竜川水系に含まれる増野新切遺跡を中心に、尾越・荒神山遺跡の各埋甕構成要素を分析することにより、「天竜川水系諸遺跡における一つの埋甕集団像を想定できる」として、 $\alpha$ - $\beta$  集団と $\gamma$  集団という婚入者を中核メンバーとする二つの埋甕集団間における“父系父方交叉イトコ婚”の存在を結論づけている。しかしながら、氏の“父系父方交叉イトコ婚”の重要かつ唯一の根拠となっている $\alpha$  形態 $\rightarrow\gamma$  形態 $\rightarrow\beta$  形態といったサイクルを明確に示しうる資料は、本稿での分析では、荒神山17号住居址の $a-1 \rightarrow b-2 \rightarrow a-1$  という形態変遷をとる1例のみにすぎず、氏が同様なサイクルを示すとして例示した増野新切D-13号住居址例は、私の分析によれば $a-1 \rightarrow b-2 \rightarrow b-1$  という変遷を示し、交叉イトコ婚の存在の裏付けとはなっていない。つまり、氏が $\alpha$  形態の変異形である $\beta$  形態をとるとした同住居址出土3号埋甕は、報告書の記載によれば、同埋甕内に存在した台付土器は1次流入埋土と考えられる土層上の上の、埋甕のものからは浮いた状態で出土しており、氏のいう $\beta$  形態の定義(底部を欠損するが、他の土器片・土によって充填するもの)には該当しない。また、 $\alpha$  形態と $\beta$  形態との関係性に対する疑問、すなわち、なぜ $\beta$  形態が $\alpha$  形態の変異形( $\alpha'$ )といえるのか、あるいは、 $\alpha$  と $\beta$  とでは集団における系統上いかなる関係にあるのかという点に、論旨にかかわる重要な問題を残しており、誤解を恐れずに述べるならば、それは「底部の有無が形態上の要になっていると仮定」する氏の基本的な考え方も矛盾し、きわめて恣意的な解釈であったといえよう。さらに、交叉イトコ婚の存否について付け加えるならば、天竜川水系の上の林遺跡J-8号住居址例などを指摘するまでもなく、同一の埋設形態をとる複数埋甕事例は前表に示したごとく少なからず存在し、埋設形態の差異をもって氏のいわれるような交叉イトコ婚の存在を問うことは、現在のところできないと思われる。丹羽氏はまた、別稿(丹羽 1982)において、カリエラ族体系の分析により、「中期集団の諸関係総体が、カリエラ族体系と同一システムを展開していたといえるのである」という結論を導き出したうえで、該期の婚姻が“半族間における限定交換”であったという、きわめて閉鎖的なモデルを提示している。これに対しても、本稿での分析結果は各地域を単位とした一定の婚姻圏を認めつつも、そうしたレベルを越えた婚姻関係、つまり、ある地域内において埋設形態およびそれに使用される土器系統が客体的な存在として把握されるような埋甕事例から帰納される、より広範で複雑な婚姻関係をも示していたのである。中・南信地方における、こうした各集落・各地域を単位とする位相を異にした婚姻関係については、本稿の主題からはずれることもあり、別稿を起こして詳しく論じてみたいと考えているが、ここで、一応の見通しだけは述べておきたい。

本文中に述べた各地域のなかで、きわめて特徴的なあり方を示していた松本平を例にとれば、 $b$  形態を主体とする西麓地域と $a$  形態を主体とする東麓地域という著しい相異が目される。埋甕の埋設形態が集団に起因するもの

と捉えられるとき、この両地域は集団の系統上大きく二分することが可能であり、本文中第4図にみられた様相をみれば、それぞれ独立した集団関係を維持していたことが理解される。さらに、両地域の集団は、埋甕の埋設形態と使用される土器系統との関係から導びかれるカテゴリーを単位として細分され、この細分化された集団レベルこそ、本文でも触れるように、出自系統を異にする婚姻レベルに対応するものと考えられるのである。つまり、松本平西麓地域に限れば、同地域は少なくとも逆b-2・b-1・b-2という三つの形態に対応する集団系統により分節されていたと想定されるといえ、同地域内諸遺跡出土埋甕のあり方にみられるそれら各集団間の婚姻関係は、隣接集団あるいは同地域を南北に二分する程度の拡がりを基礎としたものであると把握される。しかしながら、そうした婚姻関係が、丹羽氏が述べられているような“父系父方交叉イトコ婚”や“カリエラ族体系と同一システムの限定交換”といった閉鎖性の強いモデルによるのみ律することは、先述したごとく不可能であり、松本平西麓地域におけるa形態(カテゴリー)の存在、あるいは、同東麓地域のb形態のあり方(b-1形態とb-2形態の比率が、その主体的分布域である松本平西麓地域での比率と等しい点など)からすれば、レベルを異にした集団間にも婚姻関係が取り結ばれていたことが十分に考えられる。そしてそれは、同一出自系統という非居住集団レベルの範疇を構成する各集落ないし集落の内部構造体、あるいは“イエ”が、地域内におけるみずからの空間的位置や利害関係等により、主体的な社会関係を維持していたことをも示しているのである。

### 引用参考文献

- 丹羽 佑一 1980 「埋甕集団の構成と婚姻システム」『奈良大学紀要』第9号  
 1982 「縄文時代の集団構造—中期集落に於ける住居址群の分析より」『考古学論考・小林行雄博士古稀記念論文集』
- 佐々木 藤雄 1981 「縄文時代の通婚圏」『信濃』33—9  
 1982 「集落を通して縄文時代の社会性を探る」『考古学ジャーナル』203  
 1983 「縄文時代の親族構造」『異貌』10号
- 田中 信 1981 「小室天神前遺跡」伊奈町天神前遺跡調査会  
 1982 「埋甕形態論」『土曜考古』第6号
- 桐原 健 1983 「埋甕」『縄文文化の研究9』所収
- 金子 義樹 1984 「縄文時代における埋甕についての一試論—事例分析を中心に—」『神奈川考古』第19号
- 岡本 孝之 1984 「縄文人の死産児」『異貌』11号
- 川名 広文 1985 「柄鏡形住居址の埋甕にみる象徴性」『土曜考古』第10号
- 百瀬 忠幸 1984 「縄文時代における地域性と地域集団—長野県中・南信地方をめぐって—」『異貌』11号
- 神村 透 1973 「南信地方の埋甕について—その学史と事例—」『長野県考古学会誌』第15号  
 1974 「埋甕と伏甕—そのちがいを—」『長野県考古学会誌』第19・20号  
 1980 「下伊那地方の縄文中期後半の様相—住居址を中心に—」『日本民族文化とその周辺 考古篇』
- 水野 正好 1978 「埋甕祭式の復原」『信濃』30—4
- 高林 重水 1971 「高河原遺跡発見埋甕のカッティング所見」『長野県考古学会誌』第11号
- 春成 秀爾 1981 「縄文時代の複婚性について」『考古学雑誌』第67巻第2号
- 高山 一十 1985 「ギリシャ社会史観」第一法規
- 山口 昌男 1975 「文化と両義性」岩波書店
- 綾部 恒雄 他 1984 「文化人類学十五の理論」中公新書
- 青木 保 1984 「儀礼の象徴性」岩波現代選書
- ヴィクター・ターナー 梶原景昭訳 1981 「象徴と社会」紀伊国屋書店
- E・R・サーヴィス 松園万亀雄訳 1979 「未開人の社会組織」弘文堂
- R・M・キーピング 小川・笠原・河合訳 1982 「親族集団と社会構造」未来社
- 桜井 徳太郎 1985 「結衆の原点—共同体の崩壊と再生」弘文堂
- 弓 削 達 1984 「明日への歴史学」河出書房新社
- 石 森 秀三 1985 「危機のコスモロジー」福武書店

(本稿を草するに際し資料として用いた報告書については割愛させていただいた。御容赦ください)

## 研究ノート・凹石研究のために ——学 史——

野村 一寿

- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| 1 はじめに            | 4 多凹石の研究  |
| 2 学史 その1—1980年代まで | 5 おわりにかえて |
| 3 学史 その2—現在にいたるまで |           |

## 1 はじめに

ある遺跡調査以来、凹石に対する関心を持ち始め、常々報告書などを注意して見てきた。凹石の分布・時期・形態・使用痕などの様相を知ろうとしたのである。しかし、報告書では中々詳細を知ることができないこともあった。それは凹石に限らず出土する様々な石器に対しても言えるのではないか。ひとつには石器に対する報告者側の理解の浅さが読み手に詳細を伝えない原因があるかとも思う。各種の石器は一体どのように使われ、役目を果たしてきたか、それを追及することは難しい。たとえ個人的な概念がなくとも、全体や個々の石器研究の現状を踏まえておく必要はある。それが残念ながら欠けているのではないか。報告書の中に見る石器の記述に対してそう思うのである。

さて凹石について、様々な観察点が多く、また用途を考える上で磨石や敲石との時期や使用上の関連を考慮する必要があるはずであるが、その扱い方に困惑していることもあり、また時には大きな石にくぼみが複数あつて、よく石皿などに見受けられる多凹石と同一に扱ったりしており、混乱もみられる。従って私は凹石の理解を深めるべく学史を学び、今一度整理しておきたいと考えた。本来ならどの石器についても研究の現状を提示しておけば、多くの方々の一助ともなろうが、今回は、凹石とそれに関連して多凹石の学史を取り上げてみた。拙いものながら、少しでも研究者の参考になればと思う。

## 2 学史 その1—1890年代まで

江戸時代の『雲根志』(木内 1801)をひもとくと、「凹石」という石についての記述がみられる。読

みは、「なかくぼいし」で、「色青く円き石なり石面指にて押したるごとく窪みあり」という説明がある。他には、小さい石に多く、地方によっては大きい石もみられるということや、何年かの中で数百の石を拾ったということも書かれている。くぼみの状況は似ているような気もするが、それ以外をみるとどうも今回扱う凹石とは相違するようである。判然としないが、参考までにあげておくことにした。

確実に文献にあがるのは1888年で、坪井正五郎による「貝塚とは何であるか」である。この中で凹石に対する固有名詞は与えられておらず、単に「砂石ニテ作りタル楕円扁平ナル器」とのみ記している。その用途については不明としながら2つの用途を記している。ひとつは「遊戯ノ為ニ投ゲタル物」、いまひとつは「拇ト中指ヲ凹ニ当テ人差シ指ヲ縁ニ付ケテ之ヲ保チ物ヲ打チ又ハ潰ス」ものとしている。繰り返すと、前者は投げて遊ぶとする遊戯説、後者は何が対象物となるか述べられていないが、敲打及び粉碎説ということになる。この用途について、本文の表現から、彼自身の考えではなくて当時一般にそう言われていた、という感じである。ここで特徴的なのは、くぼみそれ自体が結果としてできた使用痕でなく、またそのくぼみが他の物に直接作用をきたすというものでもなく、手で握りやすいように作出されただけであって間接的なはたらきしかしていないと考えていることである。

これ以後、しばらく『東京人類学会雑誌』を中心に、凹石についての資料報告や考察が発表される。

用途について各論を順に紹介していくまえに、ここで凹石の名称について先きに簡単に触れてお

くことにしたい。初めの頃は単に「凹ミアル石器」と呼び慣らわしていたようで(例えば若林 1889 a)、しばらくして「凹ミ石」(若林 1889 b)と略されるようになる。送り仮名の差だけではあるが、現在と全く同じ「凹石」となるのは1892年(若林)で、初出である坪井正五郎の論文よりわずかを経ただけで、以後この名称が次第に浸透、定着した。また近年では凹石の用途に基づいて名称を与えようとして、「敲石」(堅田 1965)と呼ぶことや「磨石」(管見では1970年代中頃から)と呼ぶことが、特に調査報告書の中で増えてきた。もともと、「磨石」として扱いつつ、さらにそれを分類して「凹石」という名称も合わせ用いることも多々あり、依然その名称は消えることがない。

さて、用途論に戻ることにして。先きに示した初出である坪井論文の翌年、若林勝邦(1889 b)の記したものがあつた。それによると、まずアメリカ人のチャールス・アボットの説として2つを紹介した。ひとつは一方のくぼみに親指、反対の面のくぼみに人差し指をあてて石器の縁辺部を利用して木の実や石などを砕く槌としたとし、またもうひとつは、磨面が見られることから石器を磨くものに使用したとしている。前者は先きの坪井の記しているところと同じであり、後者は砥石説を新たに述べるものである。さらに若林は、アメリカ人の某氏の説として、くぼみに木の実を置いて割る台として使用したことも紹介している。くぼみが2つある場合は、2つの木の実を並べて同時に割ったとする。ここではじめて木の実をくぼみに置くという、くぼみを直接利用した用途が問われた。

同年、犬塚又兵(1889)は凹石と多凹石を同一の石器と混同したまま砥石説を提唱した。特に多凹石のくぼみでは、細く尖った石器を磨いたとした。そしてそれまでの木の実や石などを敲打する槌説について、軟質の石材を凹石に用いていることから不向きであるとし、また合わせて台とする考えも否定した。なお多凹石の学史についてはあとで簡単に触れる。

そのすぐあと、新国西賞(1889)は犬塚の砥石説を批判した。ものを磨くならば、側面やくぼみにももっと磨痕が残っていなければならないことを根拠とした。またくぼみが片面1個のみとか両面

にそれぞれ数個あるものがあることから、くぼみに指をあてるのではなく、直接くぼみを利用して木の実や石を敲打する槌あるいは台とした。くぼみのうち、木の実を打つものはやや滑らかであり、石を打つ槌あるいは台とするものはせまく深いたとした。新国はくぼみの状況により対象物を木の実と石に分けて考えた。

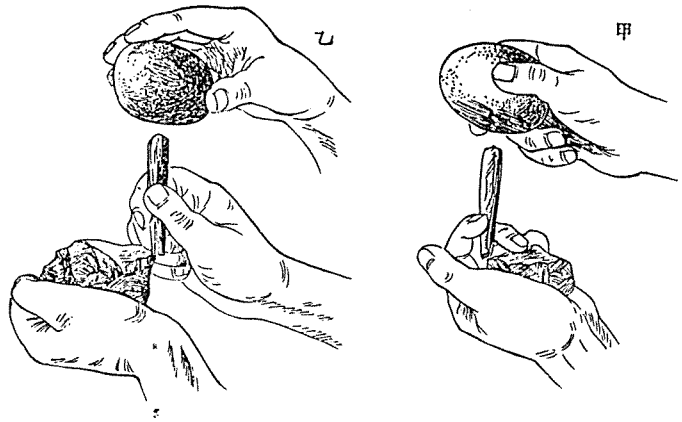
また羽柴雄輔(1889)は、磨痕のあるものは砥石に、ないものは貝殻あるいは木の実を砕く台とした。中でも磨痕のあるものは少ないと考えており、また木の実を割るといっても季節に限りがあることから特に貝殻を砕く台と考えるのが一番妥当だとしている。槌説に対しては、丸石を使うはずだとして否定し、台説を強く指示している。これに対しては若林勝邦の批評が同雑誌翌号(1889 b)にあり、羽柴の説はごく一部の地方のみで判断しているもので、一般に広く目を向ければ貝殻を割るものでもなければ台でもないことが知れるとして否定的な見解が出された。

翌年坪井は、くぼみのある石器を外国の事例から取り上げて、それが穀物を潰すものであることから、物をひき砕くものと示唆した(1890 a)。引き続き民俗例をひきながら、次に土器の内面を滑らかにするものではないかと推測した(1890 b)。但しここで残念なのは、前者にあげた類例が日本でみられるものと形状を異にし、後者にあげた類例の中には確かに凹石はあるものの、用途は憶測にすぎず、検討が充分果たされていないことである。

さらに翌年、田中正太郎(1891)は、中央にくぼみがあり、側面に磨痕がある表探資料1例を取り上げて石鏝製造の槌ではないか、と考えている。しかし、あまり具体的には述べられておらず、詳細がよくつかめない。石鏝の製造の槌とする考えは、その後八木柴三郎(1894)、佐藤伝蔵(1894)、再び田中(1896)が民俗例をひいて述べている。その中では佐藤がより具体的に触れており、事例をひいて図解によって詳しく述べている。佐藤は現在いう凹石を規則形凹み石と呼び、多凹石を不規則形凹み石として、その差異をまず明確にした。それは第一に形状が違うこと、第二に凹石のくぼみは一様でなく様々な形をなし、それに対して多凹石は決まって円錐形状を呈している。よってそ



の使用法も異なり、「前者は打撃の為に生じたる凹みの如く、後者は鈍き尖り者にて錐り穿ちたるが如し」と述べた。凹石の具体的な用法については第1図に示した通りであり、片手に石鏃の原料を持ち、獣骨もしくは象牙によってつくられたのみ様のものを打ち欠く位置にあて、そこを石で打つと石には自然にくぼみがつくとした。これはカリフォルニア州ウインタンス人らの事例をひいたとする。多凹石の用途については言及していない。



第1図 凹石の使用法(1)(佐藤1894:P399)

八木も石鏃製造の槌としながらも、同じ雑誌中(1894)でエスキモーが発火の際に用いるものと似ているとし、発火具としての役割を示唆した。また先きに記した佐藤は石鏃製造の槌として考えた2年後、次に発火具に使う道具であることを述べた(1896)。その使用は「木杖を木板に直立せしめ、之を回転して火を發せしむる際に、木杖の押へとして用いたるもの」だとし、現にアリューシャン諸島で行われていると述べた。佐藤は以前と相違した捉え方を示したわけであるが、それに対する経緯を、自身説明を付していない。すぐのちに鳥居龍蔵が同じく発火具説を述べた(1896)。鳥居は民俗例を参考にしながら、実験的に試みた上で論を展開した。実験ではひのきを台として地上に置き、同じくひのきの木杵をそれにあて、その木杵を押えるために凹石のくぼみを上に当てがって火を起こした。木杵を押えるにはある程度の重さがあることを指摘し、その便に凹石の有用性を訴えたのである。鳥居は凹石と多凹石の用途を同一視し、差異を求めていない。

以上ざっと書き並べたように、1888年に坪井がはじめて文献に凹石を登場させて以来、90年代は凹石の資料報告が増大し、それとともにその用途論が活発に展開された時期であった。次項に移る次項に移る前に、以下に箇条書きでまとめておくことにする。

- 投げて遊ぶとする遊戯説
- 木の実や石を敲打するための槌説
  - 石器の縁辺を利用するもの

- 石器の平坦面中央を利用するもの
  - ・くぼみの形状がせまく荒々しさのあるものは石を敲打する槌及び台
  - ・くぼみの形状がやや滑らかなものは木の実を割る槌及び台
- 木の実を置いて割るための台説
- 特に石鏃製作のための槌説
- 主に貝殻を砕くとする台説
- 石器を磨く砥石説
- 土器の内面を滑らかにするという説
- 発火の際に使用する火鏃杵を押えるものだとする発火具説

以上の通りで、1890年代の論壇は凹石研究にとって用途論のベースとなるものである。

### 3 学史 その2—現在にいたるまで

90年代をすぎると、既出の論をしばらくの間繰り返し、特に目立ったものはない。時の流れの中でいくつかの説は淘汰され、絞られていくようになった。以後、大雑把には木の実破碎具説、石器製造具説、発火具説が論じられた。またそのほかに凹石の報告が増加、蓄積されていくに従って、出土する時期や分布、石の平面形態の分類、くぼみの状況の差異なども触れられ、研究の幅が少しずつ広がっていくようになった。

平面形態の分類については1920年代頃まで多く問われた。その分類をほぼまとめてみると、規則形、不規則形あるいは整形、不整形とに分け、整形(規則形)とは円形・楕円形状のもの、不整形

(不規則形)とは細長い楕円形や自然礫様のものをいう。さらにくぼみの数で分類された。鳥居龍蔵は、形態によって使用目的が異なることを述べている(鳥居 1926)。それは、正円形の石に大きめのくぼみをもつものは衝撃する際の何ものかの台、それ以外を発火具、そして特に不整形の細長いものは石を砕く槌とした。

くぼみの状況については、すでに前項で触れたように荒々しくぼみと滑らかなくぼみと2つに分けて考える研究者もいた。それぞれこれをのちにはよくアバタ痕と回転磨痕などと表現することが多い。アバタ痕とは小さく浅いくぼみの集合したもの、回転磨痕とは丸く深くくぼみのものを言う。また長野県辰野町樋口内城館址遺跡(長野県教委 1974)では、出土した凹石のうち6個についてくぼみ部の状況がよくわかるように拡大写真を掲載しており、くぼみの状況の差異を伝えている。しかし、それについての意図は示されておらず、考察されていないのが残念である。また石器の長軸に対して右上がりのくぼみを呈すものが多いことを指摘する研究者がいた。これについてはのちに述べる。

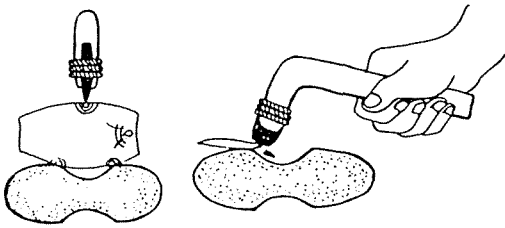
時期については、旧石器時代の終わり頃から弥生時代後期まで存続した。旧石器時代ではアバタ痕が集中するくぼみをもつものが多く、敲石に含めて報告されることも多い。中でも黒坪一樹は旧石器時代遺跡より出土した敲石を集成しており、容易に一覧することができる(黒坪 1982)。それによると、敲石を形態により7分類し、それを用途によって大きく3グループに分けて、それぞれ敲石、局部磨製礫、槌石(ハンマーストーン)とした。凹石にあたるものは敲石にグルーピングされてIV類として扱われており、量的には少なく、北海道・四国を除く列島各地に分布する。また敲石とは、石器製作に使われたばかりではなく、植物加工具としての役割も考慮する必要のあるものとし、そのために石器製作に確実に伴ったと考え得る槌石を敲石から分類したのであった。一遺跡内の出土状況について、敲石類は石器集中域から離れたところに多く、IV類とした凹石類も例外ではない。それに対し、槌石は同様に周辺部にも多いが、中心部にも高い比率で出土しており、敲石と槌石の出土状況の差異を指摘した。但し、その原因は追

及されていない。

縄文時代にはいると、くぼみの形状が多種にわたる時である。それによって形状の差に注意して用途の差を述べる研究者はいるが、それを考慮にいたした上で全国を概観する人はなく、凹石を一律に扱っているのが現状である。日下部善己は地域を東北・関東・中部・北陸・東海地方に限って石器の組成を論じた(日下部 1972)。その中で凹石のみを取り出して考えれば、草創期・早期では良好な遺跡自体が少ないこともあってよくわからず、早期から前期頃まで資料が散見され、中期には圧倒的に多くなる。特に東北・関東・中部・北陸では多く、東海地方は少ない。時期によって凹石と同じ増減を示すのは打製石斧であるが、一遺跡で注意すると、たとえば打製石斧が多く出土しているにもかかわらず凹石が見られない遺跡があるなど、組成の中で両者の相関は何ともいえない。また小林康男も石器組成を述べた(小林 1983)。関東・中部・北陸・東海地方を対象にして論じ、同じように凹石のみに注目すると、草創期では類例が少なく、爪形文・押圧縄文系土器を出土した尼子岩陰4層にみられるだけである。早期前半は房総半島・東京湾西岸・多摩丘陵周辺、後半は那珂川流域・東京湾西岸、前期前半は東京湾東湾・奥東京湾・中部高地・日本海岸、後半になると中部高地・関東地方にみられるが、量的には減少する。中期前半は中部高地・関東地方・東海地方、そして後半は同じく中部高地・関東地方と日本海岸の一部、飛騨地方にみられ、後期は中部高地に存在する。晩期に入ると量的には減り、日本海岸で若干みられる。簡単に記したが、おおよそ以上の通りとなる。西日本について私には詳しい情報はわからない。

弥生時代について積極的に述べられたものはない。桃野真晃は、凹石には打ち欠きによるくぼみ痕と回転磨痕のくぼみのあることを述べ、そのうち回転磨痕によるものが弥生時代に残るとした(桃野 1982)。但し、地域を踏まえた上で一考を要すると思われる。

さてまた用途論に戻ろう。大きく分けて石器製作具説、木の実割り具説、発火具説の3つに絞られてきたことは先きに述べた。その説ごとにとりあげていくことにする。



第2図 凹石の使用法(2)(中口1966)

まず石器製作具説を述べるものの中で、中心となるものを列記してみる。

堅田直 1965 『岸和田市春木八幡遺跡の研究』

帝塚山大学考古学研究報告 第1輯

中口裕 1966 「凹石の用途に関する一考察」

石川考古学研究会会誌 第10号

中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』

田辺昭三編 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』

桃野真晃 1982 「石器を作るハンマー —凹石の用途について—」考古学論考

などが知られる。

堅田は、石器製作の中でもサヌカイトを原石からたたき割って剥片をとったとした。サヌカイトより軟質の石を利用することは、サヌカイトにきずをつけることがないためである。また充分にくぼみの位置などを観察しており、例えば楕円の凹石によくみられる2つのくぼみは、長軸の上下を持ちかえて敲打することによってつく使用痕であるとする。あるいは、その打痕が長軸に対し斜めに走ることを指摘し、田辺は長軸に対し右上がりが多いことを付し、それは右手で敲打した結果と述べた。これについて実験をおこなって詳述したのは桃野であった。また中村は三井田忠の実験成果として「まだ凹痕のない礫石二箇を用い、一つは叩用に、もう一箇は台石にして、石器をつくらうとする剥片類を左指で持ち、台石の上に直立させる。そして右手にした叩石で剥片の上部を叩く、整形目的によって一打撃・数打・連打する。剥離はすすむ。その時下の台石は固定した一つの凹痕が残り、上の叩石には凹痕が若干の範囲にひろがった数打痕のある凹石ができる」と紹介しており、一考させられるものだとした。中口裕は小型石器を作る台としてやはり実験の成果を踏まえて

述べた。第2図1のようにしたとき、上からの圧力は強くても下では力が分散し、小さな剥離ができる。あるいは2のようにすると綺麗な剥離ができるとし、またこの際くぼみは深いほどよいと考えた。中口は多凹石も同様の用途を考え、くぼみが多いほどたくさんものを作出するのに好都合だとした。

石器製作具説として、槌説と台説とにわかれるが、いずれにせよこの説をとるとき中口説以外はアバタ痕(打ち欠きによったとするくぼみ痕)をもつ凹石のみを問題としており、凹石全体に適用しているわけではない。

次に木の実割り具説を取り上げてみる。木の実とは特に堅果類があげられ、中でもクルミが中心となる。

奥津春生 1943 「仙台飛行場遺跡より発掘された植物遺体について」

古代文化 14-1

武藤雄六・宮坂光昭 1968 「長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡第2次調査概報」

信濃 20-10

渡辺誠 1969 「縄文時代の植物質食料採集活動について(予察)」

古代学 15-4

1972 「縄文時代における植物質食料採集活動の研究」

古代学 24-5・6

木村剛朗 1972 「実験よりみた敲石とその用途(1)・(2)」考古学ジャーナル No74・75

斉藤基生 1982 「植物調理石器」季刊考古学創刊号

奥津は凹石のくぼみを詳細に観察して「極めて明瞭な『オニグルミ』の堅果特有の一本の縫合線や、深く複雑に切り込まれた隆起線や溝を認める事が出来た」として、凹石の拡大写真を掲げてそれを示した。このくぼみは、石器製作具説をとった時に考えられたくぼみ痕とはまさしく相違するもので、円形の深くくぼみとなっている。奥津が検討した凹石の出土した遺跡は弥生時代を中心とするもので、同時にたくさん植物遺体を伴ない、オニグルミも多く検出されていることは面白い。

渡辺は国内での民俗例を収集し、植物食の復原や重要性を主張し、興味ある成果を引き出しているのは周知の通りであり、多くの研究者に影響を与えている。凹石に関してもクルミの分布が東日本に多いことを指標とし、凹石の分布とほぼ類似性があることなどからクルミ割りの道具と解釈した。また武藤は実験を踏まえながら本説を推し進めている(藤森 1965: p154なども参照)。そして武藤は発掘の事例より中期後半頃から、凹石が多凹石へと変化していくものと考えた。それに関連するのは能登健(1978)で、「凹石をクルミなどの殻果類を破碎する道具とし、多凹石にみられる凹穴は、凹石による植物性食料の加工行為の結果そこに残された敲打痕を、食料の獲得や加工による食生活の安定を願って象徴化したもの」と述べ、同じように凹石から多凹石が生まれたことを述べた。斎藤はアバタ痕のあるくぼみは敲打が集中した結果で、それは堅い木の実を潰したものとした。

おおよそ以上の通りであるが、石器製作具説を述べる研究者は、くぼみの状況を重要視して詳細に形状を観察している傾向にあるのに対し、木の実割り具説ではそれがさほど感じられないのが特徴である。

また植物加工具説と考えた中で他と異にするのは木村論文である。木村は、発火具説、クルミ割り具説を否定し、指をくぼみに添えて縁辺部をローラー運動させることで使用する、製粉具を実験の成果として提唱した。

次に発火具説をみでみる。

藤森栄一 1963 「縄文中期文化の構成」考古学  
研究 9-4

1965 『井戸尻』

鈴木道之介 1981 「凹石・蜂の巣石」石器の基礎知識Ⅲ 縄文

藤森は、縄文時代中期に凹石の量が増加すること、一壜穴住居址内からも複数の凹石が検出されることなど、発火具としての火鑿杵の押えにしては量が多い点に疑問を抱きながらも、炉の周囲や炉石の一部に使われるなど、火と密接な関連があることを強調し、また「発火器中、唯一の不燃性かつ重量を要した部分」と考えてより妥当な結論とした。量の多いことは、中期の生活様式では、集落のまわりなど広範囲にわたって火が必要であ

り、それは「焼畑農耕の可能性の考えられるひとつの理由」であるとした。火鑿杵のおさえとして実験を行い、自ら確証を得ている。但し、藤森はほかの報告で、火との関連が強いといえども、火きりとの関連に固執する必要はなく「植物の加熱か調理に関係があるものと考えるほうが当を得ている」とも述べている(藤森・武藤 1964)。また藤森は、かつて凹石を撞撃具と考えていた(1943)。

鈴木は、凹石は火鑿杵をおさえるもの、多凹石は火鑿臼そのものである、という。

現在発火具説より、前2説が活発に論じられている。石器製作具説では、石鏃などの小型石器を作出するための台とする考えと、小型石器ではなく比較的大きな石器を作出するための槌とする考えとがあり、後者では特にアバタ痕の集中した、長軸に対し斜めに列状化されたものに限定している。また木の実割り具説では堅果類、中でもクルミを割ったと考えている。この2説の立場の関連や相互の明快な反論もなく、また各研究者自身何の批評も加えることなくどちらかの考えを指示することが多いのが現状といえる。

そのほかに長野県諏訪清陵高校地歴部(1969)が興味あるレポートを提出しているので触れておかなければならない。諏訪清陵高校地歴部は6通りの用途を想定した。1発火具、2湯を沸す、3壜穴住居を構築する際、床面を固くする、4皮をなめす、5縄状のもので縛って投げる利器、6宗教的意義、である。1と2については実験を行ない、発火実験では火鑿杵の押さえに使う場合と、下の台とする2つの実験をした。押さえには満足のいく結果が得られ、台では煙もでない。よって台は木でなければならなかった。発火具説については、当時の人々が容易に火を絶やすことはないであろうから、出土量が多いことを考えても発火具とするのは早計であると考えた。2では、凹石を熱し、それを直接水中に投入して湯を沸かそうとしたが、水が汚れるだけで適さないという結論を得た。3についての詳細はない。4については、凹石の増える縄文中期前半には、逆に狩猟具である石鏃が減少すると考えて、獣皮をなめすと考えるには不合理として否定した。5は考えに飛躍がありすぎるとしてこれも自ら否定した。6については、一住居址から出土する事例が多いことから重要な必

需品であり、従って呪術的・象徴的なものではないか、とするものである。しかしこれも想像以外の何ものでもないとして消極的である。結論的には想定した6通りとも自ら否定的な立場をとることになるが、面白い内容をもったものである。

#### 4 多凹石の研究史

関連して多凹石の研究史を概観しておこうと思う。多凹石の研究史は五十嵐幹雄がまとめている(1982)。

まず名称については、1888年の坪井論文(1888)に「火徳石ニ凹ミヲ付ケタル器」と表現されている。五十嵐のまとめた研究史では、名称を初め「火徳石」と呼んだとしているが、「火徳石」とは単なる石材を指しているだけで、多凹石の名称ではない。翌年犬塚又兵(1889)は凹石を含めて「蜂巢ノ如ク凹ミアル石器」と呼んだ。山崎直方(1893 a・b)は「ドリルド・ストーン」と呼び、佐藤伝蔵(1894)は凹石を「規則形凹ミ石」としたのに対して「不規則形凹ミ石」とした。鳥居龍蔵(1896)は「蜂の巣石」、中村士徳(1903)は「雨滴石」、「蜂窩石」、また八幡一郎(1928)は「蜂の巣石、多孔石、雨垂石など呼び慣せるも、余は多凹石とせり」とし、「多凹石」を使っている。おおよそ以上の通りであるが、そのうち蜂巢石、雨滴石(雨垂石)は比喩的なものであって、規則形凹ミ石・不規則形凹ミ石とは凹石を含めた分類上、便宜的に呼んだものである。多孔石の場合、「孔」は突き抜けている「あな」であってくぼみを指すものではなく、従って多凹石の呼称がより実際であるとして私はこれを用いることにした。但し、多凹石とは「凹石」に「多」が付されているだけなので、なんとなく凹石と同一線上のもののような気にもなり不安が残る。

用途についての学史は、凹石の項で重なる箇所も多いため、考慮しながら簡略してまとめていくことにする。

初出は1877年のモースの大森貝塚の報告(E・S・Morse 1879)の中に、多凹石と考えられる一文がある。これを岩波文庫の近藤義郎・佐原真(1983)の訳文から拾うと「平らな側に円錐形の穴をいくつもくぼめた扁平な石も少しみつけた。石の上に穴を意図的にならべたとは思えないし、また石

を穿孔する意図もみられない。穴は径18~20mm、深さ9~21mmである」と「石器」の項の中で述べている。また「内面には損耗のあとがあり、おそらく臼の破片であろう」とあることなどから石皿の裏面か縁辺に多凹石様のくぼみが施されていることが読みとれる。用途は触れていない。

凹石の用途について最初に触れた坪井が、同じ論文(1888)の中でやはり多凹石の用途についても触れており、木の実を割る台だと一般に言われているが、どうだろう、という感じで述べている。翌年犬塚(1889)は凹石と多凹石を全く同じものと見做して砥石説を提唱し、多凹石にみられる複数のくぼみは、細く尖ったものを磨いたと考えた。山崎(1893 a・b)は木片を摩擦して火を得るものとして発火具説を唱え、佐藤(1894)は、凹石の項で触れたように凹石と多凹石のくぼみの形状の差を訴えながら、用途については言及していない。鳥居(1896)は凹石と多凹石を区別できず、火鑽杵の押えと考えた。しかし、その後「ただ同じくあなをもってはいても凹み石類と同一用途に当てたものでない事は想像される」(1926)と考え直している。八幡も同じように「通常の凹石と共通せる意義を有せりや否や不明なり」(1928)と言い、「多凹石の用途に就いても之を知る手懸りが無い」(1934)と述べた。中口裕は、前項で触れたように多凹石と凹石を同一用途と考え、小型石器を製作するための台とした(1966)。やはり前項と重なるが、能登健は多凹石のくぼみは「食生活の安定を願って象徴化したもの」として植物別工具と考えた凹石から変化したものと述べた(1978)。鈴木道之介は凹石を火鑽杵のおさえ、多凹石を火鑽臼と紹介している(1981)。五十嵐は長野県内の例を用いて、くぼみの状況、出土状況などを勘案して、植物加工用の台と祭祀用に分けた(1982)。

以上をまとめると、植物加工用の台、砥石、発火に使う火鑽臼、小型石器を製作する台、食生活の安定を祈願したとする呪術的意義のあるもの、という考えにまとめられる。これからも知れるように、多凹石は大きく重いためもあって、置いて使用するものであることは間違いない。しかしながら、満足のいく用途論を展開するものはなく、混沌としている。

## 5 おわりにかえて

机上の作業だけと知りながら、現段階での感想を書き留めておく。

凹石のくぼみは果たして使用の結果によるものか否か。恐らくアバタ痕と呼ばれるくぼみは使用によってついたものであろう。列状右上がりが多く、桃野真晃の実験が示すように右手で物を叩いたに違いない。ではその対象となった物は何か。凹石の欠損率は非常に低く、くぼみのあたりから折損する例も少ない。かと言ってクルミのように凹石よりやわらかいものでは使用痕はつきにくいであろうし、経験的にはクルミを割るにはたたくよりも軽く押しつぶすようにした方が綺麗に割れる。従って凹石より硬質の対象物であって、凹石が折れない程度の衝撃で事足りる使用であったのだろう。私には石器製作具説と考える研究者の実験には興味を惹くものがある。果たして石を打ち欠いたものであろうか。ではアバタ痕といわれるくぼみ以外の凹石はどうか。私自身くぼみの形状を分類する作業を行っていないので、いかなる種類があるのかわからない。とにかく一概にひとつの用途に括ることは危険であり、慎重を要するものであろう。また注意しておきたいことは、磨石と同様な磨痕が観察されることも多く、あるいは縁辺部に打痕のみられるものがあり、磨痕や縁辺部敲打痕とくぼみの関係は一連の作業工程を意味するのか、ということである。

以上、まさしく感想を述べた。一応研究史を一通りまとめたのだから、自分自身の今後のために展望を書き連ねておこう。

まず必要なのは、くぼみの形態とそれに付随するであろう石の形状や他の使用痕との関連を考えることである。その差異を考慮にいれた時期・分布をおさえることはいうまでもなく重要な基礎的作業となる。その上に立って石器の組成を考えることは必要であるし、また異なる自然的・地理的

条件にある地域・遺跡の比較も手がかりとなるだろう。逆に凹石が出土しない遺跡・地域・時期は、それが何故かを考えることも良いのではないか。実験的方法を用いることも重要である。今は、これらの基礎的な工程を怠った前段階であり、今後の指針としたい。

多凹石について付言しておく。

発火具説に対して私は否定的である。何故ならば、台となる板は木であるからこそ火が起ころるのであって、石では火は起こらない。またその地上に置く板は、木の縁を使うことが重要であり、中央では発火しない。詳細は示さないが、以上はかつて行った実験の成果である。

多凹石は、凹石以上に不詳のものであって、分布も時期も確実におさえられておらず、またくぼみなどの形態分類も行われていない。出土個数が凹石などに比べて少ないことも原因かもしれない。あるいは石皿・石棒などからの転用も多く、その点でも複雑にしている。多凹石についても同様に研究されなければならない。

本レポートは、石器の中で凹石・多凹石という一部のものを扱った。石器研究から見れば小さな問題であるかもしれない。とはいっても、これを機会に思うのは、一体どれだけ個々の石器研究が進んでいるのだろうかということである。長い研究史の中で、実際にはなおざりになったまま、さらに同じことを繰り返している部分もあるのではないだろうか。

最後に、本稿は個人的なノートにすぎず、紙面を汚したことに恐縮を感じている。またこれをおこすにあたって多くの方々から励ましのあったことに感謝の意を記して小稿を閉じたいと思う。なお本稿は、大学時代の所属研究会で発表したものに加筆したものである。

## 引用文献

- |   |         |      |                                 |
|---|---------|------|---------------------------------|
| イ | 五十嵐 幹 男 | 1982 | 「多凹石考」中部高地の考古学 II               |
|   | 犬塚 又 兵  | 1889 | 「蜂巢ノ如ク凹ミアル石器ノ話」東京人類学会雑誌 4—41    |
| カ | 堅 田 直   | 1965 | 「岸和田市春木八幡遺跡の研究」帝塚山大学考古学研究報告 第1輯 |

- キ 木内小繁 (石亭) 1801 『雲根志』後編卷之三
- ク 日下部 善 己 1972 「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相」  
福島考古 13
- 黒 坪 一 樹 1982 「先土器時代敲石類の集成」・「敲石類・磨製石斧をめぐる分布論」  
『野沢遺跡発掘調査報告書〈A地点〉』本編
- コ 小 林 康 男 1983 「組成論」縄文文化の研究 7 道具と技術
- サ 佐 藤 伝 蔵 1894 「常陸国福田村貝塚探究報告」東京人類学会雑誌 9—100  
1896 「陸奥国亀ヶ岡第二回探究報告」同上 11—124
- ス 鈴 木 道之介 1981 「凹石・蜂の巣石」石器の基礎知識 III 縄文  
諏訪清陵高校地歴部 1969 「土」3
- タ 田 中 正太郎 1891 「飛騨国石世期の遺跡」東京人類学会雑誌 6—62  
1896 「台湾見聞録」同上 12—128
- ツ 坪 井 正五郎 1888 「貝塚とは何であるか」東京人類学会雑誌 3—29  
1890 a 「ロンドン通信 (凹みある石器の用)」同上 5—53  
b 「ロンドン通信 (印度土器師の石器)」同上 6—55
- ト 鳥 居 龍 蔵 1896 「発火用紐維に就ての事実 日本石器使用人種ノ発火法」東京人類学会雑誌 11—  
126  
1926 「先史及原史時代の上伊那」
- ナ 中 口 裕 1966 「凹石に関する一考察」石川考古学研究会会誌 第10号  
長野県教育委員会 1974 「樋口内城館址遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野  
町その2』
- 中 村 士 徳 1903 「石器土器埴輪の二度探し」考古界 2—12
- ニ 新 国 西 賞 1889 「楕円或ハ円形ニシテ小穴アル石器ノ考」東京人類学会雑誌 4—42
- ノ 能 登 健 1978 「縄文時代の凹穴に関する覚書」信濃 30—4
- ハ 羽 柴 雄 輔 1889 「凹みある石器の用法に就き所見を述ぶ」東京人類学会雑誌 4—43
- フ 藤 森 栄 一 1943 「南紀田辺湾下芳養の縄文式遺跡について」古代文化 14—1  
1965 「井戸尻」
- 藤森・武藤雄六 1964 「信濃境曾利遺跡調査報告書」長野県考古学会誌 1
- モ 桃 野 真 晃 1982 「石器を作るハンマー—凹石の用途について—」考古学論考
- ヤ 八 木 装三郎 1894 「本邦諸地方より発見せる石器の種類」東京人類学会雑誌 9—95
- 八 幡 一 郎 1928 「南佐久郡の考古学的調査」  
1934 「北佐久郡の考古学的調査」
- 山 崎 直 方 1893 a 「下総曾谷、千葉の二貝塚に就て」東京人類学会雑誌 8—84  
b 「下総貝塚遺物図解」同上 8—85
- ワ 若 林 勝 邦 1889 a 「凹ミアル石器ニ関スル質問ノ答」東京人類学会雑誌 4—39  
b 「貝塚ノ貝殻及凹ミ石」同上 5—44  
1892 「日向ニモ亦石器時代ノ痕跡アリ」同上 7—71
- E・S・Morse 1879 “Shell Mounds of Omori” Memories of Science Department,  
University Tokio Japan Vol : I part I  
(近藤義郎・佐原真編訳 1983 『大森貝塚—付関連史料—』)

## その他の参考文献

- 石 川 恒太郎 1968 「宮崎県の考古学」
- 一 条 孝 夫 1973 「縄文時代における労働用具のあり方について—特に東北地方南部について—」  
研究紀要3 (福島大学考古学研究会)
- 神奈川県教育委員会 1977 「尾崎遺跡」

- 小林 康 男 1973 「縄文時代の石器研究(1)・(2)」信濃 25-7・10  
 1974・75 「縄文時代生産活動の在り方(1)~(4)」信濃 26-12、27-2・4・5  
 1978 「縄文時代の磨石」中部高地の考古学Ⅰ
- 小林行雄・佐原真 1964 『紫雲出』
- 酒 詰 仲 男 1940 「本邦先史石器類概説」人類学先史学講座 19
- 田 中 正太郎 1893 「飛騨国吉城郡国府村三川組字エンダソラ遺跡」東京人類学会雑誌 8-89
- 坪 井 正五郎 1910 「諏訪湖底石器時代遺物考追記(-)」東京人類学会雑誌 25-287
- 鳥 居 龍 蔵 1924 『諏訪史』 第一巻
- 中谷 治宇二郎 1943 『日本石器時代提要』
- 能 登 健 1981 「信仰儀礼にかかわる遺物(1)」神道考古学講座—前神道期
- 南 久 和 1984 「縄文時代後晩期の木器・骨角器及び北陸の石器組成の諸問題について」『金沢市新保本町チカモリ遺跡—石器編—』
- 武 藤 雄 六 1965 「長野県諏訪郡富士見町大畑遺跡第三次調査報告」長野県考古学会誌 3  
 1968 「生産用具の変遷と背景」『海戸 第二次調査報告書』
- 吉 田 格 1965 「日常生活用具」日本の考古学Ⅱ 縄文時代
- 渡 辺 誠 1969 「東日本」新版考古学講座3 先史文化  
 1975 『縄文時代の植物食』  
 1983 『縄文時代の知識』
- このほか参考としたかったが、入手できなかったものがある。以下に記す。
- 松 村 瞭 1920 「琉球荻堂貝塚」東京帝国大学理学部人類学教室研究報告 第三編 石槌の項に凹石のことが記載されているということである。



長野県埋蔵文化財センター紀要 1 1987

発行日 昭和63年3月20日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4  
TEL (0262) 93-5926

印刷 信毎書籍印刷(株)

〒380 長野市西和田470  
TEL (0262) 43-2105